たが、

『いゝえ。』と、あくまでも知らぬ顔をした。

幹太郎は、じつと八千代の顏を見た。その眼には、恨みとも憤りともつかない、はげしい表情が涙の底からきらめいてゐた。

『八千代さんは駄目だ。うそをつくから駄目だ！』

幹太郎は、急にかう叫ぶと、くるりと横を向いて了つた。

『あら、幹太郎さん！』

八千代は、思はず幹太郎の肩に手をかけて、

『何をそんなに腹をお立てになるのよ。』

『駄目だ。あなたはうそをつくんだもの。』

幹太郎は、頭を左右に振りながら云つた。涙が頰に亂れ落ちた。

それを見ると、八千代は、急に此の少年がいとしくなつた。而して、幹太郎と一緒にわツと聲を

擧げて泣き出し度い氣がした。

『幹太郎さん！』

八千代は、両手で幹太郎を、ひきよせ、思はず、その細く痩せたひよわさうな肩を抱くやうにした。

恥深き會話

八千代から思ひ掛けない告白を聞いた關口謙三は、しばらくの間、茫然としてそこに突立つてゐた。

もう、何も彼もおしまひだ！

彼の前には、眞暗な絶望の淵が大きな口を開いてゐた——

最初、博士から一切の事を告げられた時、謙三は、よろめく程打ちくだかれた。彼は、八千代に裏切られたと思つた。博士に出しぬかれたと思つた。彼は、憤然として、席を蹴つて博士の前を立たうとした。

憤然として、席を蹴つて立たうとする謙三を、博士はすがるやうにして引止めた。そして、兩手をつかぬばかりにして謙三に賴むのであつた。むしろ、哀願するのであつた。

『どうぞ。わしを許して呉れ。わしの一生一期の過失なのだ。わしを許して、そして、あの娘をも許してやつて呉れ。お前があの娘と結婚して呉れさへすれば、わしも救はれるのだ。あの娘も救はれるのだ。どうぞ、眼をつぶつてあの娘と結婚して呉れ。』

恩誼のある博士の、然うした哀願の前には、謙三も、その強硬な態度を持續することが出來なかつた。こゝで、憤りを殘して博士を去れば、博士と自分との緣は切れて了ふ。博士との緣が切れゝば、自分の社會上に於ての又學界に於ての存在は甚だ覺束無いものになる——その一身の利害の打算が、やがて彼の心にのぼつて來た。

『なるほど、彼女は、もう處女では無い。あれの身體は純潔を失うてしまつた。が、あれの心は——なあ、關口君。わしの口からこんな事を云ひ出すのは、はなはだ異なものだが、いや、蟲が好過ぎるとも、また、圖々しいとも思ふかも知れぬが、貞操といふものを、然う狹隘に解釋せんでもいゝとわしは思ふのだが——中世凡の、乃至、傷敎的のだな、そんな窮屈な貞操觀に囚はれんでもいゝこわしは思ふのだが——それは單なる過失なのだからな。わしにとつて過失であつたと同樣、あの娘にとつても全く過失であつたのだ。あの娘の身體は兎に角、あの娘の心は些とも汚れては居らんのだからな、なあ、關口君。わしの口から君に斯んな事を云ふのは、全く勝手過ぎるといふものだが——』

博士の言葉には、許し難い狡猾さが含まれてゐる事に氣がつきながらも、謙三は、次第にその蟲

の好過ぎる理窟に引き入れられて行つた。そして、それだけの疵の爲めに捨て去るには、あまりに美しい珠玉である事も考へられて來た。

だが、博士の言葉が、唯、それにとゞまつてゐたならば、謙三は、今日斯うして八千代に求婚の申出をしはしなかつたであらう。謙三が、なほ、むづかしく考へ込んでゐるのを見ると、博士は、謙三の肩に手をかけるやうにして、

『そこでだね。關口君。』

と、少し聲を低めて云つたのであつた。

『もし、君が、わしのたのみを聞いて、あれと結婚して呉れるならば、わしは君に課した苦痛の爲めに、一つの償ひを君にしようと思ふ。もし、君が、わしの云ふやうにして呉れるならば、君はわしにとつて再生の恩人だ。いや、もし、こんな事が世間にぱツとなつて、わしの不德が、人々の非難のうちにさらされでもすれば、わしはとりもなほさず生きながら葬られねばならん。それ故、斯うして何も彼も君に打明けて頼むのだがね。もし、ここで君がわしを救つて呉れるならば、わしは十分に君の恩にむくいるつもりなのだが――君も知つての通り、わしの方の山脇は、今度、朝鮮大學の方へ行く事になつたが、その後任は未だきまつて居らんのだ。で、わしは、君を推薦しても

いいと思つてゐるんだがね。勿論、後援會などは、わしの一存でどうにも左右出來るのだが――』

博士は、流石に憚り深さうな調子で、かう、囁くやうに謙三に云つたのであつた。

謙三の心は、ここに至つてはじめて決定的に動いたのであつた。功名に燃ゆる若い學徒の心を釣る可くこれ以上の好餌があらうか？　謙三は、思はず、面上に躍る血のほとぼりを感じた。が、あまりにも現金な心の動きを、稍〻はづかしくかへりみながら、

『ですが、僕はそれでいゝとしても、八千代さんが、それを承知するでせうか？』

『承知する。屹度、承知する、――その一つの弱點が、あの娘の心を弱くしてゐる。あの娘の心は今、燒かれてゐる鐵なのだ。打てば打つやうに、曲りもすればくねりもする。』

謙三の承諾に――言葉では兎も角、謙三の表情は、既にはつきりと承諾の意を示してゐた――やうやくほつと安心した博士は、皮肉な微笑を、かすかに口もとに漂はしながら斯う云つたのであつた。

このやうにして、關口謙三は、今日、八千代に再度の求婚の申出をしたのであつた。愛するが故に！　美しい情熱で言葉を飾り乍ら、彼が八千代の前に繰返したその申出は、しかし、いかにみじめな結果をもたらした事ぞ！

謙三は、茫然として、そこに突立つてゐた。

背後に足音がした。

謙三は氣がつかなかつた。――セルの單衣に、兵兒帯を結んだ博士が、屈托さうな顔をして、彼の背後に歩み寄つたのであつた。

『關口君！』

博士は呼びかけた。

謙三は振返つた。彼は、空虚な眼に博士を映して、凍つたやうな無表情な顔をしてゐた。

『關口君。君は、八千代に――八千代さんに、話したのか？』

博士は、かう聞いた。

『えゝ、話しました。』

謙三は、無表情な言葉で云つた。――が、彼の死水のやうに無表情な顔に、その口もとの、痙攣めいた薄笑ひによつて波立たせられた。

『そして、どういふ返事だつた？』

『……』

謙三は、それには答へずに、強く唇を嚙みながら博士の顔をみつめた。その眼には、見る見る鋭い輝きが凝集し、顔面筋肉のわなゝきが次第に加はつて、やがて憤るともなく恨むともない、ある激しい表情が、そこに現はれた。

『八千代は、何と云つたのだ？　八千代は承知しなかつたのだといふのか？』

『八千代さんが、承知しても、僕の方で――』

と、謙三は吐き出すやうに云つた。

『いやなのです！』

『可厭だ？　ぢや、君は、急にまた氣が變つたとでもいふのか？』

『僕は御免を蒙ります。』

『何故、急にそんな事を云ふのだらうな？』

『ぢや、先生は本當に何もお知りにならないんですか？』

『何も知らないか？――一體、それは何の事なのだ。』

博士は、思ひ惑ふやうにして云つた。

『本當にお知りにならないのならば、僕から申上げませう。先生、八千代さんは、處女でないだけ

ぢや無いのです？』

『處女でないだけぢや無い？』

『あの人は、姙娠してゐるのです。』

謙三は、毒々しい調子で、斯う露骨に云つた。

『姙娠？』

博士の聲は、筒抜けて走つた。

『さうです。あの人は打明けました。あの人は、先生――あなたの爲めにもう母になりかけてゐるのです。』

博士は、呆然として眼を睜つた。睜つた眼を二三度またゝいた。いくらか殘された疑ひが、動顚から、辛うじて博士を支へた。

『いや、そんな事は無い。そんな事はない。』

博士は、囈言のやうに云つた。

『しかし、八千代さんがうそを云ふわけはありません。』

『いや、それはうそだ。――そんな事は無い筈だ。そんな事は――』

博士は、苦くしうめくやうに云つた。

『あなたが、うそだと仰有つても、私としてはあの人の告白を信ずるより外ありません。そんな事は無い筈だと仰有つても、事實、然うなら仕方が無いのですからね。』

謙三は、冷然として云つた。憤りと恨みとの代りに、冷笑が、その青褪た頭に凍みついてゐた。

『――本當か？　關口君、本當に八千代はさう君に云つたのか？』

『うそだとお思ひでしたら、先生御自身で八千代さんに聞いて御覽になればいゝです。いや、僕だつて、どんなに、それがうそである事を望むか知れません。しかし、事實は飽迄も慘酷です。――先生、私は、大抵の事ならば、先生の爲めに忍ぶつもりですが、それは僕には少し重過ぎます。今度は私の方から先生にお願ひ申し上げます。どうぞ、私を、此のあまりに苦し過ぎる義務から解放して下さい。――私は失禮いたします。』

謙三は、斯う云ひ捨てゝ歩き出した。

『關口君。まあ、少し待つて呉れ給へ。わしは、もう少し君に話し度い事がある。一寸でいゝからわしの書齋に來て呉れたまへ。』

『いゝえ。今日はこれで失禮させて頂きます。私は何だか氣持が惡くなりましたから。』

謙三は、素氣なく云つて、逃げるやうに博士の前を立ち去つた。

今まで、謙三が立ち悸んでゐたその同じところに、同じかたちで、今度は博士がぼんやりと立つてゐた。八千代の肉體の祕密――はじめてそれを知つた博士の驚きは、謙三の驚きに、まさるとも劣りはしなかつた。

そして、博士の驚きは、やがて、堪へ難い不安に變つて行つた。

破滅だ！　若し、それが本當ならば、おれも愈〻破滅だ！

博士は、今更のやうに、甲斐ない悔いを繰返した。あの、ふとした氣紛れが、どんなに高い價を以て支拂はなければならなかつた事か？　若し此の事が――一人の處女を弄んで、彼女をして私生兒の母たらしめたといふ事實が、世の中に公表されたらば、自分の名譽、地位、あらゆるものは一朝にして喪はれて了ふだらう？　それを考へると、博士は眼の前が、眞暗になる思ひがした。彼は呻くやうに、心の中で云つた。――だが、あの娘が身重にならうとは！　それは一體、何といふ惡運だ。何といふ不幸な偶然だ！

關口謙三が、博士からの再三の使者に促されて、博士の邸にやつて來たのは、それから一日置い

たあくる日であつた。

『關口さんが、いらつしやいました。』

女中が、斯う取次いだ時、博士は、裏庭の池のほとりの榻に腰をおろして、晩凉の風に葉卷の煙を靡けながら、屈托らしく考へ込んでゐたが、

『ぢや、書齋へ通して呉れ。』

と云ひながら立ちあがつた。

書齋の入口のところに謙三はぼんやりと立つてゐた。博士は、

『やあ！』

と會釋して、先に立つて書齋へはいらうとしたが、又思ひ返したやうに、

『いや、此方がいゝ。此方へ來て呉れたまへ。』

と云ひながら、二階に上つて行つた。そして、圖書室へはいつて行つた。

圖書室は、部屋の眞中に立てられた、兩面の本棚で、二つにしきられてゐた。その一方の、窓際に置かれた小卓を中にして、二人はさしむかひに腰を掛けた。北向の部屋は夕近い落着いた光線の中に、ぎつしりと棚につまつた背皮の金文字を、ほのかにきらめかしてゐた。人のはいつて來ない

此の靜かな部屋は、折入つての相談には、最もふさはしい部屋だつた。

『いや、來て呉れてありがたう！』

博士は先づ斯う云つて氣まづい沈默を破つた。

謙三は一寸頭を下げた。頭を下げたまゝ、じつと卓の上をみつめるやうにして居た。謙三は、自分の愛する女を横取りした男として、どうしても博士を許す事が出來ない氣がした。彼は、身體全體に、反抗的な氣持を示してゐた。

『なあ、關口君。君は此上、もうわしから何も聞き度くは無いと云ふのだらう。だが、どうだらう。もう一度、考へ直して貰ふわけには行くまいか？』

博士は下手から出て斯う云つた。

『考へ直すといふと、どういふ事になりませう？』

謙三は、皮肉な調子で云つた。

『姙娠が事實とすれば、それは、君にとつては忍び難い事だらうが――いや、こんな事をいふのは全く蟲の好過ぎる話なのだが――どうだらう？　君は既に五十歩を讓つて呉れた。更に百歩を讓つて、わしの願ひを肯いて呉れるわけには行かないだらうか？』

『ぢや、どうしても八千代さんと、結婚しろと仰有るんですか？』

『結婚しろ！　などといふのぢや無い。そんな命令的な乃至强請的な氣持で云つてゐるのぢや無いのだ。わしは賴んでゐるのだ。わしにとつては實に一期の浮沈なのだからな。』

『ですが、先生――』

と、謙三の聲は冷やかだつた。

『それは、先生のお言葉ですが、少し無理ぢやあ無いでせうか？　あの女は處女ぢやあ無い――處女ぢやあ無いと云ふだけなら、未だ忍んで忍べない事はありません。いや、私は忍ぶつもりでしたけれど、もう姙娠してゐる。先生、あなたの子をですよ。それを、私が妻にするなんて――そんな事がどうして出來るか、私の身にもなつて見て下さい。』

『いや、子供の事については、わしも考へがある。その子供が生れたら、無論、わしの責任としてわしの手で育てるなりどうなりする。勿論、公然と然うするわけには行かない――併し、その時になればその時の處分法はいくらもあらうといふものだ。だから――』

『先生。』

と、謙三は、博士の言葉を中途で遮るやうにして、

『何故、先生御自身八千代さんと結婚なさらないんです？』

『いや、それは不可能だ。』

『何故でせう？』

『あの女はわしを愛しては居らんし、わしもあの女を愛しては居らん！』

『先生はあの人を愛してゐない事は無いと思ひます。先生は、あの人を愛していらつしやるのですけど、唯、世間が怖いのでせう？』

『わしを憐んで呉れ。わしは、もう老人だ。わしは、もう一圖に愛に生きるだけの氣力は無いのだ。』

博士は、淋しさうな笑ひを浮べた。何處かに精悍なところのある、何處かにまだ若々しさの殘つてゐるやうに見えた博士が、此頃急に力無げに老い込んで了つた事に、謙三は、此時今更の如く、氣がついた。殊に、窓外に迫つた暮色が、その顏の陰影を濃くして、憂悶の窶れを、みじめに刻み出してゐた。

『で、つまり世間體をつくろふ必要から、是非、私を八千代さんと結婚するやうにと仰有るんですかね。』

『さう云ひ切られては困る。――だがまあ、何と君に云はれても、もと〳〵わしの失敗なのだから、それは仕方が無い。實際、わしが君にどんな無理な註文を持出してゐるかといふ事はわしもよく心得てゐる。その代り、關口君、わしは、別の方面で、それだけの酬いはするつもりなのだ。わしは、贖罪の貢物を君に捧げようと思ふのだ。』

『……』

『關口君、わしは一昨日君に話したやうに、君を大學に推薦しようと思ふ。が、君の希望次第ではすぐ海外留學といふ事にしてもいゝ。勿論、大學からといふわけには行かん。その費用ぐらゐは、私が出してもいゝ。』

謙三は、ちらと眼をあげて、上眼づかひに博士の顏を見た。

『わしも貧乏だ。だから、澤山の事は出來ない。しかし、一萬ぐらゐの金ならばどうにかなる。八千代の化粧料といふ事にでもして、君に進上してもいゝ。――いや、金の事を云ふと卑しくなる。が、君は學徒だ。學徒としての君の將來も、及ばずながらわしが引受ける。教授會でも博士會でもわしは然う無勢力な人間では無い――』

謙三は答へなかつた。が、彼の心が動き出した事は、輝きを增した眼の色にも知られた。大阪の

方の、貧しい商人の子と生れて、不十分な學資で、半ば苦學同樣にして、大學を出た謙三にとつては、自由に洋行が出來、また少なくとも五六年は落着いて研究の出來るだけの金が得られるといふ事は、踴躍す可き福音で無ければならなかつた。自ら秀才の名を負ふところの、競爭心の强い彼は敵手として立つ同學の二三人の顏をも、その時思ひ浮べずにはゐられなかつた——

『いや、こんな事を云つても、君が、あの女を愛して居無いならば仕方が無い。物質によつて愛を購ふ可からざる事は、わしと雖も、心得ては居る。が、君は、あのやうにあの娘を愛してゐた。君は、愛によつて、すべてをゆるすといふわけには行かぬだらうか？』

博士は、斯う云ひ添へた。これは、如才ない言葉だつた。さうだ、彼女を愛するが故に——利害の打算は第二、第一に彼女を愛するが故に——謙三は、そこに、今の心の動き方に對する一つの辯解を見出したやうに、あわてゝその言葉に飛びついた。

『然うです。私は、勿論、八千代さんを愛してゐるのです。八千代さんを愛してゐるのです。』

此の力無い言葉、いさゝか滑稽な調子をさへ含んだ言葉——謙三の口から出たその言葉が、謙三の心臟に反響した時、謙三は流石に自分自身にきまり惡くなつて、すこし顏を赤くした。が、もう日が暮れきつて、粉つぽい闇にほかされた部屋の空氣は、その謙三の恥がましい顏附を、はつきり

と對手の眼には映さなかつた。

『なあ、關口君。わしの願ひは無理だ。まつたく無理な願ひだ。だが、そんな事にして、一つ、わしの願ひをきいては呉れまいか？』

博士は、撫でるやうな調子で云つた。その眼には、ほつとした安心の色と共に、矢張、心の恥を包む者の、或る疚ましげな表情が浮んでゐたが、同じやうに、黃昏はそれを對手の眼から隱した。

『兎に角、もう少し考へさせて下さい。』

謙三はさう云つたが、それは、もう承諾の意を示した言葉だつた。

『どうぞ、考へ直して呉れ給へ。』

博士の言葉にも、安堵の調子があつた。

やがて、二人は圖書室を出て行つた。

階段を降りて行く二人の跫音が、聞えなくなつてしまつた時、二つにくぎられた一方の、書棚の蔭にわなゝいてゐた八千代は、くづをれかゝる身體をすつくと起して、手にしてゐた厚い一冊の洋書を、兩手でべり〳〵と引裂いた。そして、床の上に力一ぱいに叩きつけた。

うす闇の空氣の中に、彼女の頰は、海の底の人魚のやうに靑褪めてゐた。そして、涙が靑褪めた

頬に流れてゐた。が、そのきつと嚙みしめた唇のあたりに、冷やかな笑ひが刻みつけられてゐた。

八千代は、しばらくの間そこにゐたが、

『八千代さん！　八千代さん！』

と呼ぶ宮子の聲が、階下の何處かから聞えた。八千代は、跫音を偸んで階下に降りると、何氣ない顏をして、食堂の方へ出て行つた。

『八千代さん、御飯よ。』

宮子が云つた。

『御飯、私欲しくないのですけど――』

『さう？　どうかなさいましたの？　顏色がお惡いわ。』

『どうもしないのよ。青い顏してゐて？』

『えゝ。』

『へんねえ。』

と、八千代は一寸頬に手をやつて淋しく笑つた。

『八千代さん、どこにいらしつたの？』

『お庭の、あの芝生のところにゐたのよ。』

『さう？　何をしていらしつたの？』

『御本を讀んで居ましたの。』

『あら、だつてこんなに暗くなるまで。』

『御本を讀んでゐるうちに、ついうと〳〵と眠くなつたの。私、すこし眠つたやうだわ。』

八千代は、笑ひながら出鱈目に云つた。

『まあ、芝生の上でお眠りになつたの？　毒だわ。そんな事なすつちや。』

『うと〳〵眠つてゐるうちにね、私、へんな夢を見たのよ。』

『どんな夢？』

『お魚になつて、硝子の鉢の中に泳いでゐる夢なの。』

『まあ、へんな夢ね。』

『とても、へんな夢なの。そして、人に賣られた夢なの。でも買手はなか〳〵買はないの。買ひ手は買はないのに、賣手の方で、無理に賣らうとするの。』

『まあ！　それで、ガラスの鉢の中に泳いでゐるの？　ぢやあ、金魚なのね。』

『金魚だつたか知ら、それとも鯉だつたか知ら？　よく判らないけれど、金魚見たいなかあいお魚ぢや無かつたやうだわ。若しかしたら鯰だつたかも知れなくてよ。』

さう云つて、八千代は面白さうに笑つた。

『まあ、鯰？』

宮子も一緒に笑つたが、八千代の笑ひ聲に妙にヒステリツクな響が籠つてゐるのを、宮子は聞きのがしはしなかつた。宮子は、笑つてしまつてからけろりとした八千代の顏を、不思議さうに打戍つた。

ある喜劇役者

謙三が、八千代に會ひ度いと云つて訪ねて來た時、八千代の口もとには抑へきれない冷笑が湧きあがつた。が、彼女はさりげない樣子をして、いや、寧ろ愛想よく、其あまりに熱心過ぎる求婚者を迎へた。

いつもきちんと身の廻りを整へてゐる謙三は、此日、殊に裁り立ての夏服を着て、カラも襟飾も眞新しかつた。髪もきれいに梳いて、少しばかり香水の匂ひなどもした。全體の樣子に、舞臺に登つて來た役者のやうな、緊張が見られた。――が、此の役者が、あまり上手な役者で無ささうな事は、妙にへごもどと落着のない樣子をしてゐるのでも知られた。

『まあ、闊口さん、今日は大そうおめかしね。』

謙三が部屋へはいつて來るなり、八千代はかう笑ひかけた。

『僕、あなたにお話しがあるのですが――お邪魔ぢや無いでせうか？』

謙三は、ぎごちない調子ではじめた。『別に邪魔でもございませんけれどね。』

と、八千代は笑ひながら、

『生憎、私、今日は少し頭痛が致しますの。ですから、あまり面白くないお話でしたら、又此の次にしていたゞき度うございますの。』

『面白い話ぢや無いかも知れないんですが、眞面目な話なんです。』

謙三は、早くも狼狽の色を示しながら云つた。

『あなたのお話は、いつも眞面目ね。あなたは少し眞面目な話をなさり過ぎるやうですわ。』

『兎に角僕たちにとつての大問題なのですから、ごうぞ聞いて下さい。』

『僕たち――といふ複數は、一體、あなたとそれから何方の事なのですの？』

『僕と、それから八千代さん、あなたの事なのです。』

『まあ、私の事？　ぢや、つまりあなたと私との大問題といふ事になりますの？』

『えゝ。さうなんです。』

『私には、そんな大問題なんか無い筈でございますがね。――あなたには大問題でも、私には、何でもない小問題かも知れませんわね。』

『否、そんな事は無いと思ひます。』

謙三は、言葉に力を籠めて云つた。

『さうでせうか？　ぢや、まあ、云つて御覽なさいませ。』

『八千代さん！　僕はあれから非常に煩悶したんです。』

『何を煩悶なすつたんです。』

『あなたの事でですよ。――僕は、先生から先生とあなたとの事を聞いた時、絶望のどん底に叩き伏せられたのです。しかし、最初の絶望からは立ちあがる事が出來ました。それは失望ではあつたのですが、絶望では無かつたのです。けれども、一昨々日、あなたから、あなたの祕密を告白された時、僕は、世界が眞暗になつた氣がしました。萬事窮す！　と思つたのです。實際、あなたを愛する――生命にも換へてあなたを愛する僕にとつて、それはあまりに慘酷な事實ですもの、僕の第二の絶望は、文字通り絶望だと思ひました。僕は、もう、あきらめるより外無いと思ひました。僕は、あきらめるやうに、自分自身を説得しました。僕の理性と、僕の感情とは血を流してたゝかひました。僕がどんなに此の戰ひの爲めに苦んだか？　八千代さん、あれから今まで、僕は、殆ど眠る事も食ふ事も無しに、煩悶し續けたのです。その結果、僕は、矢張あきらめきれない心をそこに見出したのです。僕は、愛の力が何者よりも強く、何者よりも偉きいといふ實證を、僕自身の心の

中に掴み得たのです。八千代さん！　それで僕は――僕は――』

どもりながら、問へながらにではあるが、兎に角、こゝまで一息にしやべり續けて來た謙三は、この時、眼をあげて相手の様子をうかゞふ爲めに、こゝで言葉を切つた。

おや、割にうまく云ふわねえ。屹度、暗誦して來たのだわ！　と、思ひながら、八千代は謙三の講義めいた言葉を聞いてゐたが、それがとぎれると、それから？　と、あとを促すやうに、謙三を見た。その眼と謙三の眼とがそこでぶつかつた。謙三は何の感動をも示してゐない、どころか、朝りの色をさへ浮べてゐる八千代の眼を見ると、走つてゐた馬車が、急に溝の中にでもころがり込んだやうな、張合ぬけと氣落ちとを感じた。

『ね、八千代さん。』

と、謙三は一層語氣を激ますやうにして、

『僕は、眞面目に云つてゐるんですよ。あなたも眞面目に聞いて下さらなきや――』

『あなたの眞面目なのはよく判つて居りますの。私だつて眞面目に聞いてゐるの。どうぞ次をつゞけて下さい。』

『僕は、眞面目なのです。』

謙三は、やゝ悲調を帶びたやうな聲で叫ぶやうに云つて、

『ねえ。八千代さん。僕は一切を許す事が出來ます。愛はすべてを許します。愛するが故に――さうです、愛するが故にです、愛するが故に、僕はあなたの既往を問題の外に置き、あなたのその過失の結果をも、そのまゝ僕の手に受け容れようと決心しました。八千代さん。僕は改めて、あなたに求婚します。どうぞ、僕と結婚して下さい。』

かう云つてしまふと、初めて白を云ひ終へた役者のやうに、謙三はほつと溜息をついた。そして手巾をその汗ばんだ額に押しあてた。

『ぢや――』

と、八千代は冷やかな微笑を口もとに湛へながら、かう口を切つた。

『あなたが、私を愛して下さるので、私の過失を許して、私と結婚して下さると仰有るのですね。』

『さうです、僕は何も彼も一切を許し得るのです。こゝに、不可思議な愛の秘義を學び得たのです。』

『一切を許して――と仰有るのね。でも、關口さん、私は、何も許してなんか頂き度く無いのよ。私、些とも、あなたから許してなど頂く必要はないのですもの。あなたから許して頂かなければな

らないやうな罪を、あなたに對して犯した覺えは、私、些ともございませんもの。』

あくまでも冷やかに八千代が斯う云ふと、謙三は、さも思ひがけない言葉を聞く、といふやうにその細い眼を丸くして、ぐる〳〵と二三度瞳を動かした。彼の顏は、氣の毒なほど混亂した表情で騷ぎ立つた。

『いや、それはその通りでした。あなたの仰有る通りでした。許すなぞといつたのは、僕の云ひ方が惡かつたのです。それは取消しますから心持を惡くしないで下さい。唯、何卒、僕の苦衷を——僕のあなたに對する愛を、どんな犧牲をでもその爲めになら甘んじて捧げようとする僕の愛を、どうぞ、受け入れて下さい。僕は、改めてお願ひするのです。』

『でもねえ、關口さん。』

と、八千代はやゝ眞面目な顏附になつて、

『あなたは本當に私を愛する事が出來て？　他の子をお胎にもつた女を、やがては、他の子の母にならうとする女を、本當に心から愛する事が出來るとお思ひになつて？』

『僕は、出來るつもりです。いや、屹度出來ます。』

『私はね、第三者として、あなたに忠告してさしあげます。そんな冒險はおよしなさい。ね、しま

ひには、屹度みじめな事になつて、あなたは後悔なさるに違ひ無いんですもの。』

『いや、そんな事はない。僕は、決して後悔なぞしない。』

『あなたも強情ね。』

八千代は、苦笑した。その、たまらない嫌惡の表情の中に、憐むやうな色がちらと動いた。八千代は怒り度いと思つた。が、怒れなかつた。この、一生懸命でまづいお芝居をしてゐる喜劇役者が、何となく憐れなものに思はれて來たのであつた。

『いや、僕は決して後悔などしないです。僕は、僕の愛の力を信ずるのです。』

語氣は強かつたが、その調子は崩れてゐた。自白間際の罪人の抗辯を思はせるやうな、自信のない調子だつた。

『關口さん。あなたは、私を本當には愛しては下さらなかつたけれど、併し、少なくとも私を好いてゐては下すつたのね。好意だけは持つてゐて下すつたのね。今のあなたではないわ、今のあなたは違つてゐるけれど、前のあなた、一昨々日までのあなたは、私を好いて呉れた。私に好意をもつて下すつたあなただつたわ。だから、私だつて、一昨々日までのあなたの好意にむくいるだけの好意は、あなたに對してもつてゐるのよ。その、好意から、私、眞面目に——さうよ、私、これだけ

は眞面目に云つてゐるのよ――あなたに忠告してあげますわ。ね。そんな取引はお止めなさい。』

『取引？――それは一體どういふ事なんです？』

『あなたは、未だお芝居を止めないの？』

『お芝居？』

謙三は、色を變へてたじ／＼となりながらも、土俵際に立ち直るやうにして、斯う反問した。

『一昨々日までのあなたはお芝居ぢやあ無かつたけれど、今のあなたはお芝居をしてゐらツしやるぢやありませんか？』

『あなたは何か誤解していらツしやる――』

あわてた顔、白け切つた顔・おど／＼とをのゝく顔を、謙三は、間拍子悪く捧げてゐた。

それを見ると、今まで抑へて居た腹立が、急に八千代の胸元にこみあげて來た。

『どこまでもとぼけるなら、はつきりと申し上げますわよ！』

と、八千代は、叩きつけるやうな調子で、

『あなたは、一萬圓とかのお金がそんなに欲しいのですか？　洋行して大學教授になる爲には、他に汚された女を妻に有ち、その不貞の妻と一緒に關口さん、あなたも男一匹ぢやありませんか？

そんなさもしい、見つともない眞似をなさるなよ！』

その時の謙三の樣子が、どんなにみじめで、さうして滑稽であつたか？　喜劇役者として眺めるには、しかし、あまりに悲慘であつた。彼は、兩手でがた／＼とふるへる膝頭を抑へ、恥の爲めに眞赤になつた顏を、置き忘れたやうに押し据ゑ、眼も口もぽつかりと開いたまゝ、云はうとして云へない口もとをぴくぴくとひきつらせてゐた。

『ぢやあ――』

魚のあぎとふやうに、咽喉をふくらまして幾度も喘いだ後で、謙三は漸く斯う口を切つた。

『ぢやあ、先生が、そんな事まで、あなたに話したのですか？　そんな事をあなたに云ふなんて、先生の氣持が僕には判らん！　判らん！』

半ば獨言めいた調子で謙三は云ふのであつた。

『あの人は、卑怯者です！』

と、八千代は極度の侮蔑を以て、そのあまりに愚かしい謙三の樣子を見やりながら、

『しかし、そんな事を私にいふほど、馬鹿でもなければ、圖々しくもありません。』

『ぢや、どうして――？』

『昨日の圖書室での御相談を、すつかり傍でうかゞつてしまつたのでございます。』

『さうですか！　あゝ、さうですか？』

謙三は、溜息をつくやうにして斯う云つたが、どうやら、その態度を立て直すと、

『八千代さん！　先生からそんな話があつたのは、あなたがおきゝの通り事實です。併し、それはそれ、これはこれです。僕のあなたに對する愛は、そんな事とは關係なく、儼とした一つの事實なのです。そんないろ〳〵の條件は、先生の方から持ち出したので、僕の方から別に――』

しどろもどろな調子で云ひかけた謙三の言葉は、甲高な、乾いた八千代の笑ひ聲で中斷された。

『ほゝゝ！　負惜みもいゝかげんになさるといゝわ。』

『負惜しみだなんて、決して、そんな――』

『闘口さん。私、少しうるさくなつたわ。あなたの拙いお芝居は、もうこのくらゐにして幕を引いた方が宜かあ無くつて？』

八千代は、もう一度、冷刻な侮蔑の眼を投げつけると、しゐからうるささうに、二三度強く首を振つて、半ば、背を謙三の方に向けた。

さうだ。喜劇役者は、もう退場す可きであつた。が、何處までもへまな此の喜劇役者は、引込みの

きつかけを失くして、未練らしくそこにもぞ〳〵としてゐた。

と、扉にノックの音がして、そこへはひつて來たのは、思ひ掛けずも、博士であつた。

はひつて來るなり、博士は、此の場の異様な空氣に、先づはッとしてしまつた。――博士は、謙三對八千代の折衝が案じられるので、一寸前から、扉の外に立つて、内部の様子を窺つてゐたのだつた。内部での會話は、はつきりこき〻とられなかつたが、八千代のヒステリックな調子が、折々甲高に聞えたので、穏かならぬ形勢とは察し知られた。博士は、あの祕密な相談が、八千代に立ちぎきされたとは夢にも知らないので、自分が其場に出て行つて、謙三に口を添へたら圓滿に事が運ぶかと考へられた。で、扉を開いて、中へはいつたのであるが、一歩踏み込むや否や、博士は、その輕率を悔いずにはゐられなかつた。謙三は、泣き出さんばかりのみじめな顏をして、混惑の極度に我を失つてゐる。八千代は凍つたやうな顏をつんとそむけてゐる。はげしく投げ交はされた言葉の名殘が、その邊の空氣を、未だ騒立たせ、そこに濃密な殺氣――いや、殺氣と云ひ切つてしまへるほど單純でない、或る冷たい、そして重苦しいものがみなぎつてゐるのであつた。

博士は、臆病な眼を二人の顏から顏へと移したが、然うして突立つてばかりも居られないので、二人の間にむづと坐つた。而して、しばらくを一つしてから、

『八千代さん！』

と、聲をかけた。

『何でございます。』

八千代は、屹と見迎へた。その眼は――その、いくらかの涙でしめつてゐる眼は、利刄のやうな鋭さで、きらりと、博士の額際を一瞥した。

博士は、その一瞥で、まづ、すつかりと度膽をぬかれてしまつた。

裂かれたる心臓

八千代の鋭い一瞥で度膽をぬかれた博士は、二の句も繼げずに押黙つてゐた。――暴風の前？底深い沈黙の幾秒かがそこにあつた。

『先生。』

と、やがて八千代が口を開いた。

『關口さんから唯今いろ〳〵と伺ひました。いろ〳〵蔭ながらの先生の御深切は、御禮の申上げやうも御座いません。』

八千代は、昂奮を押鎭めながら皮肉な調子で云つた。

『わしは、八千代さん、あんたの爲めに――』

博士は、關口から八千代へ、八千代から關口へと、忙しく眼を移しながら、かう云ひかけたが、八千代はその言葉を横から奪ひ取るやうにして、

『御深切はありがたう御座いますが、先生のお勸めには從ひ兼ねます。關口さんに、今、おことわ

りを申上げたところで御座います。いゝえ、私、此の方に御忠告申上げたので御座います。』

『忠告？』

『然うで御座います。』

八千代はきつぱりと斯う云つてから、改めて博士の顏を見上げた。彼女の顏は、稻妻に照らされたやうに青ざめ、その激しい憤りが、屹とした彼女の姿を、凄愴な美しさで燃え立たせた。

『先生！』

と、彼女は、涙ぐんだ眼に博士を睨みながら云つた。

『私は、先生に申上げて置いた筈でございます。斯んな事になつたのは、先生の過失ばかりでは無い、私自身の過失でもあるんですと。だから、私は、先生にばかり責任を負はせようとは思ひませんと、さう私は先生に申上げた筈で御座います。私は何も彼も相手に押しつけて、女の弱さを楯にして、自分の責任から逃げようとするやうなそんな卑怯な女ではございません。だから、今まで、私の身體の事などは、先生に申上げないで居たのでございます。たとひ、どんな事があらうとも、先生に御迷惑のかゝるやうな事はしまいと、然う思つてゐたのでございます。それなのに、先生は——先生は——』

そこまで云つて、八千代ははら〳〵と涙を頰につたはらせて、

『先生は、何と云ふ事をなさるので御座います。先生は、私を此の人に、賣らうとなさるのでございますか？　まるで、品物か何かのやうに——』

『賣らうとするなんて、そんな事は無い。そんな、そんな馬鹿な事は無い。それは誤解だ。飛んでも無い誤解だ——』

博士は、へどもどと、見苦しくたじろぎながら云つた。

『然うでしたわね。お金をお出しになるのは、先生の方でしたわね。だから、賣らうとなさるのだと云つたのは私の間違ひでございました。賣るどころか、お金をつけて私の始末を此の人に御頼みになつたのでございましたね。』

『金をつけて？　そんな事を——』

と、益〻狼狽した博士は、謙三を見やつて、

『關口君。君はそんな事まで、すつかり八千代さんに話したのか？　馬鹿な！　馬鹿な！　そんな事まで——』

『いゝえ。先生、僕はそんな事を云やしないのです。云やしないのです。』

關口は、叱られた小學生徒のやうに、おど〳〵と博士の顏を見上げた。

『君が云はないで、どうしてそんな――どうしてそんな――』

博士は、性急に繰返しながら、八千代と謙三と、二人の顏を見くらべるやうにした。

『ほゝゝ！』

この、醜い同志打を見ると、八千代はヒステリツクに笑つた。そして、

『先生！』

と、博士を呼びかけて、

『この人は正直な人ですからね。何も彼も私に話して呉れましたの。先生が、一萬圓のお金を下さるさうだから、それに、留學もさせて下さるし、大學教授にもして下さるしするさうだから、それでお前と結婚したいのだと、この人は、正直に私に話して呉れたのでございます。お前などを妻にするのは閉口だが何しろ代償が素晴らしいからと、ほゝゝ、此の人は、然う何も彼も白狀したのでございます。』

『關口君。君はそんな馬鹿な事を――』

博士は、眞赤になつて、謙三を睨んだ。

『いゝえ。先生、僕がどうしてそんな事を、そんな事を――』

謙三も、同じやうに眞赤になつて、思ふやうに云へぬもどかしさに苛立ちながら、唯、斯う繰返すより外無かつた。

『君が云はなくて、どうしてそんな事が八千代さんに判るんだ。』

博士は、語るに落ちる事をも忘れて、益〻いきり立つて謙三を責めた。

『違ひます。先生、まさか僕がそんな事を、そんな事を――』

と、謙三は、寧ろ哀願する樣な眼附で、八千代と博士の顏を見くらべたが、

『僕は失禮します。僕は――これで御免を蒙ります！』

と云ふや否や、すつと立ちあがつて、逃げるやうに部屋の外に姿を消してしまつた。

『ほゝゝ。とう〳〵逃げたわ！　氣の毒な喜劇役者さん。引込みがつかないで、今まで困つてゐたのよ。』

八千代は、博士に云ふとも無く、獨言めいた調子で斯う云ふと、もう一度、

『ほゝゝ！』

と、ヒステリイらしく笑ひ聲を立てた。

博士は、何か云はうとして、唇をふるはしながら、流石に恥深い眼を、やり場もなくさまよはしてゐた。

『先生。もうこれでお芝居の幕は下りました。本當に飛んだ喜劇でございましたわね。』

『八千代さん。あなたは誤解しとる。』

『あら、未だ何かせりふが殘つて居りますの。仰有るほどほろが出てよ。私、もう何もうかゞひ度くは御座いません。』

『わしは、そんなつもりぢや無かつたのだ。あんたが思ふやうな、そんなつもりぢや――』

博士は、なほ未練らしく辯解しようとする。

『そんなつもりでなきや、どんなおつもりでございましたの。』

『わしは、あんたの爲めに――』

『先生！』

八千代の眼は、鞘走つた短刀の如く、發止と博士の眞甲を切りつけた。

『どうぞ、そんなお爲めごかしは措いて下さいませ。私の爲めに――などと仰有らずに、何故、御自分の爲めに――と、正直に仰有らないのです。私、先生がこんな卑怯な方だつたとは、今の先刻

まで知りませんでした。云へば云ふほど口惜しくなりますから、私、もう何も申上げませんけど――』

八千代の激しい憤りは、次第により激しい悲みによつて打克たれて行つた。彼女は覺えず涙ぐみながら、

『過失と云へば過失で御座いました。けれど、先生、先生の御心持では、唯一時の戯れでしか無かつたかも知れませんが、私は、長い間、先生を尊敬もし、又、お慕ひもしてゐたのでございます。それに、本當の愛では無かつたかも知れません――先生が、若し、本當に私を愛して下すつたなら、私はいない心になつてゐたのでございます。その心をいつまでも持ち續ける事が出來たかも知れません。けれども、先生が私にお求めになつたのは、唯、私の身體だけだつたのでございます。而して、先生は、私が面倒になり出すと、あの男に、猫の子か何かを呉れるやうに、私を呉れておやりにならうとなさいました。先生、私は自分で自分を支配する事の出來ない女ではございません。私は、私の知らない間に、一人の男から一人の男へと、私の身體が讓り渡されるといふやうな、そんな屈辱に忍ぶ事は出來ません。私の支配者は私自身でございます。私のよろこびも、私の悲みも、私の過ちも私の悔いも、皆、私のものでござ

います。私の身體は勿論私のものでございます。」

云ひ續けるうちに、憤りが再び悲みを凌いで彼女の胸に燃えあがつた。が、彼女は、その憤りを冷たい微笑に凝固させた。

『もし、そんなにまで私といふものが、先生にとつて御迷惑でしたなら、何故然う私に云つて下さらないのです。私は、私自身でどうにでも私の身體を處置致しますのに。いゝえ、先生がそんな小細工をなさる迄もなく、私は先生のお傍から身を退かうと、もう前から思つてゐたのでございます。』

『いや、八千代さん。』

と、博士は呻くやうに、

『然う云はれると、私は實に面目無い。だが、私だつてあんたが云ふやうな、そんな氣持でばかりゐたのぢや無い——』

『いゝえ。もう、辯解なさらなくても宜しう御座います。——どんなに先生が辯解なすつたところで、私の此のみじめな幻滅の感じは救はれるものでは御座いません。私は、つい、愚痴ッぽく、申上げないでもいゝ事を申上げてしまひました。では、先生、長らく御厄介になりましたが、

これで先生とお別れ致さなければなりません。』

八千代は、改まつた態度で云つた。

『ぢや、八千代さん、この邸を出て行くといふのか？』

『えゝ。いつまでも愚圖々々してゐて、此上御迷惑をかけてはすみません。』

八千代は反語的に、流石に恨みを含んだ調子で云つた。

『だが、八千代さん。あなたの身體は——あなたはたゞの身體ぢや無いといふことぢやあ無いか？』

『もう、私の事は御心配下さいますな。』

『八千代さん。それは本當なのだらうか？　本當にわしの子なのだらうか？』

博士は、稍ゝ疑ひの色を動かすやうにして云つた。

『先生。本當か？　つて、ぢやな疑ひになるのでございますか？』

八千代は思はずくわッとしながら云つた。自分の子で無いと思ふなら、では、何人の子だと思ふのか？　そんな事を云つて此の上自分の貞操をまで疑はうとするのか？

『いや、疑ふといふのぢやあ無いが——』

『よしろう御座います。何とでも御都合のいゝやうにお思ひになるが宜しう御座います。先生。私は何も彼も、あまりに慘酷に裏切られました。私のお胎にゐるのは私の子で御座います。此の子に就いて決してあなたに御迷惑はかけませんから、御安心下さいませ。』

『八千代さん。私だつて、責任は感じとるのだ。責任を感じてゐればこそ――』

『いゝえ、私、もうあなたから何も御聞きし度くは御座いません。御免下さいませ。』

八千代は斯う云ふと同時に、ついと立ちあがつて、博士をそこに置いたまゝ部屋の外に出てしまつた。

その夜、八千代は、遲くまで起きてゐて、明日は此の邸を去る爲めの、持物の整理などをした。此の邸を出て何處へ行くといふあても無かつた。大塚には、叔母がゐたが、今更そこへ身を寄せるといふわけには行かなかつた。叔母と云つても血の繋がつてゐる間ではないので、叔父が死んでからは兎角疎々しくなつてゐた。それに、叔母の甥にあたる、今、丸の内の銀行に勤めてゐる高商出の青年の求婚を、叔母の意志を裏切つて拒絶してからは、叔母は八千代をあまり好くは思つてゐなかつた。

叔母の許へ行けないとすれば、あの辻益夫の外さしあたつて頼れる人は無かつた。

益夫さん！　八千代は思はずかう聲に出して呼んで見た。益夫の微笑を湛へた懶げな眼が、此のみじめな自分の心をじつとのぞき込んでゐるやうな氣がした。

（八千代さん。そいつはまたへんな事になつたもんだなあ。――あんたはもつとしつかりしてゐると思つてゐたのに。案外駄目なんだなあ――）

その懶げな微笑の中に、やゝ非難の表情をふくめて、然う益夫が云つてゐるやうな氣がした。

（本當に、私馬鹿な女なのよ。馬鹿な馬鹿な女なのよ。益夫さん、この馬鹿な私を、馬鹿な馬鹿な私を笑つて頂戴。）

八千代は益夫の幻影に向つて斯う云つた。熱い涙が又しても八千代の頰を流れた。

八千代は、世の中の男といふ男が皆可厭な淺間しいものに思はれた。唯、益夫だけがたまらなく懐かしい氣がするのであつた。

八千代はふと思ひ出したやうに、身の廻りに取り散らしたものゝ中から、小さな手箱を探し出した。そして銀の止め金をぱちんと外した。手箱の中には、文殼だの、メタルだの、寫眞だのが一ぱいはひつて居た。八千代は、二三十枚もある寫眞を一枚づつ取上げて見た。死んだ母が、まだ赤ん

坊の自分を抱いてゐるのや、死んだ父が漢口の領事時代のや、死んだ兄が中學の制服を着てゐるのや、また、彼女自身が女學校のお友達と三四人で肩を組み合せてゐるのや、いづれも、返らぬ日の懷かしい記念ならぬは無かつた。その、一緒に映つてゐる女學校のお友達のうち、眼のまるい、何處か西洋人形めいた感じのする一人は、いつか修善寺へ行く汽車の中で會つた津山園枝だつた。あれは、博士をたづねて行く途中だつた。五年振で會つた園枝の愛慾の爲めに荒み疲れた樣子を、淺ましくもいたましくも、その時に眺めたのであつたが、今の自分に、園枝を憐んだりする資格があらうか？　否、今の自分のみじめさに較べれば、たとへ戯れの戀にもせよ、放膽に戀の歡樂を味はつた園枝の方がどれほど、幸福であつたか判らないと、八千代は思ふのであつた。

その一枚々々にさま〴〵の感慨を寄せながら、次から次へと繰つて行くうちに、八千代はやがて彼女の探してゐた一枚の寫眞を見つけ出した。そこには、死んだ兄と、益夫とが、彼女を中にして白線の帽子を被つた凛々しい制服姿で立つてゐた。それは、兄と益夫とが高等學校の二年になつた時、彼女が女學校へはひつたばかりの時で、彼女の女學校入學の記念に撮つた寫眞だつた。おゝあの時分！――あの時分の自分がどんなに幸福であつたか？　そして、あの時分は益夫も、今のやうに憂鬱では無かつた。此の寫眞を見ても判る通り冴え〴〵とした眼眸の、潑剌とした青年だつた。

兄も優しい兄だつたが、八千代は兄よりも益夫の方に餘計に親んでゐた。

『どつちが兄さんだか判らない。』

母が、さう云つて笑つてゐた事を覺えてゐる。

八千代は、双の瞳を吸ひ寄せられたやうにして、しばらくの間じつとその寫眞に眺め入つた。が、やがて深い溜息をすると、寫眞から手を離した。寫眞は彼女の膝を辷り落ちた。

八千代は眼をあげて、對象を失つた視線をぼんやりとさまよはした。あの、劇場で見た益夫の同伴者の――美しいしとやかな娘の姿が、描くともなくそこに描かれた。

『いかにも、あの人の好きな型だわ。あの人は、矢張、あんな人が好きなんだわ。』

八千代は斯う獨言つた。心臟の燃え爆ぜるやうな、むしろ肉體的な苦痛が感ぜられた。それを、嫉妬だと自覺した時、八千代は、自ら嘲るやうに、斯う心の中で云つた。

『まあ、私、何といふ圖々しい女なんだらう。こんな身體になつてゐて、こんな氣持になるなんて！』

八千代は、今こそ、自分の愛してゐるのが何人であつたかを知つた。本當に自分が求めてゐた人が何人であるか？　を知つた。が、もう遲かつた。もう、愛するとも、戀ひするとも、云ひ得ぬき

身では無いでは無いか？

彼女は再び嘆息した。――彼女の手は、無意識の間に、再び膝の前に落ちてゐる寫眞を取上げた。而して、その次に彼女が氣がついた時には、彼女のわなゝく指先が、その寫眞を厚紙の臺紙諸共、べり〳〵と引裂き引裂いてゐた。

『まあ！』

と、それに氣がついた時彼女は驚きの聲をあげた。そして、彼女はその寫眞と共に彼女の心臓も亦ずた〳〵に引裂かれたことを感じた。

その夜、殆ど一睡もせずに明かした八千代は、あくる日の朝、二年近くの日を送つた博士の邸を出た。

幹太郎や宮子には、夏中、大原の方の海岸にゐる友達の許へ行つてゐるつもりだと云ひこしらへた。

『あら！　ぢや、私達の方へはいらつしやらないのね。ひどいわ！　急に外の方へ行つておしまひになるなんて――』

と、宮子はひどく不平らしく云つた。二三日のうちに、みんなして、例年の通り鎌倉の別莊へ出

かけて行く事になつてゐたのであつた。

幹太郎は、何にも云はなかつた。が、ひどく疑ひツぽい眼でぢつと彼女の顏をのぞき込むやうにしてゐた。

愈〳〵、出て行かうとする時、博士は、一寸――といつて、彼女を自分の部屋に呼んだ。彼女は、もう會ひ度く無いと思つたが、全然、別れの挨拶をせずに出るわけにも行かないので、呼ばれるまに博士の部屋へ行つた。

『八千代さん。どうしても出て行くといふなら、わしも此上留めはせんが――』

と、博士は、おづ〳〵と八千代の顏を見ながら、

『これから、あんた、どうするつもりかな？　どこへ行くつもりかな？』

『どうしようと、何處へ行かうと、私の勝手で御座います。』

『わしだつて、責任は感じてゐるのだ。十分責任は感じてゐるのだ。』

博士は、口の内で呟くやうに云つたが、用意して置いたらしい白い角封を、もぢ〳〵とした手附で卓の上へ置いて、

『これは、ほんの少しだが、わしの――その――何だ――』

『何で御座いますか？　これは――』

八千代は、きッとした眼で、卓の上の角封と博士の顔とを等分に眺めた。

『いや、ほんの、わしの――つまり――餞別だ。當座の、まあ、小遣ひ錢だ。』

『又、お金なので御座いますか？　今度は直接に私に下さるのでございますか？』

八千代は、双眸に罩めた冷かな侮蔑を博士の顔に投げつけると、唇をかみしめたまゝしばらくの間、じつとその角封を見つめてゐたが、

『ありがたう御座います。折角のお志故、頂戴致します。』

と云つて、取り上げると、銀行の小切手か何からしいそれを、封のまゝ、ぴりッと裂き、ぐるぐると掌に押揉んで、力一ぱい床の上に叩きつけた。而して、

『長々、お世話様になりました。』

尋常に一禮すると、くるりと背を向けて、博士の部屋を出ようとした。

『八千代さん。――まあ、待つて下さい。』

博士は慌てゝ呼び止めた。

『未だ何か御用なので御座いますか？』

『わしは、十分責任を感じとるのだ。わしは、わしの責任を――責任を――』

博士は、もう一度それを繰返したが、言葉はつまづき、眼は不安にをのゝいてゐた。

『責任をお感じになるのは勝手ですが、責任をお金に換算なさる事はお止めになつた方がよろしう御座います。――私は、もうあなたに何も求めてなど居りません。そして、私、どんな事があらうと、あなたに御迷惑はかけませんから――あなたのその大事な大事な御名譽に傷がつくやうな事は致しませんから、そんなに御心配なさらないでもよろしう御座います。あなたは、責任をお感じになるよりも、このまゝにしておくと、あとでどんな迷惑な事になるか判らないと、それが不安でいらつしやるのでございませう？　その不安ならどうぞ御無用になすつて下さいませ。私は、あなたの御名譽にかゝはるやうな祕密は、決して漏らしは致しませんから。闊口さんさへ、お漏らしにならなければ、私のお胎の事だつて、何人も知りは致しません。あの方さへお漏らしにならなければ、あなたと私との間の事は何人にだつて判る筈はございませんし、あなたの御名譽に傷のつくやうな事は萬々ない筈で御座います。そんなに醜く狼狽なさいますな。』

八千代は斯う云ひ捨てて博士の部屋を出たのであつた。

一臺の俥に、手廻りのものを收めた鞄や行李を乘せ、一臺の俥に悲みと悔いとに破れた心を乘せて八千代は博士の家を出た。幌越に見る街上には、眞夏の日が白い炎のやうに燃えてゐた。

不言不語

俥に乘つてからも、八千代は未だ何處へといふはつきりしたあてはついて居無かつた。素人下宿でも探すつもりだつたが、それを探しあてるまでの當座の落着場所としては、さしあたり、叔母の家より外に無いので、車夫には大塚へと命じたのだけれど、あの仲の好くない叔母の家に行くのはどうしても可厭だつた。

といつて、益夫の下宿に押しかけて行くわけには勿論いかないし――と、俥の上でとつおいつした揚句、ふと思ひ出したのは、江戸川縁に間借をしてゐる一人の友達の事だつた。橋本千惠子といふその友達は、女學校時代には二級ほど上で、一種の同性愛めく愛情で、自分を愛して呉てゐた。卒業するとすぐに結婚して、幸福な家庭をいとなんでゐるといふ噂を聞いてゐたが、それから五六年もの間すつかり打絶えてゐるうち、校友會雜誌の消息で、夫に死別して淋しいやもめぐらしをしてゐる事を知つた。その千惠子と、今年の正月、ぱつたりと牛込の停車場で會つて、誘はれるまゝに、江戸川縁の住居を訪ね、小半日も、しんみりと語り合つた事があつた。千惠子は、夫の家を出

る時に分けて貰つたいくらかのものと、下町の方のある會社のタイピストの月給とで、つゝましやかな、獨身生活をしてゐた。

『再婚？　さあ、それも考へ無い事はないんだけど――いろいろに云つて來る人もあるんだけど、でも、結局此の方が氣樂なのよ。自由で、呑氣で、それは淋しい事は淋しいけれど、慣れてしまへば何とも無いものよ。子供でもあつたら――と思ふ事もあるけれど、でも、矢張無かつた方がいゝのかも知れないわ。』

もとから物靜かな人だつたが、白蠟のやうに細つた頰に、しめやかな微笑を浮べて、世捨て人めく穩かさで、こんな風に千惠子は述懷してゐた。

さうだ。あの人のところへ行かう。あの人ならば、これから先の事についても種々と相談相手になつて呉れるかも知れないわ。――八千代は、さう思ひつくと、うろ覺えの番地を云つて俥をそちらへ向けさせた。幸ひ今日は日曜だつた。千惠子は多分家にゐるであらう。

うろ覺えの番地は違つてゐたが、一度來た事のある家は、すぐに判つた。武島町の靜かな裏通りで、品のいゝ老人夫婦の住んでゐる割に大きな門構への家で、千惠子の話に寄ると、千惠子の亡父と遠い緣續きになつてゐるとかで、職業的に間貸などしてゐる家では無かつた。

案の通り、千惠子は家にゐて呉れた。

『まあ！』

千惠子は、いかにも嬉しさうに、

『よく來て下すつたのね。さあ、どうぞ――』

と、手をとつて引き入れないばかりにした。

『私ね、橋本さん。遊びにうかゞつたのぢやないのよ。』

八千代は玄關に立つて、笑ひながら云つた。

千惠子は、格子戸の外に鞄や行李を乘せた俥が待つてゐるのを、八千代の肩越に見やつて、やゝ怪訝さうに眼をみはつた。

『二三日の間私をあなたのところへ置いて下さらない？　私宿無しになつたのよ。』

八千代は、單刀直入に斯う云つた。

『まあ！　ぢや、岡田さんのこころを出ていらしつたの？』

『えゝ、出て來たの。それで、私行くところが無くなつてしまひましたの。二三日の間でいゝのよ置いて下さらない？』

『置いてあげる段ぢや無いわ。大いに歡迎してよ。』

千惠子は、女學校時代の快活な調子になつて、

『だけど、こゝぢや話が出來無いわ。さあ、お上んなさいな。俥屋さんに、その荷物をこゝへ運んでお貰ひなさいな。』

女學校時代に姉のやうに八千代を愛して呉れた千惠子は、今も相變らず姉だつた。千惠子は、八千代の表面は妙にはしやいでゐながら、その不自然なはしやぎ方が、却つて、內心の惱みを示してゐるのを敏くも看て取つたらしかつた。

『二三日などと云はずに、何時までもいらツしやい。——だけど、どうかしたの？　何か事情があつたの。』

千惠子は、床の間に白百合の花瓶などを置いた二階の部屋に八千代を迎へると、やさしくいたはるやうに云つた。

『えゝ。少し事情があるにはあつたのだけど——』

と、八千代は淋しく笑つて、

『私、いつまでもあんな處にゐてもつまらないと思つて、それで出て來たの。私、何處かへ仕事に

出て見たいと思ふのよ。あなた何處かに世話をして下さらない？』

『まあ、職業婦人におなりになる氣？　だつて、あなたが——をかしいぢやあ無いの。』

『どうして？』

『どうしてつて——？　あなたは結婚なさらなきやならない人ぢや無いの？』

『結婚しなけりやならないなんて、そんな事は無いわ。』

『ぢや、結婚なさらないの？』

『えゝ、私、結婚しないつもりなの。』

『まあ、どうして——？』

『だつて、相手が無ければ仕方が無いぢやないの？』

八千代は、笑ひながら云つたが、その笑ひのうちには、底深い苦惱が動いてゐた。

『あなたのレベルはお高いから——　本當に、あなたのお氣に入るやうな男つて、なか〳〵無いでせうからね。』

『別に、そんな事はないけど——でも、男つて皆下らないものね。男つて皆卑しくて慾深で——本當の愛なんてものは一つもわかつてゐないのね。』

八千代の言葉はおのづから或る激越な調子を擧げて來た。

『それは然うね。』

と、千惠子も、一寸眼を伏せて考へ込むやうにした。

千惠子は、しかし、そのデリケエトな心遣ひから八千代の惱みが何であるかを、追求しようとはしなかつた。

『でも、――それにしても、あなたといふ人は職業婦人なんかには勿體無いわ。それにあなたは何も職業なんかお求めになる必要は無い人なんでせう？――あなたは何か苦んでゐらつしやるわね。そして、何處か身體もお悪いんぢやあ無いの？　まあ、こゝで當分の間呑氣に遊んでいらつしやいな。』

千惠子は然う云つて、外の何でも無い話の方へ話題を轉じた。

八千代は、然うして千惠子の宿に當座の落ち着き場所を見出した。――が、自分の身體の祕密がやがて千惠子に判つて來るであらう事を思ふと、いつまでも然うしてはゐられない氣がした。暑さ當りのせゐもあつて妙に身體が懶く、胃の工合などにも、次第にその生理的變徵が現れて來た。

不安と、心細さとの中で、八千代はたまらなく益夫がなつかしかつた。なつかしいといふよりも

戀しかつた。彼女がその戀ひしさに狩り立てられて、心の禁を破つて益夫を訪ねたのは、千惠子の宿に身を寄せてから三四日の後の、ある夕方の事であつた。

益夫は、久振りの八千代の訪問を、例のものうげな微笑で迎へた。

『やあ！　久しく來ないんで、どうしたのかと思つてゐましたよ。』

『相變らずぼんやりしてゐるのね。』

八千代は、わざと蓮葉な調子で云つた。さう云ひながら彼女は、今讀みさしてゐたらしい手紙の益夫のあぐらをかいた膝の上に、卷紙の波を打たせてゐるのに眼を止めた。益夫はそれに氣がつくと、一寸慌てたやうに、それを膝の上から押しやつた。いかにも、水莖の跡とでも云ひ度いやうな美しい女文字だつた。が、八千代はそれについては何も云はなかつた。

『昨日、關口に會つたがね。矢張、八千代さんはことわつたさうだね。』

『えゝ、おことわりしたわ。――關口さん、何とか云つてゐて？』

關口の口から自分に就ての一切が益夫に語られてしまつたのでは無からうか？　といふ不安に胸を擊たれながら、しかし、さりげない調子で八千代は斯う聞いた。

『別に何にも云はなかつた。――が、ひどくまゐつてはゐるやうだつたよ。どうしても、あの男は

氣に入ないのかね？』

『私ね。いろ〳〵面倒ですから、岡田の家を出てしまひましたの？』

『岡田さんの家を出て了つた？』

益夫は、吃驚して反問した。

『え、。出てしまつたの。』

『何時です、それは？　而して、今何處にゐるのです？』

『二三日前から。武島町のお友達のうちにゐるのよ。』

『だが――』

と、益夫は、じつと八千代の顏を見つめるやうにして、

『どうして、あの家を出てしまつたのです？』

『どうしてでもいゝのよ。』

『然うですか？　些とも知らなかつた――。武島町のお友達つて、どういふ人なんです。』

『どういふ人つて――別にどういふ人でも無いのよ。』

八千代は、こゝへ來るまでは、その人の胸に取縋つて心ゆくまで泣き度いやうな氣持に驅られて

ゐた。が、かうして面と向ふと、妙に素直になれない。拗ねずにはゐられない氣持になるのであつた。

『何か事情があつたのでせう？　それを話して御覽。』

『いづれ判るわ。話すのは可厭。』

益夫は、駄々ツ兒らしく首を振る八千代の樣子を――妙に反抗的な八千代の例に無い素振を、悲しげな眼で眺めたが、それ以上、强ひて聞かうとはしなかつた。重苦しい沈默が、しばらくそれに續いた。

『益夫さん。そのお手紙、何處からの？』

八千代は、始めてそれに氣がついたといふやうにして聞いた。

『これ？』

益夫は、やゝ狼狽して、

『何でも無いんです。』

『一生懸命に讀んでいらしつたわね。何人からの御手紙？』

『鄕里からのですよ。』

『おくにのどなたからの？』

八千代は、熱つぽい眼でしつこく問ひつめるやうにした。益夫は、答へ惑うた。

『隠したつて判つてゐるわ。あのきれいな娘さんからのでせう？　あの方、あなたの奥さんになる方ね。』

『さういふわけぢやない――』

『あら、お隠しにならなくたつていゝわ。』

『別に隠しやしませんよ。』

『ぢや、その手紙一寸拝見。』

『あなたが見たつて何にもならない。』

『何にもならなくても私見度いの。見せて頂戴。』

『ひとの手紙なんか見たがるものぢやない。』

『でも見度いのよ。隠す必要が無いなら、見せてもいゝんでせう。』

八千代は、執拗に云ひ續けながら、手をのばして、それをとりあげようとした。

『いけない！』

益夫は、その手を抑へた。

『見せて！　見せて！』

八千代は、抑へられた手を振りほどいて、強情にその手紙を奪はうとした。二人の手が宙に搦み合つた。八千代の身體は益夫の膝になびきかゝり、胸と胸、頬と頬とが觸れ合ふやうにして、二人は、その手紙を爭うた。

『見せて！　見せて！』

喘ぐやうに叫びながら、夢中になつてその手紙を益夫の手から奪はうとする八千代の様子には、執拗といふよりも、むしろ物狂はしい焦燥さが見られた。長い卷紙は、べり〳〵と裂けた。八千代は、その斷片をしつかりと掴んで、素早く飛び退かうとしたが、その時早く、折角奪つた斷片を、益夫の手に引きむしられてしまつた。

『ひどいわ！　ひどいわ！』

八千代は、さう云つて益夫を睨んだが、彼女の眼からは涙が激しく流れてゐた。そして、彼女はいきなり益夫の膝の上に突伏すと、聲を忍んですゝり泣いた。

今まで冗談だとばかり思つてゐた益夫は、急に斯うして泣き出した八千代を見るゝ、呆氣にとら

れてしまつた。

『八千代さん。何を泣くの？　え、何をそんなに泣くんです。』

益夫は、襟元深く玉をのべた首筋の、束髪の亂れのかげにわなゝくのを眼に映しながら、思はずその肩に手をかけて、

『をかしな人だなあ。急に泣き出したりして――一體どうしたといふんだえ？』

八千代は、さう云はれると、一層激しく悲みが爆發したといふやうに、よゝとその嗚咽の聲を高めながら、とぎれ、とぎれに斯う云つた。

『どうせ、私は――私は――私は馬鹿な女です。私は馬鹿な――馬鹿な女です。』

子供のやうに泣く八千代――いつもの、しつかりした八千代とはまるで人が變つたやうな今日の八千代を、益夫は、ぼんやりとした眼で眺めてゐたが、その、八千代の慟哭は、益夫の胸をも何か知ら、はげしい悲みでかきみだした。

『八千代さん。八千代さん！』

兩手を八千代の肩にかけて抱き起さうとしながら、益夫も、思はず一緒に泣き度い氣持になつた。――否、もし、その時、不躾な女中のお初が突然障子を開けなかつたなら、益夫は、八千代を

抱いて、涙に濡れた接吻を、彼女に與へたかも知れなかつたのだが。――

新妻

父に伴はれて東京に出て來た小夜子は、小さな胸を失望に傷られて歸つた。歸るともう、東京とも、益夫さんとも決して云はなくなつた。父には一切がわからなかつた。何故、あれほど行き度がつてゐた東京へ、行くが早く歸る〳〵と云つて歸つて來てしまつたのか？――小夜子の、這間の心理を洞察す可く、あまりに迂濶過ぎた父は、唯、不思議な現象に首をかたむけるより外無かつた。

『小夜子、今日、益夫からわしの許へ手紙が來たがの、お前のところへは何とも云つて來んか？』

『いゝえ。』

と、小夜子は眼を伏せる。

『もう一度是非出て來て呉れと云うて來た。どうだ。出かけて見ぬか？』

小夜子は默つてゐる。

『東京は可厭か？』

『えゝ。』

『どうして東京がそんなに可厭になつたのかな？』

『どうしてといふ事はございませんが、私は矢張こゝがよろしう御座います。』

『こゝがいゝと云つて、こゝはこんな田舍だ。』

『私は田舍娘で御座いますもの。田舍がよろしう御座います。』

淋しく笑ひながらも、もう何時の間にか涙含んでゐる。小夜子はまるで合歡の葉のやうに感じ易い娘なのであつた。

が、そんな風にしてゐるうちに、父は、老齢のせゐもあつて、兎角健康が勝れず、何處ととり立てた症狀も示さなかつたが、次第に元氣が無くなつて行つた。秋口から、床に就く日が多くなり、その年の、例年に無い寒さが徹へたのか、年の暮からかけて、もう床に就ききりの狀態になつた。

八千代が益夫を訪ねた時、益夫が讀んで居た手紙は――八千代のへんな邪推から二人の爭ひのたねになつた手紙は、その最初の頃、小夜子が父の容態をこま〴〵と益夫に書き送つた手紙だつた。小夜子は、それからも、怠りなく父の容態を益夫に知らせてやつた。小夜子自身にとつては、益夫は、もう異邦人でしか無いやうに思はれた。だから、小夜子は、彼女自身の爲めにその手紙を書いたのでは無かつた。父が手賴りにしてゐるたつた一人の人間への義務として、小夜子はそれを書い

たのであつた。――勿論、それには父の意志も働いてゐた。どうかすると、父は、文句を口授して小夜子に代筆させた。

『――拙者儀もすでに、餘命いくばくも有之間敷と存ぜられ候が、拙者亡からん後は、小夜子儀、天涯身を寄するところ無き孤獨の身と相成る可く、就いては貴君にお願ひの一儀と申すは――』

父は、そんな風に口授しつゞける。すると、小夜子は、赤くなつて筆を止めてしまふのであつた然うして、哀願するやうに云ふのであつた。

『お父様、いけませんわ。そんな事――』

『何故な？』

『でも、そんな事をあの方に云つておあげになつちや、私が困りますわ。』

『はゝゝ！』

と、父は力無く笑つて、

『はづかしいとでもいふのかな？　だが、これはわしの云ふ事なのぢや。お前は唯代筆なのだから構ふ事は無い。書け、書け！　わしの云ふ通りに書きさへすればいゝのぢや。』

『でも、お父様。』

『はゝゝ、どうしても可厭なのかな？』

父は笑つて、

『よし、よし、ぢや、そのまゝにしとけ。そのあとわはしが書く。』

父はさう云つて、小夜子が枕元を退つたあとで、力無く硬ばつた指に筆をとりあげ、小夜子の鶯堂流の手蹟のあとに、山陽風の達筆をつなぐのであつた。

小夜子は、此の老人の後妻の姪にあたる娘で、父とは云へ、實の父では無かつた。しかも、老人の小夜子に對する愛は實の父以上であつた。小夜子も實の父以上に、此の老いたる養父を愛してゐた。だがこの父は死ぬであらうか。――それを思ふと小夜子の心は暗い悲みにとざされた。父は、自分を益夫に托さうとしてゐる。併し、あの人には、あの女の人がゐる。小夜子は、妖艶とも云ひ度いばかりに美しかつたあの夜の八千代を思ひ浮べて、人知れず溜息を吐くのであつた。

が、年が變つて、やうやく松の内を過ぎた頃から父の容態は急變した。喘息が咽喉を苦めた。胃腸も全く消化力を失つた。全身の衰弱に伴つて、あらゆる機能に潜んでゐた疾病が競うてその徴をあらはして來た。親戚の誰彼などが代る〴〵見舞にやつて來る中に、電報で呼ばれた益夫が、慌ただしい面持で駈けつけて來た。

『おゝ、益夫君、來て呉れたか？』

と、父は殊に益夫の見舞をよろこんで、骨立つた手をさしのばして益夫の手を握つた。そして、飛び出した喉骨をひきつらせて、淋しく笑ひながら、

『わしももういけんで――　愈〻、お別れといふ事になつたわい。――なあに、わしはもう七十にもなつて、少し生き過ぎたくらゐに思つてゐるが、あとに殘す者の事が氣にかゝつてな。』

それから父は、他の人を拂つて、何か益夫に遺言を述べたらしかつた。――いよ〳〵といふ息の引取際にも、父は、見えなくなつた眼で益夫を求めた。

『をぢさん、こゝに居ります。』

と益夫がうるんだ聲で云ふと、

『おゝ、居るか？　たしかに居るな！　ぢや、益夫君、賴んだぞ。』

父は、聞えるか聞えないかの聲で、斯う念を押した。

『をぢさん。慥かに承知いたしました。』

『賴んだぞ。賴んだぞ。小夜子、小夜子もゐるか？』

『はい。おとうさま。』

前後を亂して泣いてゐた小夜子は、聲に應じて父の枕もとににじり寄り、斷末魔の苦しい息に喘ぐ父の顏を、おぼろに曇る眼で見つめた。

『おゝ、小夜子もゐるな。お前の事は、益夫君に賴んである。ようく、此のわしから賴んどいた。よく、益夫君の云ふ事を――云ふ事を聞いてな。』

それを最後の言葉として、小夜子の養父はとう〳〵他界に去つたのであつた。

斯うして、父の遺言により、小夜子は少なからぬ遺産と共に益夫の手に殘された。これは小夜子にとつては、辛い成行と云はねばならなかつた。――けれども、父の遺命とあれば是非も無かつたし、實際、他に手賴るところの無い身には、さうするより外仕方が無かつた。もう決して行くまいと心に誓つた東京へ、もう決して相見る事さへしまいと心に誓つた益夫に伴はれて、小夜子が出て來たのは、三月の中旬、父の四十九日の法要を濟ますと間も無い頃であつた。

そこで、益夫も、長い間ゐた筑土八幡の森蔭の下宿を出て、矢來の方にさゝやかな家を構へ、小夜子と一緒に暮らす事になつた。一人の兄、一人の妹のやうにして――

別に物質的に不自由の無い益夫は、職業を求める必要もなくあひかはらず書齋にとぢこもつて、且つ讀み、且つ書くといふやうな――靜かな學徒の生活を續けてゐた。が、併し、彼は讀まうとし

て本を忘れ、書かうとしてペンを忘れる事が多かつた。彼の研究も、著述も一向捗取らなかつた。彼は、濛々と部屋に立罩める煙草の煙の中に、ぼんやりとした顔を浮べて、ぼんやりと考へ込んでゐる事が多かつた。愛慾の哀しさが身を迫めて學徒としての落着は、もう彼の心を見捨ててゐた。

小夜子は、女中も置かない二人だけの生活に、水仕業なども手づからして、甲斐々々しく立働らいてゐた。――彼女は言葉を忘れたやうに無口だつた。自分の方から益夫に話しかける事などは絶對に無かつた。たゞに、益夫から呼びかけられると、唯、

『小夜子さん！』

と呼びかけられただけで、もうおど〳〵と涙含んでしまふのであつた。

唯、外形を見たばかりでは、若い夫婦の樂しい新婚の生活とも見えたであらう。が、二人は、いつも深い溝を隔てゝ相對してゐた。いとしむ心、慕ふ心は、冥々のうちに相通ひながらも互ひの縛めが、互ひを自由にしなかつた。

内氣ではあるが、人一倍敏感な小夜子は、さうした中でも、益夫の一擧一動を等閑に看ては過さなかつた。彼女は、益夫が一日中部屋に籠つて、煙草ばかり吹かして考へ込んでゐるのは何の爲めであるか？　時々、物に魅かれたやうにしてそゝくさと外へ出て行くのは何の爲めであるか？　略

それと掛附いてゐた。――彼女は、もう、恨まうとも嫉まうとも思はなかつた。たゞ、彼女は悲しかつた。心細かつた。そして、あの優しい父が、死んだ父が戀しかつた。

彼女は、時々、

『お父様！』

と呼んで見た。

『お父様。あなたは間違へていらしつたのよ。私はお言葉通りこゝへ來てはゐますけど、矢張、こゝに居てはいけないの。――ねえ、お父様、私はどうすればいゝでせう。もう一度考直して頂戴。』

小夜子は生ける人に云ふやうに、かう死んだ父に向つて云つて見る事もあつた。

その日も、午少し過ぎから益夫は家を出た。妙にそは〳〵とした落着の無いその樣子で、何處へ行くかは察しられる。小夜子は、襟飾を結んでやらうとして、急に瞼が熱くなつて來た。それに氣づかれまいとして、そつとそむけた横顔は、益夫の眼にも、淋しいいぢらしいものに映つた。

『すぐに歸つて來るからね。淋しいだらうけれど、お留守番をしてゐてお呉れ。』

益夫は、そつと小夜子の肩に手を置いて、かうなだめるやうに云つた。

『はい。』

小夜子は、顔をそむけたなり、こつくりをした。

『此次には、二人で銀座の方へでも散歩に行かうねえ。今日は――その代り、今日はお土産を買つて來てあげようか？　何でも、小夜子さんの好きなものをね。何がいゝの？』

『……』

『シュウクリイム？　チヨコレエト？』

益夫は、稍〻戯れ氣味な調子で云つた。

『いゝえ、もう――』

小夜子も、仕方無しに、少し笑ひながら云つた。

『え、何がいゝの？』

『何でもよろしう御座います。』

『ぢや、兩方買つて來てあげようか？』

『いゝえ。そんなに――』

『澤山お土産を買つて來てあげるからね。ぢや、淋しいだらうけど、留守を頼みますよ。遲くなつたら、門をすつかり閉めてね。』

『そんなに、遲くおなりになりますの？』

流石に、稍〻恨みがましい調子で云つた。

『いや、そんな遲くはならない。遲くも、九時までには、いや、多分六時頃までには歸つて來ますよ。』

『では、行つていらつしやいませ。』

玄關まで送り出した小夜子は、そこの闇際に膝を突いたまゝ、急ぎ足の靴の音が、角を曲つて消えるまで聞耳を立てゝゐた。何と急がしげな足音よ！　それは、放たれた小鳥の羽搏きのやうにさへ聞えるでは無いか？　あの人にとつて、私と斯うして住んでゐる事は、一つの束縛なのでは無からうか？　私はかうしてあの人の邪魔をしてゐるのでは無からうか？　さう思ふと小夜子は、自分といふものゝ存在が、たまらなく不束な、それ故に、我ながらひどくいぢらしいものに考へられて來るのであつた。邪魔にされてゐるとわかつてゐながら、思ひ切つてその人から離れて了ふ事の出來無い自分が、腑甲斐なく思はれると共に、また、我ながら哀れにもなつて、おのづから泣けて來るのであつた。

早ければ六時頃に歸ると云つたので、小夜子は晩餐の仕度を調へて待つた。長火鉢の傍につゝま

しく坐つて、置時計の針の進みを眺めてゐると、小夜子はすぐろに人戀しさの思ひに迫められた。夫の歸りを待つ妻の心持がそこに感じられた。――小夜子は、その心持の前に一人で赤くなつた。

が、七時になつても八時になつても、遲くもと云つた九時になつても、九時が過ぎて十時になり、十一時になつても、どうしたのか益夫は歸らなかつた。

益夫が、漸く歸つたのは、もう十分ばかりで十二時になるといふ頃だつた。

『やあ、遲くなつてすまなかつたね。』

と、益夫は、詫びるやうに、

『未だ起きてゐて呉れたんですね。寢てしまへば宜かつたのに――』

小夜子は、もう二三時間もの間、身動ぎもせずに、じつと火鉢の前に坐通してゐたのであつた。彼女の、頰には、靜かに涙が傳うてゐた。それに氣がつくと、益夫も胸を擊たれて、

『小夜子さん、あなたは――』

と、稍〻あわてながら呼びかけた。

小夜子は、ついと立つて、勝手の方へはひつて行つた。障子の蔭から、しのびやかな嗚咽の音がした。

益夫は、當惑したやうに、しばらくそこに、突立つて居たがあとを追つて勝手へ出て行くと、

『小夜子さん！』

と、そこの板敷に膝をついて、あちら向きに白い後頸を見せて、袂を噛むやうにして泣いてゐる小夜子の顏をのぞき込むやうにして、

『どうして泣いてゐるの？　え？　僕の歸が遲かつたので、心細くなつたのかえ？　惡かつたな。早く歸らうと思つたんだが、つい――。ね、本當に惡かつたよ。僕があやまるよ。だから、機嫌を直してお呉れ。ね、ね。』

まるで子供を賺すやうに云ひなだめるのであつた。

が、小夜子は唯泣くばかり、やさしく云はれて一層悲しくなつたといふやうに益〻激しくすゝりあげるばかりであつた。

『それとも、何か別に悲しい事でも出來たのかえ？　え、唯泣いてゐるだけぢや判らない。泣かないで、僕に話して御覽。――兎に角、こんなとこに居ちやいけない、此方へお出で。ね、此方の、座敷の方へ來て、何でも云ひ度い事があれば云つて御覽。話と云へば、僕も小夜子さんに話し度い事があるのだよ。』

『いゝえ。いゝので御座います。どうぞ、私に構はないで――』

『困るなあ。そんなに駄々を捏ねちや――』

益夫は淋しく苦笑して、

『でも、こんなとこにゐちや、風邪を引いてしまふよ。ね、もう遅いんだし、僕も着替へをしなけりやならないし――。ね、此方へ來て呉れなけやいけないよ。』

さう云はれると、小夜子は、しなければならぬ自分の勤めに氣が附いたといふやうにして、涙ををさめて立ちあがつた。泣顔をそむけるやうにしながらも、彼女は、益夫の洋服を寢衣に着換へさせ、益夫の爲めに夜の物を展べ、脱ぎ捨てた洋服を丁寧に疊んだりして、その爲る事は甲斐々々しかつた。それを見ると、益夫の胸は刺されるやうに痛むのであつた。

『濟まないね。』

と、益夫は長火鉢の前に坐つて、小夜子の淹れて呉れた熱い茶を啜りながら、

『小夜子さん。どうしてあんなに泣いてゐたの？』

と、やさしく問ひ掛けた。

『御免下さいませ。』

さう小さい聲で云つて、小夜子は深く面を伏せた。すんなりとした白い手で、前掛の皺を延すやうにしながら、又しても、新しい涙のさしぐむ風情であつた。

『僕の歸りがおそかつたので、それで、小夜子さん怒つたの？』

益夫はわざと笑ひに紛らす調子で云つたが、小夜子の沈默は深かつた。漸く口を開いた時、小夜子の聲はふるへてゐた。

『私、私――お願ひがございますの。』

『どんな事？』

『あの、私を――歸して下さいませ。』

思ひきつたやうにさう云ひながら、ちらと見上げた小夜子の眼には、もう涙が溢かゝつてゐた。

『歸して下さいつて――何故、そんな事を云ふの？』

益夫は胸を衝かれた思ひで云つた。

『でも、私――その方が――』

『歸るつて、何處へ歸るの？』

然う云はれて見れば――いや、然う云はれる迄もなく、何處に歸るところがあらう？　此の人が

縱令、どんなに自分に無情いにせよ、此の人を措いて手賴りにす可き人は無かつたのだ。さう思ふと、小夜子は今更のやうに、遣瀨無い悲みがこみあげて來た。小夜子は袖を顏に押當てゝ、涙を呑んで哭きはじめた。

『小夜子さん。僕が惡かつたのだよ。ね、あなたに、そんな氣を起させるのは、みんな、僕が惡いからなんだ。僕があやまるよ。だから、もう、そんな事を云はないでお呉れ。歸るなんてそんな事を云はないでお呉れ。あなたの事は、呉々も伯父さんから賴まれてゐるんだ。そんな事を云はれると僕が困るんだ。そんな事を云つて、僕を困らせ無いでお呉れ。ね、小夜子さん。』

『でも、私、――』

涙の隙から、小夜子は纔かに抗辯するやうに云つた。

『僕が惡かつたのだよ。――でもね、僕も惡いんだが、小夜子さん、あんたも少し思ひ過ごしてゐるのだよ。ね、あなたは僕の心を疑つてゐるんだらう？　疑はせるやうにしたのは、それは僕が惡いんだけどね。』

益夫は、濕つぽい眼に、小刻みにわな〻く肩の、なだらかな線を映しながら云ひ續けた。心からのいとしさいぢらしさが、益夫の胸を締めつけて來た。益夫の言葉は、次第に感激的に昂められて

行つた。

『ね、小夜子さん。あなたは最初から僕を疑つてゐたね。けれども、あれは何でも無いのだよ。あの人は、いつかも一寸云つた通り僕の死んだ友人の妹で、唯、心易くつきあつてゐるといふだけで、あなたの疑つてゐるやうな關係は些とも無いんだ。今、大へん不幸な境遇に陷ちてゐるので、それにあの人の身の廻りに面倒な事がもちあがつたりしてゐるので、種々と世話を燒いてやつちやゐるが、それは單なる友情に止まつてゐるので、別に戀とか愛とか、そんな關係ぢや無いんだ。ね、僕は決してうそつきぢや無い。だから、僕の言ふ事を信じてお呉れ。疑ひは捨てゝお呉れ。疑心暗鬼といふ奴だよ。獨相撲だよ。僕は決して、あなた以外の女性を愛してなんぞ居やしないんだ。僕は誓ふよ。だからね、小夜子さん！』

益夫は、思はず小夜子の方ににじり寄るやうにした。そして、小夜子の兩手を、自分の兩手に執つて搖り動かすやうにした。小夜子は、執られるまゝに兩手を執らせ、搖り動かされるまゝに搖り動かされながら、面映い泣顏で、益夫を見上げた。餘りに眞實な益夫の言葉に疑ひの半ばを捲き消されながらも、殘る半ばの疑ひを、その縋るやうな眼の色に見せて、小夜子は一生懸命に益夫を見上げた。

『あなたが打解けて呉れないから、最初から僕を疑つてゐるものだから、僕も何うしやうもなくて困つてゐたのだ。ね、歸るなんて云つたつて、何處も歸るところなんか、ありやしないんだ。一生僕の傍で暮らして呉れるつもりで、僕のところへ來て呉れたんだらう。それが死んだ、伯父さんの意志でもあつた筈だ。だからね、そんなつまらない疑ひを捨てゝ、僕にすべてを任せてお呉れ！』

本當なので御座いますか？　それは、本當のあなたのお心持なので御座いますか？　小夜子の、喰ひ入るやうな眼は、底から動く深い魂の歡びに次第に輝きを加へながらも、なほ、斯るこの無言の問を繰返すやうに見えた。

『ね、僕を信じてお呉れ。而して、小夜子さん、僕と結婚してお呉れ！』

結婚といふ言葉を聞くと、小夜子は、ぱつと赤くなつた。而して、痛々しいまでの嬌羞にやり場のない眼を外らして、執られた兩手を振ほどかうとでもするやうに、嫋やかな身體を身悶えした。

『可厭なのかい？　え。』

益夫は、笑みを含みながら、その燃えるやうな耳朶に口を寄せて囁いた。

『あら、あら！』

小夜子は、益夫の唇を避けるやうに、その眞赤になつた顏を二三度左右に動かした後、益夫の腕

にそつと押しあてゝしまつた。

――春は未だ淺かつたが、戸外には月も朧ろであらう。肌にやはらかな夜氣は、髪の香をほのかに罩めて、灯の光も、物の影も、何となくなまめかしい夜であつた。まことに、處女の人妻となるにふさはしい夜であつた。

相剋

武島町の舊友の家に、一先づ身を落ちつけはしたが、併し、その身體の祕密の故に、八千代は一月と經たないうちに、そこから出なければならなかつた。

八千代の身體の祕密――それは、併し、何時までも祕密として隱し了せる事が出來るやうなものでは無かつた。――そんな事には、まるで迂濶な益夫の眼にも、不思議を氣附かれる日が間も無くやつて來た。

『わかつたの？』

益夫からみれを云ひ出されると、八千代は、青白い顏に淋しい笑ひを浮べて、

『可厭ねえ。男の癖にそんな事に目が早くて――』

と、何でも無い事のやうにして云ふのであつた。

『だが、一體、何うしたといふんです。』

眞逆と思つてゐた疑ひが、當人の口から紛れも無い事實だと聞かされると、益夫は、頭の天邊か

ら、ぐわんと何か打ちこまれたやうな氣がした。實際、それを聞かされた益夫の驚きは、博士のそれよりも、關口のそれよりも、勝るとも決して劣りはしなかつた。

益夫の詰問の眼に會ふと、八千代の顏は、瞬間、激しい苦惱の表情で掠められた。が、すぐに、平氣な顏附に戻つて、八千代はヒステリイらしく笑つた。

『ほゝゝ。あなた、驚いたの？』

『それは――驚きますよ。一體、どうしたんです。』

悲しげな、腹立たしげな顏で益夫は云つた。

『どうしたんだか私知らない。』

『一體――それは何人なんです。だれがその子供の父親なんです。さういふ事になつてゐるなら、あなたはその人と結婚しなけりやいけないぢやあ無いか？』

益夫は、急き込んで云つた。

『結婚なんかしないと、私、云つてゐるぢやありませんか？』

『だが、そんな身體になつて――一體、何人なんです？』

『さあ、何人か知ら？　益夫さん、あなたぢや無かつたこと？』

『冗談もいゝ加減になさい。それは大問題ぢや無いか？』

その大問題を、一場の戯言に紛らさうとするやうな八千代の態度に、しんから腹を立てながら、益夫は叱りつけるやうに云つた。

『叱られちやつたわね。――さあ、何人でせうね？』

わざとそんな風に裝ふのだとは知りながらも、あまりに無恥な、捨鉢な八千代の態度に、益夫は呆れ返つて口を噤んでゐた。

『何人か、對手がなけりやいけないか知ら？　マリア様は、處女でイエス様をお生みなされたのにね――』

あくまでも眞面目を避けて、八千代はこんな風に云つて見たが、深い悲みと激しい腹立とのまじり合つた、精神的拷問に齒を喰ひしばつてゐるやうな益夫の顏を見ると、八千代は、わッと泣き出し度いやうな衝動を感じた。涙が、嗚咽が、眼にも咽喉もとにもこみあげて來た。が、八千代は強情にそれに堪へた。

『八千代さん、これには何か事情があるのでせう？　話して下さい。』

益夫は、辛うじてその激情を抑へるやうにして、斯う靜かに云つた。

『……』

『つまり、こんな事で、岡田さんの家を出なければならなかつたのだね。一體、どうしたのです。僕に話して下さい。』

『益夫さん。今にお話する時があるわ。今は、聞かないで頂戴。私云ひ度くないんですから。』

と、八千代も、眞面目な調子になつて、

『後生だから、聞かないで頂戴。』

『僕に話せないといふのだね？』

『えゝ。何人にも話し度くないの。』

『關口ぢや無いのか？　八千代さん』

『いゝえ。』

『だつて、外に――』

と、益夫は思ひ惑ふやうに云つた。

『關口さんの名譽の爲めに――』

云ひかけて、八千代は唇邊に冷かな笑ひを浮べて、

『それだけは斷言しますわ。あの人とは、何の關係も無い事なんです。』

『ぢや、何人なんです？』

『御願ひですわ。どうぞ、　れは聞かないで――』

八千代はとう〳〵涙含んでしまつた。

――益夫は、まじ〳〵と八千代の顏を見てゐたが、默つて唯、深い溜息をつくばかりであつた。

『益夫さん。私は馬鹿な女です。馬鹿な女です！』

八千代は急に、兩袖を顏にあてゝ、聲をあげて泣き出した。

――益夫は、もうそれ以上追窮はしなかつた。疑惑と、今こそ明かに知る激しい嫉妬に似た感情とで、その心を苛まれながらも、じつと堪へて、何事をも問はうとはしなかつた。唯、かなしげな眼で――苦痛さうに喘ぐ眼で、父を知らぬ子の母となりゆきつゝある八千代の姿をうちまもるばかりであつた。

その眼は、詰らうとも責めようともしてゐなかつた。が、八千代にとつては、益夫のその眼が、何よりも辛かつた。詰らうとも責めようともしないだけそれだけ、どんなに激しく詰られるより責められるより辛かつた。

その辛さの爲めに、時には、猫を嚙む鼠のやうに、心にもなく益夫に毒づいたりする事さへあつた。

『あんたは、どうしてそんな眼で私を見るのです。私、きらひです！　どうぞ、もう、歸つて下さい。』

時々、こんな風に、突然に突つかゝつて來る事があつた――それには、姙娠の生理的變化に伴ふ病的な神經狀態も手傳つてゐた。八千代には、益夫が、故意に意地惡く、自分を苛めようとしてるやうにさへ思はれてならなかつた。

『意地惡！　益夫さんの意地惡！　もう歸つて下さい。』

物狂はしく取亂した八千代の姿を見ると益夫の悲しげな眼は、愈〻、その悲みを深くするばかりであつた。

『どうしたんです。八千代さん。どうして急にそんなに怒り出すんです。』

彼は、その悲しげな眼に、悲しげな微笑を浮べて靜かになだめようとする。

『笑つてるのね。あなたは！　どうせ私は馬鹿な女です。私は、いたづら娘です。いくらでもお笑ひになるがいゝわ。』

八千代は、はら〳〵と涙を流して

『もう、私なんかに構はないで下さい。構はないで歸つて下さい。あなたのあの可愛い〻お嫁さんの許へ、さつさとお歸りなさい！』

『困るなあ。また、そんなヒステリイを起して――』

益夫は嘆息するのであつた。

益夫はさうして、日々に募り行く八千代のヒステリイを持あましながらも、八千代の爲めに終始變らない保護者であり、介抱人であつた。――武島町の友達の家を出た八千代は、代々木の方のある素人屋の二階に當座の宿を定めたが、その宿を見つけてやつたのも益夫であつた。それは、益夫の知人の妹の家だつたが、家の人は、皆、八千代を益夫の隱し妻かなぢのやうに思つてゐるらしかつた。そして、八千代の胎の兒は、勿論、益夫の子だと思つてゐるらしかつた。そして益夫が、そのあまりに心を痛くさせるその誤解に就いて辯解しようとしても、てんで、耳にも入れなかつた。

實際、さう誤解されても仕方が無いほど益夫は、八千代に深切だつた。彼は、三日も置かずに、八千代の樣子を見に出かけた。八千代も亦、毎日、益夫のおとづれを待つた。或る心の苦しさから前に云つたやうに、酷く益夫に毒づいたりしながらも、歸ればすぐに、次のおとづれを待たずには

ゐられなかつた。

八千代との關係が一方さういふ狀態になつてゐる時、益夫は、伯父の死に會した。そして、小夜子を東京へ伴ひ來らなければならない事になつた。小夜子と共に、益夫が矢來に家を構へた頃は、八千代が、その下宿から少し離れたところにあるある助産婦の家へと、愈〻臨月に近い身體を運んで行つた頃だつた。

八千代は、その胎兒に對して、激しい呪ひを感じてゐるらしかつた。

『どうかして產まずに濟ます工夫は無いか知ら？――私、いつその事、毒を飲んで死んで了はうか知ら？』

稍〻濁りを帶びて來た水つぽい眼で、眼の前の空間を凝視しながら、こんな事を云ひ出したりする事があつた。

『いゝえ。私は產まない、產まない、だれがこんな子を產んでやるものか？』

身悶えて斯う云ふ事もあつた。かと思ふと、また、

『生れて來る者には罪は無いのね。何にも知らないで生れて來るんだわね。憎んだりしちやかはいさうね。』

さう、考へ深い調子で云ふ事もあつた。

その母親の、呪ひといとしみとにかゝはり無く、月が滿ちて生れたのは、男であつた。産は輕い方では無かつたが、兎に角母子共に健全。子供は高い鼻と、ぱつちりとした眼とをもつてゐた。

『旦那様。まつたく珠のやうなお子でございますよ。ごらん下さいませ。このお眼のあたりなど。旦那様そつくりで御座いますよ。』

如才ない助産婦は、産衣に包んだ子供を、益夫にさしつけてこんな風に云つた。

『うむ、好い子だ。好い子だ。』

益夫は、然う云つて淋しく笑つた。じつとそれを見てゐた産婦！　青白い顏にも歪められたやうな笑みが淋しく動いた。

産婦の肥だちも順調だつた。一月ほど經つと、八千代は子供を抱いて、もとの下宿に歸つた。

益夫は、相變らず、繁々と八千代を訪ねた。早春の陽は、郊外の家の二階の一間を明るく照らしてゐた。明るい紙障子に、友禪メリンスの小夜着の色彩を陽炎はして、子供はすや〳〵と寢息を立てゝゐる。産後のやつれが、青白く肌の色を沈ませて二重瞼の刻みを深く、眼の色も稍〻けんを帶びて、無造作に束ねた黑髪の、二筋三筋頰に落ち懸つた風情にも、むしろ、凄艶と云ひ度い八千代

は、じつとその子供の枕もとに坐つて何か考へ込んでゐる。そこへ、益夫が、懶い微笑を含んで、

『やあ！』

と云ひながら、顏を出すのであつた。

『やあ、寢てゐるんだね。』

益夫は、這ひかゝるやうにして子供の寢顏をのぞき込んで、

『だん〳〵かはいくなるね。なか〳〵好い顏をしとる。』

『でも、何だか弱さうな子だわ。泣いてばかりゐるのよ。』

『泣く子は育つといふからね。どうだい？　可愛くなるだらう――僕は、どうも此の子が可愛いいよ。お上産だ。』

益夫は提て來たボオル箱の紙包みを八千代の前に投げ出す。

『まあ、何に？』

八千代も思はずほゝゑませられながら、ボオル箱を開くと、セルロイドのキユーピイさん、西洋人形、金魚、龜の子、汽車ポツポ。

『まあ、恁麼に澤山。――でも、まだ此子は持てはしないわ。』

『さうかな？　――でも、眼は見えるだらう。見れば喜ぶさ。』
『あなた。本當に此の子がかはいゝの？』
八千代は、屹と益夫の顏を見つめるやうにして云つた。
『あゝ、かはいゝよ。八千代さんが生んだ子だからね。』
と、云つて、あとは獨言めかしく、
『自分の子のやうにかはいゝよ。』
『自分の子のやうに――？』
『あゝ。』
益夫は、子供つぽくはにかんで、少し顏を赤くした。
『あなたにかはいがつて頂ければ、此の子も幸福だわ。でも、益夫さん！　だれの子だかわからない此の子が、あなた、本當にかはいゝの？』
八千代は妙に執拗な調子になつて、もう一度、かう繰返した。
『だれの子かわからないつて――とにかく、あなたの子には違ひ無いぢやあ無いか？』
『益夫さん、本當にそんな風に思つて呉れるの？』

『あゝ。――何故だい？　何故そんな事を聞くんだい？』
八千代は益夫の顏を見つめながら、唇を動かした。が、言葉は唇を離れなかつた。その靑白い顏にさツと痙攣が走つたかと思ふと、喉を壓して、涙が溢れて來た。袂が顏に行つた。八千代は靜かに泣き出した。
『八千代さん。どうしたい？　え、どうしたい？』
益夫は、狼狽して、當惑して、おど〳〵とした眼つきで、泣き入る八千代の姿を眺めた。
『困るなあ！　又、あんたはヒステリイを起したんだな。え、どうして泣くんだい？　何をそんなに泣くんだい。』
『益夫さん！』
と、八千代はすゝりなきの間から云ふのであつた。
『あなたはあんまり優し過ぎるのよ。あなたはごうして、もつと私を責めて呉れないのです。叱つて呉れないのです。――私は馬鹿な女です。私は父親の云へないやうな子供を生んだいたづらものなんです。――私、斯うしてあなたに會ふのさへ、圖々し過ぎると思つてゐるんです、本當に私は恥知らずです。恥知らずです！』

『そんな――そんな――』

と、益夫は少しどもりながら、

『そんな、つまらん事を云つちやいけないね。そんなつまらん事を――僕は、その、何だ。何とも思つちや居ないんだ。』

その時、すや〳〵と眠つて居た赤ん坊は、物の氣配に驚いたのか、火のつくやうに泣き出した。

『赤ちやんが泣き出したよ。早くおツぱいをやらなくちや――』

益夫は、さう云ひながら、無器用な手つきで、赤ん坊を抱きあげて、

『ね、八千代さん。――さあ、阿母さんの方が、そんなに泣いたりしちや駄目ぢや無いか。――お、よし、よし、泣くんぢや無いよ。坊やはいゝ子だからな。坊やのお母あさま、仕方が無いな。』

益夫は、笑ひの中に此の局面を轉回しようとでもするやうに赤ん坊を搖り上げ搖り上げ、冗談らしくこんな事を云つて、

『さあ、八千代さん。赤ちやんを抱いておやりよ。』

『そんな子供なんぞ！』

と八千代は、收め合へぬ嗚咽の間から鋭く叫ぶ樣に云つた。

『抛ツといて頂戴。私、そんな子供なんか、構はない！　構はない！　そんな子供なんか、死んじまへばいゝんです。私、かはいくともなんともない！』

『そんな亂暴な事を云つて――坊や、お前のおかあさんは飛んでもない事を云ふな。』

『益夫さん！　あんたは、矢張、私をいぢめたいんだわ。あんたは矢張意地惡なんだわ！　そんな子供がかはいゝなんて――それは皮肉だわ！　皮肉を云つて私を苛めるつもりなんだわ！』

『また、あんな事を云ひ出す！　どうも困るなあ――』

『歸つて頂戴！　あなたには、あのかはいゝ娘さんが――きれいな奥さんがついてゐるんだわ。なにも、こんなところへ來る事は無いのよ。もう、歸つて頂戴。』

『どうも困るなあ。』

益夫は、益〻、泣き立てる膝の子をも、そのヒステリイの母親と共に持餘しながら、かう心から嘆息するのであつた――

かうして、益夫は、靜かに胸に堪へた悲みと苦みとを、慘酷に搖ぶられては、八千代の家から歸るのだつた。

八千代も亦、自分を愛してゐるのだ！――これは今更悲しい發見であつた。今更、それが何にならう？　彼女にはもう子供がある。彼女の子供は彼女と共に愛し得るとしても、自分にはもう妻がある――

さうだ。あの可愛さうな小夜子は、あの薄暗い厨の隅に立つて、そつと涙を拭ひながら、自分の歸るのを待つてゐるであらう？

早く歸つてやらなければ――

益夫は、俯き勝ちに、淋しい自分の心をみつめながら、ものうい歩みを、小夜子の待つてゐる矢來の家へ運ぶのであつた。

かうした日が幾日となく繰返されて、やがて春も闌けて行つた。

青い鳥

八千代の生んだ子が、肺炎に犯されて、三日ばかり喘ぎ苦んだ末に死んで了つたのは、五月も末になつてからであつた。生後、四五十日、露より果敢ない命だつた。

『丁度いゝんだわ。私、死んで呉れゝばいゝと、どんなにそれを願つたか知れなかつた。』

八千代は、蠟人形のやうに冷たくなつた子供の死顔を見ながら、痙攣のやうな微笑を浮べたが、その頰には涙が流れてゐた。母性の痛みは、流石に忍び難いものがあつた。嬰兒の死顔の蔭から、何ものかが嚴肅な眼で、自分を非難してゐるやうに思はれた。無情な母よ！　お前は本當にその子の死を願うてゐたのか？――その眼はさう云つてゐるやうに思はれた。

『だつて仕方が無い。仕方が無い。私が此の子を愛さられなかつたとしても、それは私の罪ぢやあ無い。』

八千代は、斯う心に繰返した。――が、八千代は、此の兒の死因が、自分の手落、それも意識せられたる手落にある事を知つてゐる。彼女はヒステリイの昂じた二三日、泣きむづかる子供の爲め

に乳房をも開かず、夜も抱いてはやらなかつた。而して、死ね、死ね！　お前なんぞは死んでしまへ！　と、呪ひ續けてさへゐたのでは無いか？

嬰兒が息を引き取つた病院へは、益夫も駈けつけて、その死床の傍にうれはしげな顏をして坐つてゐた。彼は、青褪めた顏を冷たい涙で濡らしながら、内心の痛みに悶える八千代の肩にやさしく手を置いて、

『仕方が無い、あきらめるんだね。――いや、あなたの爲めにも、而して此の子の爲めに、かうなつた方が却て幸福かも知れないのだよ。慘酷な事を云ふやうだが、まあ、然う思つてあきらめるのだね。』

『益夫さん。あなたもその方がいゝと思つて？』

『その方がいゝと思ふよ。』

八千代は、やゝなぐさめられたやうに涙を斂めた。

『八千代さん。』

と、益夫は、云ひかけて、しばらく躊躇してから、

『僕はあなたに聞き度い事がある。話して呉れますか！』

『何ですの？』

『もう、此の兒は死んでしまつた。だからもう話して呉れてもいゝでせう？』

『何をですの？』

『此の兒の父親は何人なのです。ね、八千代さん。是非打明けて下さい。』

『それは、聞かないといふお約束だつたぢやありませんか？』

『ですが、もう話して呉れてもいゝでせう？　ね、僕は今まで辛抱して來たのです。どうぞ聞かして下さい。』

益夫は、寧ろ哀願するやうな眼附で云つた。彼は、長い間胸を苦めてゐた此の疑問が、もうそのまゝにはして置け無くなつたのであつた。

が、八千代は答へなかつた。八千代の唇は鎖された扉のやうに動かなかつた。

『ね、八千代さん。どうぞ、話して下さい。』

益夫は繰返した。

『そんな事を聞いてどうなさるの？』

『どうするといふわけでも無いんだが、僕あ苦しいんですよ。苦しくてたまらないのですよ。』

愛する者の身の上の、これほど大きな祕密に與り得ぬ事は、實際、益夫にとつて、云ふばかり無い苦みであつた。――が、それを打明ける事は、八千代にとつて、怖ろしく、益夫のそれ以上の苦みでなければならなかつた。

『益夫さん。どうぞ、聞かないで頂戴。私には未だ話せない！』

『だつて、もういゝぢやありませんか？』

『いゝえ。いけないの。ね、そんな事を云つて私をいぢめないで頂戴。』

『別にいぢめるわけぢやありませんよ。』

『でも、それをお聞きになるのは、私をいぢめる事になるのよ。ね、後生だから、もう聞かないで――強ひてお聞きになれば、私、舌を嚙み切つて死んでしまつてよ。』

八千代は青褪めて身をふるはして、然う云ふのであつた。

矢張、疑問は疑問のまゝに葬るより外無かつた。益夫は、嘆息してその問ひを撤回した。

嬰兒の死は、八千代のその日その日を一層據りどころの無いものとした。彼女は嬰兒の死によつて、身も心も自由になつた事を感じた。が、その自由になつた身を心を、何處へもつて行けばいゝのか？

彼女は、此頃、著しくそこねられた健康に、さらでも物惱ましい青葉時の一日一日を持餘してゐた。益夫は、相變らず訪ねて來て呉れた。彼女は、毎日、益夫のおとづれを待ちながら、しかし、益夫を見る事が次第に苦しくなつた。子供が生きてゐるうちは、子供が彼女の情熱を堰きとめて呉れたのだが、今はその保障も失はれた。彼女は、どうかすると、物狂はしく益夫に向つて燃える情を、その胸に持てあます事があつた。そしてそんな時、彼女はわざと、素氣ない態度に出るか、でなければ、わざと子供ッぽくすねて見せるかするのであつた。

而して、然ういふ八千代の氣持は、一々、鋭敏に益夫の心に反射した。八千代が、益夫に會ふのが苦しくなつたと同樣に、益夫もまた八千代に會ふのが苦しくなつた。それでゐて、彼は八千代を訪ねずにはゐられなかつた。

二人はお互ひに愛してゐた。而して、お互に愛されてゐる事を知つてゐた。しかも、彼等は、愛の一語をも口にする事が出來なかつた。

『ねえ。もう、お歸んなさいな。あの可愛い娘さんが、待つてゐてよ。』

云はうとして云へぬおもひに悶々した果に、八千代はわざと邪慳な調子で云ふのであつた。

『いゝえ。娘さんぢや無い。あの可愛い奥さんが――』

『……』

益夫は、一番痛いところにさはられて、苦痛らしく眉をひそめるのであつた。

『本當に悪いわねえ。私、もうあなたに來て頂く事をおことわりしなければならないと思ふのよ。第一、あの奥さんに濟まないのだし――』

『……』

『あの奥さん、私を恨んでゐるかも知れないわ。どんなにか悪い女だと思つて、屹度憎んでゐるわ、憎まれても仕方が無いかも知れないわ。私は本當に悪い女なんですものねえ。』

『あの女はね、八千代さん、人を恨んだり、憎んだりする事の出來るやうな女ぢやあ無いのですよ。』

益夫は歎息するやうに云ふのであつた。

『本當に、お優しい方ね――。あなたには益夫さん、あんな方が宜いのよ。精々愛してお上げにならなければいけませんわ。』

『あの女もかはいさうな女だ！』

益夫は獨語めいた調子で云つた。

『だから、かはいがつておあげなさいな。さあ、もうお歸りにならなきやいけませんわ。』

八千代は妙にヒステリツクな皮肉な調子になつて云ふのであつた。

追ひ立てるやうにして歸しながら、歸したあとの淋しさが堪らなかつた。それがどんなに謂はれないものであるかは十分知りつゝも、八千代は、益夫の同棲者に對して感ずる激しい嫉妬をどうする事も出來なかつた。何も彼も自分が悪いのだ。自分が愚かだつたのだ。さう思ふ一方で、何故か益夫を恨み度い氣さへした。そんなに自分を愛してゐて呉れたのなら、こんなにならないうちに、何故、自分の心をしつかりと捉へては呉れなかつたのか？　お前を愛してゐると、何故、はつきりと云つて呉れなかつたのか？

戀もまた、窓前の籠に囀つてゐる『青い鳥』だつた。あまりに近い爲めに却て見失つてゐた『青い鳥』だつた。本當に自分が愛してゐたのは、又、自分を愛してゐて呉れたのは、此の人の外の何人でも無かつたのだ。兄のやうに妹のやうに、あまりに忸れ過ぎた感情に惑はされて、そこに潜んでゐた誠の戀を自覺し得無かつた愚かさよ。チルチル、ミチルのさまよひから漸くかへつて來て、その青い鳥を我が家の窓前に見出した時、おお！　もう、それは籠の中で死んでゐるのでは無かつたか？

さうだ。もう自分達の戀は死んでしまつたのだ。それが戀だと知つた時、いつの間にか戀してはならぬ運命に陷つてゐる二人だつたのだ。

ある夜、益夫が歸らうとすると、八千代はそこまで一緒にと云つて送つて出た。その日は、八千代のこれからの身の振方といふやうな事に就て話し出された。八千代は、何か仕事の口を見つけて働きに出度いのだが――と云つて益夫に相談した。が、益夫にも別にいゝ考へが浮ばなかつた。

『兎に角、斯うしてゐたつて仕方が無いわ。私、何か仕事を見つけて一生懸命に働いて見るわ。』

新開町の路を、野中の停車場の方へ出ながら、八千代は斯う先刻からの續きを繰返して云つた。

『然うだね。しかし、まだ身體が本當でないやうだから、もうすこし呑氣に遊んでゐた方がよくは無いかね。海岸へでも行つてゐたら、すこし氣が變るかも知れないね。』

『さうね。鎌倉には一寸知つた人があるんですが、あすこも餘りブルジョア臭くていやね。大原へでも行つて見ようか知ら？　ね、ずつと前、死んだ兄やあなたと一夏過した事があつたでせう？』

『大原はいゝかも知れないな。だが、すこし淋し過ぎやしないか知ら？』

『淋しい事は屹度淋しいわ。私、あんな淋しい海岸にひとりでゐたら、海の中へ飛び込んで了ひ度くなるでせうよ。――私ね、此頃、妙に「死」つて事が考へられるのよ。何も彼も面倒臭くなつて

いつその事一と思ひに死んでしまつたらと思ふ事がよくあるのよ。』

『それはどうも悪傾向だな。』

『悪い夢のやうなものね。人生つてものは――。死んだら、此の悪い夢から覺めるかも知れないつて氣が私するのよ。』

『八千代さんは、どうして、そんな悲觀的な事ばかり云ふのかな？』

益夫は、やゝたしなめるやうに云つたが、八千代の言葉には心から同感された。

やがて停車場へ來た。が、八千代は、何となく別れるのがいやだつた。今夜は殊に妙に心細く、そこで別れたらこれきりもう會へないんぢや無いか知ら？　といふ氣が何故ともなくした。

『まだ、早いわね。やうやく八時になつたばかりね。私も、電車にのつて行かうか知ら？　しばらく神樂坂の夜も見無いわ。』

『ぢや、一緒に行きませんか？』

同じやうに別れ度くない益夫は、斯う云つて誘つた。

氣早な夏帽子の二つ三つを車室の中にきらめかして、電車はすが〳〵しい初夏の夜を走つた。牛込の停車場で降りた二人は漫歩の人々の間に交つて默りがちに歩いた。

『ねえ。八千代さん。』

と益夫はふとその沈黙を破つた。

『あなたはねえ。矢張結婚なさる方がいゝのですよ。』

『だしぬけにそんな事仰有つて――どうしてですの。』

『世の中に出て働くなんて、大へんな事だからねえ。矢張、良縁を見つけて、靜かな結婚生活に入る方がいゝと僕は思ふね？』

『良縁？　ほゝゝ。そんなものがあればね――』

と、八千代は嘲るやうに笑つた。

『いくらでもあると思ふがね。』

『でも、今更、すました顏をして、お嫁さんにも行けないぢやないの。』

八千代は笑ひながら云つたが、攻擊的な眼で益夫の横顏を見あげて、

『あなたは、そんなに私の結婚をお望みになるの？』

『だが、さうするより外――』

益夫は、案外に强い八千代の語氣にたじろぐやうにして云つた。

『あなたは、私といふものを、何處か遠くにやつて了ひ度いのでせう？　ね、私と離れておしまひになり度いのでせう？　判つてゐるわ。』

八千代はヒステリツクに昂奮しながら云つた。

『いや、そんな意味で云つてゐるのぢやあない。そんな――』

『いゝえ。あなたの御心持はわかつてゐるわ、ようく判つてゐるわ。――私だつて、あなたから離れてしまひ度いのよ。私が斯うしてあなたに近くゐる事が、あなたにとつてどんなに御迷惑だかといふ事はよく判つてゐるのよ。私、別れてあげるわ。もう、いさぎよくお別れしようと、私思つてゐるんだわ。』

『それは誤解だよ。八千代さん！　僕は何もそんなつもりで云つてゐるんぢや無いんだ。』

『いゝえ。そんな辯解などなさらないつたつていゝわ。益夫さん。あなたは卑怯だわ！　あなたは何故はつきりと云つて下さらないのです。何故、はつきりと――』

八千代は、どうしたのか、取亂すばかりに昂奮した。歩きながらではあつたが、彼女の手は、縋るやうに益夫の腕を摑み、細い顎をあげて、じつと振向いた双の眼は、溢れんばかりの涙の底で燃え輝いてゐた。

『困るなあ。八千代さん。また、そんな駄々を捏ねはじめて――』

益夫は、歩度を緩めながら、あたりを見廻すやうにして悲しげに苦笑した。――例の事ではあつたが、今夜の八千代はとりわけヒステリツクだつた。處も構はぬ激情の發作に、益夫は少なからず閉口しながら、早く、人通りの少ないところへ出ようと滯り勝ちな歩みを急がした。

『私、もう歸るわ！』

肴町の停留場を、電車通に添うて横に曲らうとした時、八千代は突然立ちどまつた。

『然うですか？　ぢや、停車場まで送りませう。此方の道から――』

益夫は、暗い道を選ぶ爲めに、そのまゝ歩みを續けようとした。

『いゝえ。いゝの。私は一人で結構。』

『いや、送つて行きますよ。』

『いゝのよ。私に構はないで早くお歸りなさい。奥さんが心配してゐるわ。』

『いや、未だそんなに遲くはないんだから――』

然う云ひながら、益夫は、ふと、憚り深い眼で、左右を見廻すやうにした。何かの氣配が不思議に彼を衝撃したのであつた。そして次の刹那、彼の眼が、軌道を隔てた向側の、とある店頭の光線

を呑にして立つてゐる、一つの人影を認めた時、彼は思はず、

『あツ！』

と聲を立てた。

そして、彼が、それを認めたと殆ど同時に八千代もまたそれに氣がついた。

『小夜子さん！』

八千代の聲も筒抜けて走つた。

しよんぼりと立つて、喰ひ入るやうな眼で此方を見つめてゐた小夜子は、斯う殆ど同時に二人に聲を掛けられると袂で面を掩ふやうにしてくるりと脊を向けた。そして、よろめくやうに走り出して行つた。

『お迎へに來たんだわ。早く行つてお上げなさいよ。』

その後影に眸を吸はれてぼんやりと立つてゐる益夫を小突くやうにして八千代は云つた。そして

『ほゝゝゝ！』

と妙に邪惡な調子で笑つたが、自分もまたくるりと脊を向けて、左樣ならとも云はずにもと來た方に引かへした。喪心したやうに突立つてゐる益夫を其處に殘したまゝ。

それから五分ばかりの後、暗い狹い矢來の通りの、とある電柱の蔭で、益夫は小夜子の小さい身體を抱へこむやうにして、しきりになだめたり慰めたりしてゐた。小夜子の身體は、おこりのついたやうに、小刻みに慄へてゐた。そして、犇と顏に押しあてられた兩袖の下から、激しい嗚咽の聲が漏れた。髮の香と、涙の匂ひとが、かゞみかゝるやうにした益夫の頰を撲つた。

『ね、誤解してはいけないのだ。あの人は、何でもありやしないのだ。いつも云ふ通り死んだ友達の妹で、心易くはしてゐるが、お前の考へてゐるやうな、そんな深い關係がある人ぢや無いのだ。ね、あの人にもいろ〳〵の事情があつて、それで相談相手にはなつてゐるが、唯、それだけの事なのだね、だから、へんに氣を廻しちやいけないっ』

『………』

『ね、小夜子。何處へ行くたつて、お前はひとりぽツちの身體で、どこへも行くところは無いぢやあ無いか？　そんな事を云つちやいけないよ。そんな事を云つて、僕を困らしちやいけない。ね、それは僕も惡かつたよ。いつもお前を一人にして置いて、それでお前も心細くなつたのだらう。僕が惡かつた。これから僕もお前のたよりになるやうにするからね。ね、だから、そんな事を云つて

僕を困らせないでお呉れ。ね、ね。』

が、小夜子は唯益〻激しくすゝりあげるばかりであつた。この弱々しい小さな魂は、支へ難い悲みに、蝶の翅のやうに破れようとしてゐる。さう思ふと、益夫はいぢらしさが胸の底からこみあげて來た。彼は、兩手で小さい身體を抱き締めるやうにした。

『ね、小夜子！　僕を信じて僕を手賴りにしてお呉れ！　思ひ過しをしてはいけないよ。ね、つまらない事を考へないでね。』

小夜子はしかし益夫の言葉を受入れる事は出來無かつた。受入れる事は出來なかつたが、男の愛撫にさからふだけの力も無かつた。ヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽ

ヽヽヽヽヽヽ。

そこは、兩側に邸の高い塀と、塀越の植込の梢とが立ちつゞいてゐたので、暗い夜を一層暗い闇で塗りこめてゐた。だから益夫は、自分達のすぐ身近にぢつと立ちすくんで、これ等の一切を聞きすましてゐる人が居た事には氣がつかなかつた。

兎に角、小夜子を賺しおほせた益夫は、小夜子の肩に手をかけるやうにして、家の方へ歩き出して行つた。

二人のあとを見えがくれについて來て、闇の中から、二人の様子を打戍つてゐた八千代は、二人の足音が、もつれ合ふやうにして、やがて次第に遠ざかつて行くと、紙より白い闇を切りぬいてゐる顔に、冷やかな笑を浮べた。彼女は、聲をあげて笑はうとさへした。

が、强ひられた笑ひ聲は、彼女の咽喉にからみついてしまつて、思ひがけない慟哭が胸の底から衝きあげて來た。彼女は、あやふくよろめき倒れようとする身體を、辛うじて塀に支へて聲を呑んで哭いたのであつた。

しばらくの間さうして哭いてゐた八千代は、やがて涙ををさめた。涙を收めた眼でふと見上げると、一ところ雲切れのした空に、何の星か、きらりと一つ輝いてゐた。

彼女はまじろぎもせずに、その星をみてゐた。

決心が、やうやく彼女の胸に形づくられた。

『まあ！』

と、主婦は驚きの眼で、益夫の顏を見据ゑた。

『ぢや、旦那樣は何も御存じ無いのでございますか？』

『僕は何にも知らないんだが、一體、何時なんです。』

『此前旦那樣がおいでになりました日の、あくる日で御座いましたよ。急にお越しになるといふので、私もへんだと思ひましたが、何も彼も旦那樣と御相談の上での事だとばかり思つて居りましたのですよ。』

『をかしいですなあ！』

と、ぼんやりとして云つたが、益夫にはすべての事が了解された。さうだ。八千代は身を隱したのだ。とう〳〵自分から離れ去つたのだ。――その八千代の心持は、益夫にもわかり過ぎる程わかつてゐた。

『どちらへと、いらつしやる先もうかゞつては見ましたのですが、唯牛込の方と伺有つたばかりで

詳しい事は孰れあとから手紙でといふ事でした。それで、しばらくの間ではございましたが、あんなに心易くしていたゞいたのですから、御移轉先ぐらゐは知らして頂けることを御待ち申して居りましたのですが――』

と、主婦は、稍〻恨みがましく云ふのであつた。

『さうですか？』

益夫は一寸沈吟したが、自分の立場が、主婦の眼に、どんなに間の抜けた者に見えるかに氣がつくと、挨拶もそこ〳〵に玄關先を離れた。通りの方へ出てから振り返つて見ると、半ば、樹立に掩はれた二階が、戸をしめられたまゝになつてゐるのが云はうやうなく淋しく彼の眼に映つた。

あの人はとう〳〵去つて了つた。とう〳〵自分から去つてしまつた。

益夫は、もう一度斯う繰返した。何だか、ほツと重荷をおろしたやうな氣がした。その方がいゝのだ。その方がお互ひの爲めなのだ。さうも思はれた。

が、さうは思ひながらも、益夫は衷心の淋しさをどうする事も出來無かつた。胸の眞中にぽつかりと大きな穴が明いたやうな感じだつた。心のしんがぺきりと折れて、全然生甲斐といふものが失はれたやうな氣がした。

家に歸つて見ると、机の上にいろ〳〵とり交ぜて數通の郵便物がのせられてあつた。若しやと思つて、手早くしらべて見ると、中に空色の小型の角封が見出された。差出人の名は無かつたが、筆蹟ですぐに八千代のだと知られた。益夫はふるへる指先で、封を破つた。四つにたゝまれた、一枚の書簡箋には、慌だしい走り書きで斯う記されてゐた。

長々の御深切、骨身に沁みてありがたう御座います。いよいよお別れをしなければならない時がまわりました。種々お話致してからと思ひましたが、却て未練の種と存じまして、このまゝお別れを致します。定めて我がまゝな女とお怒りとは存じますが、斯う致しますより外に道の無い私の心持をお察し下さいませ。どうぞ、私の事などは思ひ捨て遊ばされて、小夜子様とおんむつまじくお暮らし遊ばすやう、お二人の幸福を蔭ながらお祈り申上げて居ります。私の行衛は、構へてお探し下さいますな。昨夜は一晩泣きあかしました。愚かなる女の愚かなる涙をおわらひ下さいませ。申上げ度き事は山々ながら、今更愚痴でございますから、もう書きませぬ。最後に、あなた様に捧げます八千代の永久に渝らぬ眞ごころを御受け下さいませ。小夜子さまにもよろしく

益夫様　　愚かなる八千代

益夫は讀み終ると、しばらくの間、じつとその亂れた文字の上を打戍つてゐた。その文字の一つ一つが、深い悲みを涙の底に湛へた眼となつて、じつと自分を見返してゐるやうに思はれた。

住所は、中の書簡箋にも記されてはゐなかつた。切手の上のスタンプの文字も、それとはつきりわからなかつた。『大森』とも讀めれば、讀みやうによつては上野とも讀めるやうに思はれた。

益夫は、その手紙を机の上に置き、頰杖をついて眼を空間に睜つた。――これは、永別の言葉では無いか？　永久の左樣なら！　ではないか？　あの人は、では、もう終生自分とは會はないつもりなのか？

長い間の八千代との交渉が、情景から情景へと、フイルムのやうに彼の眼の前に展開された。

――そこには女學生時代の無邪氣な八千代がゐる。洋書などを抱へて自分の机の傍に寄つて來るいかにも青踏風な八千代がゐる。『益夫さん！』と蓮葉に呼びかけて愛撫に充ちた眼で自分のぢぢむささをたしなめたりした八千代がゐる。下宿に訪ねて來て、晝寢をしてゐる自分の顏の上に華やかな笑ひの雨をあびせかけたりした八千代がゐる。おゝ、八千代！　と益夫はその八千代の空しい面影を抱きしめ　樣にして机の上に額を伏せた。彼の胸には汪然たる悲みが搖れあがつた。悲しみの中には苦い苦い悔いが交つてゐる。何故に、自分は正直にその心を打ちあけなかつたか？　あ

まりに無邪氣に馴染みよる八千代の態度が戀の言葉を口にする事を躊躇させたとは云へ、自分にも少し勇氣があつたなら、そんな躊躇は踏み越えて、正直に戀を打明ける事が出來た筈だつた。心に死ぬばかり思ひながら、思ひ切つてそれを云ふ事が出來なかつたばかりに、斯うして遂に竟に、八千代を永久に失はなければならなくなつたのではないか？

益夫は机の上に額を伏せたまゝ、辛うじて悲みの爆發を抑へてゐた。女ならば聲を放つても泣かう！　男の嘆きは、喰ひしばられた唇に、血をにじますばかりであつた。

漸くその悲みをとりしづめて面をあげた時、益夫は、心配さうな顏をして、そつと自分を眺めてゐる小夜子を傍に見出した。物云へぬ啞のやうに、唯、口もとをふるはしながら、不安らしく自分の顏をのぞき込んでゐる眼眸が、益夫の痛みにたゞれた胸にしみ〴〵と沁み入つた。

『あゝ、小夜子かい？　僕は少しうたゝねをしたやうだね。』

益夫は、さりげなく笑つて見せた。が、それがうたゝねをした顏であらうか？　青褪めた顏うるんだ眼、引歪められた苦惱の表情。――小夜子は、慌てゝ押しかくした掌の下の手紙にちらとやつた眼を、益夫の顏に戻した。

『どうなすつたのです？』

と、その物云はぬ眼が問うてゐた。

『小夜子。どうかしたかい？』

益夫は、あべこべに問ひかへして、いきなり小夜子の兩手をとつて引きよせた。

『どうしてそんな悲しさうな眼をしてゐるの。え？』

益夫の云ふ事は、みんな此方から問ひ度い事ばかりだつた。小夜子は戸惑ひしたやうな眼を覺束なくさまよはしてゐた。

益夫の懊惱は、益〻加はつて行つた。もう、永久に會へないのか知ら？　と思へば思ふほど、彼の戀心は一層燃え熾つた。――それに、外に頼りにする者もない孤獨の八千代が、これからどんな道にはいつて行くかも不安だつた。教養もあり、理性にも淺くは無い筈の八千代だつたが、何處かに心の平衡を得ないやうな、何となく悲劇的な色彩をもつた八千代の性格も想はれた。あゝして子供を生んだりしてから、ひどくヒステリツクに、自棄氣味にさへなつてゐる八千代の現在の心持にも、安心のならないものがある。どうしても一度會はなければ――益夫は、その兄らしい心づかひからも、思ひあせらずにはゐられないのであつた。

彼は再び荻窪の八千代の寄寓した家に出かけて行つた。そして、八千代の荷物を送り出した筈の

俥屋へ行つて行先を調べて見たが、生憎その車夫が歸國してしまつたとかで要領を得無かつた。大塚の叔母の家といふのをも、漸く探しあてゝ尋ねて見た。

『さあ、どうしました事やら、近頃一向寄り附きませんが――』

と、叔母は冷淡な調子で云つた。

それから、江戸川のお友達の家と聞いてゐた橋本千惠子の許をも、樣々の苦心の上に見つけ出して、その後若しや八千代が來はしないかと訊いて見た。

『いゝえ。その後、一向お見えになりませんのですよ。私もいろ〳〵お案じ申上げて居るので御座いますが、まあ、本當にどうなすつたといふので御座いませうねえ。』

稍〻迂散臭さうに益夫の樣子を眺めながらも、千惠子は、心からうれはしげに斯う云つた。

益夫が岡田博士の邸を訪ねたのは、さうして一週間ばかりの間、さん〳〵方々を尋ね廻つての後であつた。益夫は、どんな事情があつて、八千代が博士の家を出たかを知らなかつた。どちらかと云へば、益夫は八千代が博士の家に居る事をあまりに好まなかつたので、八千代がそこを出て來たのを、善い決心として歡迎したのであるが、今にして思へば、八千代の謎が、博士の邸に關係があるさうな氣がした。博士に會つていろ〳〵とたづねて見たら、何かその間の消息が掴めはしまいか

とも思はれた。

專攻の學問も道を異にしてゐたし、心持に於て、何か相容れないものを感じてゐたので、益夫は八千代の兄を通じての關係から、師の禮をこそとつてゐたれ、博士の邸に歩みを向けた事は、これまでにも數へる程しか無かつた。それで、かなり闊の高い思ひをしながらも、押し切つて岡田邸を訪ねたのは、もう夏深い日射が、じり〳〵と額に燒きつくやうな或日の事であつた。

博士の邸は、深みまさつた樹立の中に埋もれて、しんと靜まりかへつて居た。玄關先の廊柱の根元には遲い薔薇が眞赤に燃えて、そこに眠つてゐた犬が、迂散くささうな眼で此の見馴れない訪客を見上げるやうにした。

刺を通じると、そこへ出て來たのは宮子であつた。——宮子は、一度、八千代に伴はれて、益夫の下宿を訪ねて來た事があるので、益夫の顏を見覺えてゐた。

『あら！』

といふやうな顏附で、彼女は先づ好意のある微笑を投げた。

『先生はいらツしやいますか？』

益夫は尋ねた。

『をぢ様は唯今お留守でございますの。北海道の方へ講演にまゐつて居りますの。』

『さうですか？』

益夫は、落膽したが、考へて見れば、大學はもう暑中休暇になつてゐる筈であつた。今まで、それを考慮に入れてゐなかつた迂濶さが、我ながら笑止な氣がした。——が、益夫はそのまゝ引返す氣にはなれなかつた。聞かうとする事の爲めには、博士自身よりも此の娘の方が却つていゝやうな氣がした。

『僕は一寸お伺ひしたい事があつてあがつたのですが——』

『何でございませうか知ら？　私でわかる事なのでせうか？』

一年あまりの間に、見違へるほどまさした宮子は、とりすましした調子で云つた。宮子はいくらか痩せてゐた。一重瞼の單純な容貌ながら、何處かに思ひ深げな、物惱ましげな表情さへ添つてゐた彼女の春も、もうちら〳〵とした早春の穩かさから風と雨との花時へとうつりつゝあるらしかつた。

『あの、八千代さんの事なんですが——』

と、益夫は稍〻口籠つてから、

『八千代さんは、近頃、お宅へは見えないんでせうか？』

『八千代さん？』

と宮子は鸚鵡返しに繰返して、

『いゝえ。さつぱり――ぢや、八千代さんはあなたの方にもいらつしやらないのでございますか？私、あなたの方では、おわかりになつてゐる事だとばかり思つて居りましたのに。』

宮子の眼は、圓く睜られた。

『さうですか？　手紙などもまゐらないのでせうか？』

『いゝえ。さつぱり――』

『先生は、御存じの様子は無いでせうか？』

『をぢ様も多分御存じ無いだらうと思ひます。まあ、ぢや、あなたの方でも、八千代さんを探していらつしやいますの？――私の方では、もう一年近い間、まるきり八千代さんのおたよりを伺ひませんのよ。』

『一年近い間？』

『えゝ。去年の、あれは七月の半ばでしたわ。八千代さんは、大原のお友達のところへいらつしやるのだと云つてお出でになつたきり、お歸りにならないのですわ。』

『あゝさうですか？』

益夫は、今日の訪問の畢竟無駄であつた事を知つた。彼は、嘆息して、そして、辭し去るより外無かつた。

益夫と宮子との玄關先での會話を、引接室の窓に凭つて、じつと聞きすましてゐた幹太郎は、益夫の力無けに出てゆく後姿が、門内道の曲り角に消えてしまふまで見送つてゐたが、やがて、窓から姿を消したと思ふと、裏門の方から、人目を忍ぶ目づかひであたりを見廻しながらこつそりと通りに出た。そして、丁度そこを歩いて行く益夫を、

『辻さん！』

と呼びかけた。

眼を足もとに落して思ひ沈みながら歩いてゐた益夫は、突然の呼びかけにびつくりして振返つて見た。――そして、その自分を呼びかけたのが、此の邸の一人息子の幹太郎である事を認めるまでには、かなりの間がかゝつた。

『やあ、幹太郎さん！』

辛うじて、識認した益夫は、未だいくらか思ひ惑ふやうな眼附で幹太郎の姿を打戍つた。――

矢張八千代に紹介されて、たしか一二度幹太郎を見た事のある益夫は、しかし、あまりに變りやうの激しい幹太郎の容貌に驚かずにはゐられなかつた。お出額な額、大きな眼、尖つた顎。堂々たる父博士の風采には似もつかず、何となく畸形的な感じのする容貌は前からさうであつたが、しかし前にはこれほどでは無かつた。どこかにまだ流石に少年らしい若々しさが見られぬ事は無かつた。血色もそんなに悪くはなく、頬も、こんなにまでやせこけてはゐなかつた。今見る幹太郎は、寧ろグロテスクとも云ひ度いばかりに、陰惨な表情をしてゐた。唯、その眼ばかりが大きく見ひらかれて、しかも、それが、渇き喘ぐやうに、燃え輝いてゐるのであつた。

『辻さん。』

と、幹太郎は、その眼で益夫の顔を見上げながら、

『本當に、あなたも八千代さんのゐるところを知らないんですか？』

『えゝ。僕は知らないのですよ。』

『僕も探してゐるのです、一生懸命に探してゐるのです。』

『あゝ、君も探してゐるのですか？』

益夫は、さう云ひながら、堪へがたい苦悩と渇望とに、全身をわなゝかすやうにしてゐる幹太郎

の様子を、重なる驚きのうちに打眺めた。――が、此の時、ふと、曾て、八千代が笑ひながら見せた事のある幹太郎の戀文を思ひ出した。

『僕は、一年近い間、毎日、あの人を探してゐるのです。――いつでしたか、筑土の方のあなたの下宿をお尋ねした事がありました。あなたにおうかゞひしたら、屹度わかると思つたのです。ですが、その時はあなたは、もう何處へか越して了つて下宿にはいらつしやいませんでした。下宿の人はあなたの移轉先がわからないといふのです。そんな事は無い筈だとしつこく聞いて見たのですが、どうしても判らないと云つて教へてくれないのです。それで僕、あなたのお住所を隨分探したのですけど、どうしてもわからないのです。』

『あゝ、さうですか？　そんなに探したのですか？』

『ずゐ分探したんです。八千代さんがゐなければ、僕の世界は闇なのです。僕はどんな事をしてもあの人に會ひ度いと夢中になつて、この一年もの間、外の事は何も考へないで、あの人を探してゐるのです。けれど、どうしても見つからないのです。僕は、まるで氣が狂ひさうなのです。』

『さうですか？』

益夫の驚きは、やがて深い嘆息に變つて行つた。

『一度、電車の中にゐるのをちらと見た事があります。昨年の夏です。八千代さんが僕の家にゐなくなつてから未だ間もない頃です。江戸川から飯田町の方へ行く電車に乗つてゐるのを、僕は停留場に立つてゐて、ちらと見たんです。僕が氣がついた時は、電車はもう走り出してゐました。僕は一生懸命電車を追驅けて飛乘をしようとするのを、線路監督の奴に抱きとめられて了つたのです。あんな殘念な事は無かつたです。――それから、それから今まで、一度もあの人に會はないのです。』

幹太郎は、時々、苦しくどもるやうにして語りつゞけた。

『ふむ。』

と、益夫はもう一度深い溜息をついた。

『辻さん！　あなたも矢張八千代さんのゐる處を知らないのですか。あなたが知らないといふ法は無いと僕は思ふんですが――』

幹太郎の眼は、斬りつけるやうに益夫の顏を眞向から見た。

狂戀

『いや、僕も實は、八千代さんを探してゐるのですよ。あなたの許でうかゞつたら、手がかりがつかめるかも知れないと、それをうかゞひに今お訪ねしたところなんです。』

『然うですか？　本當に、ぢやあ、辻さんも知つてゐないんですか？』

幹太郎は、疑ひ深い執拗な眼で益夫の顏を見つめてゐる。

『本當に僕は知らないんです。』

『もう前からですか？　あなたも、あの時分からずつとあの人を探してゐるんですか？』

『いや。二十日ばかり前からなんですがね。』

『二十日ばかり？　ぢや、それまであなたは八千代さんの居る處を知つてゐたんですか？　――あ、さうですか？　ぢや、僕はあなたを探せば宜かつたんだ。あなたの居るところを探して、あなたに聞けば宜かつたんだ。いや、それに氣がつかない事は無かつた。關口さんにも聞いて見たんだけど、關口さんもあなたの住所を知らないといふんだ。關口さんは、意地惡だから、知つてゐても

敎へて呉れなかつたのかも知れない。あの人が、あなたの住所を知らないといふ法は無いんだから、――しまつた！　どんな事でもしてあなたを探し出して、あなたに聞けば宜かつたんだ！』

幹太郎は、足摺をして殘念がつた。

『あゝ、さうですか？　君はそんなに探したんですか？』

益夫は再び斯う繰返して、深く嘆息した。曾て八千代に見せられた手紙から、又、八千代の口吻から、此の少年が八千代に熱い思ひを寄せてゐる事は知つてゐたが、その稚純さの中には何か知ら微笑ましい滑稽味さへ感じられて、眞面目に問題として取上げる氣にもなれなかつた。が、今見る幹太郎の此の樣子は？　益夫はあまりに眞劍なその樣子に擊たれた。

『ぢやあ、君は――』

と、益夫は思はず幹太郎の肩に手をかけるやうにして、

『そんなに、あの人を愛してゐたんですか？　そんなに一生懸命にあの人の事を思つてゐたんですか？』

『僕は、寧ろあの人を崇拜してゐるんです。あの人は僕のマドンナだ。あの人がゐなければ僕の世界は闇なのです？　あの人は僕の光です。僕はどんな事をしてもあの人を探し當てなければならな

いんです！』

幹太郎は、そこまで云ふと急に調子を變へて、

『だけど、駄目だ！　駄目だ！　あの人は僕の此の氣持を些とも知つちや呉れないんだから――些とも知つちや呉れないんだから――』

幹太郎は兩手で顏を引捲るやうにしてすゝりあげた。

『いや、君が、それほどに思つてゐるなら、いつか屹度その心持が判る時が來るよ。――僕も是非あの人を探し出さなければならないんだ。ね、一緒に探さう！　だが、あの人は、一體どういふわけで君の家を出たのだらう？　どんな事情があつて君の家を出たのか、君は知つてゐますか？』

『それがまるきり判らないんだ。海岸の方の友達の處へ行くと云つて出たきり、それきり居無くなつてしまつたのです。』

『あゝ、さうですか？』

『ぢや、二十日ばかり前までは、あの人の居るところは、あなたに判つてゐたんですね？　あの人はそれまでどうしてゐたんです？』

幹太郎は輝く眼で、鋭く切り込んだ。

『あの人もいろ〳〵苦しんでゐましたよ。』
『何を苦しんでゐたんです？』
――だが、益夫にはそれを云ふ事は出來無かつた。
『辻さん、あなたは今何處にゐるんです？』
『あゝ、僕はね。
と、益夫は名刺をとり出して、
『こゝにゐるんです。時々、遊びにやつて來給へ。』
『矢來なんだね。ぢや、すぐ近くぢやありませんか？　すぐ眼と鼻の間に居乍ら、今まで知らずにゐるなんて！』
と、幹太郎は再び殘念さうに繰返した。
『お父さんは――先生は今御留守なんだつてね。』
『あゝ、おやぢは今旅行中です。』
『君のお父さんは、八千代さんの事を知つて居ないのかね？』
『おやぢは知らない筈は無いと僕も思つた。それで種々聞いて見たんだけど、矢張知らないと云つてゐる！』
『然うかねえ。』
『だがね、僕はどんな事があつたつて屹度あの人を探し出す！　探し出さずに措くもんか！』
幹太郎は、發作的の昂奮を以て斯う叫んだ。その狂的な眼が、爛々として射るやうに輝いた。
『君は、今學校はどうしてゐるの？』
『はゝゝ！　學校なんかに行つてるもんか！　學問なんかし度つてつまらない。あの人がゐなければ僕は闇だよ。』
『さうか？　――そんなにまで思ひ詰めてゐるのかねえ。』
益夫は、いたましげな眼で、幹太郎の顏を見つめた。幹太郎は、ちらと益夫の眼を見返したが、刹那、その不逞な顏附を裏切つてゐる羞恥の表情がひらめいたと思ふと、
『ぢや、僕は失敬します。』
と云ひながら、くるりと踵をめぐらした。
少し左の肩をあげて、のろ〳〵歩いて行くうしろ姿を、益夫は憮然とした心持で見送つた。

幹太郎は家に歸ると、自分の部屋に戻つて、籐椅子に腰をおろした。そして、兩手で片膝を抱き寄せ、突き刺すやうな眼を床の下に落して、じつと考へ込んだ。――彼の思ふ事は、いつも同じ事だつた。八千代！　八千代！　その美しい面影は、いつも身に添うて離なれなかつた。夜の夢、白日の夢、幹太郎は此の一年近い毎日毎夜を、唯、八千代を思ふ事によりてのみ過してゐる。學校も廢めるとも無く廢めてしまひ、物に憑かれたやうに、ふら〳〵と出てあるくのが癖になつた。出てあるくうちに、惡い仲間が出來た。彼はそれ等不良の徒にまじつて、珈琲店や酒場を飲み歩く事をはじめた。注意人物としてその筋の票にものせられてゐた。

かういふ幹太郎の樣子を見て、胸を痛めるのは、唯、宮子ばかりでは無かつた。父博士にとつても幹太郎は一人しか無い大切な息子だつた。博士はどんなに諭しもし警めもしたか知れ無かつた。一度、警察の方から、博士にあて〻注意があつた時などは、名譽ある學者の家庭にあるまじき不面目として、博士は徹宵膝下に幹太郎を引きつけて、涙を流して反省を促した。

『一體どうしたといふのだ！　わしはお前がこんな者にならうとは夢にも思はなかつた。お前どうしてそのやうに本心をとり失うてしまつたのだ？　重ねて、こんな事があれば、私はもう世間に顏向が出來ん！　わしが五十年か〻つて築きあげた地位も名譽も、一朝にしてめちや〳〵になつてしまふのだ。お前は、此のわしの顏に泥を塗るのがそんなに面白いのか？　そんなに私を苦め度いのか？』

老いた父の涙は、流石に幹太郎の胸に沁みずには居無かつた。が、幹太郎にしたつて、好んでさうした暗い生活へと落ちて行つたのでは無かつた。やるせ無い心の苦みが、彼に精神と肉體との均衡を失はせ、その爲めに、我知らず、墮落の淵に淪んで行くのである。

『お父さん、僕がお父さんを苦め度いなんて――そんな事は無いんです。僕だつて苦しいのです！』

『何がそんなに苦しいのだ？』

博士はさう云つては見たが、それ以上問を進める事は出來なかつた。幹太郎の苦みが何であるかそれは博士にもわからない事は無かつた。――八千代の事に觸れて行くのは、博士にとつても堪へ難い苦痛だつた。

あの人に會へさへしたら――と、幹太郎は思ふのであつた。あの人に會へさへしたら、自分は救はれる。自分を、救つて呉れるのは、あの人を措いて外にはないのだ！

幹太郎は、机の曳出しを明けて、その底の方に突ツ込んである一葉の寫眞をとり出した。それは

八千代の寫眞だつた。少なくとも、一日に一度は屹度出して見る寫眞だつた。彼は、その寫眞を燃えるやうな眼で見入りながら、心の中で云ふのであつた。

『八千代さん！　八千代さん！　あなたは何處にゐるのです？　何處にあなたはゐるのです？』

それは八千代がまだ女子大學の學生だつた時分にうつした寫眞だつた。七三の髪に髪飾一つなく、美しく澄んだ眼眸？　輪廓の正しい端麗な顏には、口もとにかすかな微笑が――あのモナ・リザのそれのやうな微笑が漂うてゐた。――その謎めいた微笑が、見てゐるうちに、次第に苛立たしく幹太郎の心をかきむしるのであつた。

彼は、溜息を一つすると、その寫眞を曳出しの底の方に突込んだ。そして、机の上に置いてあつたACCの箱から一本拔き出して啣へた。

『幹太郎さん！』

そこへはひつて來たのは宮子だつた。宮子は、おづ〳〵とした調子でそつと呼び掛けた。が、幹太郎は聞えたのか聞えないのか、三四本目の紙卷を吹かしながら、もう夕影の映りはじめた窓硝子を、じつと見つめてゐた。

『幹太郎さん！』

『……』

『幹太郎さん！』

モ、三度目に呼ばれて、幹太郎はものうく、首をめぐらした。

『お聞えにならないの？』

宮子はやゝ恨みがましい眼附をした。

『うるさいな！　何か用かい？』

『御夕飯の仕度が出來ました。』

『喰べ度くない！』

『でも、おひるにもめしあがらなかつたでせう！　おあがんなさいな。』

『……』

『ね、もう仕度が出來てゐるんですよ。』

『喰べ度くないと云つたら！　うるさいね。』

『でも――』

『食ひ度くなりや勝手に食ふから拋といてお呉れ！』

宮子はとりつき端も無く口を噤んだが、涙ぐんだ眼をあげると、

『あんまりだわ！』

と低い、しかし力の籠つた聲で云つた。

『何があんまりだい？』

宮子は、涙の底から燃える眼で屹と幹太郎を見やつて、物云ひ度げに唇ををの〻かしたが、そのまゝ部屋を出て行つた。

幹太郎は、やがてあたりが暗くなつたのにも氣がつかぬやうに、三十分ばかりの間じつと坐り續けてゐたが、ノックの音に沈思を破られて、

『何人だい？』

と、不機嫌に云つた。

細目に開かれた扉の蔭から、おびえたやうな顏をさし入れたのは、小さい女中だつた。

『あの、お電話でございます。』

『電話？　何人からだい？』

『石川さんとか仰有いました。』

『石川――』

さう呟き返しながら幹太郎は椅子から身を起した。そして、電話室の方へ出て行つた。

『岡田君だね。居て呉れて宜かつた。』

電話の聲は、醉氣を帶びてゐた。

『今、カフエ・ニンフに居るんだがね。山崎も、木島も、伏木も、皆揃つてゐるんだ。やつて來ないかい？』

『さあ、出かけても宜いけれど――』

幹太郎は一寸澁るやうに云つた。カフエ・ニンフといふのは神樂坂の裏町にある小さな珈琲店で彼等の仲間の根城であつた。連中があつまつて、ビールやウイスキーを呷りながら、けば〳〵しく塗りこくつた女給共を對手に大騒ぎをやつてゐる光景が、眼に浮んだ。さういふ空氣の中に身を置くより外、その苦みの紛らしやうを知らぬ幹太郎にとつて、それは克ち難い誘惑だつた。

『出かけて來給へ。皆、待つてゐるんだよ。』

『うむ。』

幹太郎は、併し、生憎墓口の中が空虛である事を考へて、返事を澁らせた。

『それにね、君に是非見せ度いものがあるんだよ。君を喜ばせるものがあるんだ。すぐにやつて來給へ。』

『何だい？　見せ度いものつて？』

『來て見ればわかるよ。こゝぢやあ云へない。兎に角、素敵なんだ！』

石川は思はせ振りな調子で云つた。――石川の話の背後に、笑ひ聲や、高く叫ぶ聲や、今あの牡丹色の壁紙ではられた小さい廣間に渦卷いてゐるらしい噪音が、蜂のうなりのやうに聞きとられた。

――と、二言三言云ひ爭ふ聲がして、

『岡田さん。私よ！』

と蓮葉に呼びかけたのは甲高の女の聲だつた。――女給のお光の聲だつた。

『いらツしやいよ。皆して待つてゐるのよ。それにね、今夜は是非あなたに會はせ度い人があるのよ。あなたの探してゐるラヴさんが見つかつたのよ。ねえ、いらツしやいよ。』

お光の聲も、もうかなり醉つてゐた。

『何云つてるんだ！』

幹太郎は吐き出すやうに云つたが、見せ度いものがある、會はせ度い人がある――といふ彼等の

言葉は、妙に彼の胸を躍らした。

『ぢや、待つて〻呉れ給へ。すぐに行くから。』

彼はさう返事をして電話を切つた。

生憎今日は小遣ひが些とも無い！　彼は、とつおいつしばらく考へた末、こつそりと二階の父の圖書室へはひつて行つた。そして、そこに背皮の金文字を並べてゐる書物の列の中から、殊に貴重書として祕藏されてゐるやつを五六冊ぬき出して、袖にかくすやうにして階下に降りた。

それから三十分ばかりの後、彼はその大きな新聞紙の包みを小脇にして、早稻田の大學前のとある古本屋の店先にはひつて行つた。

背低の墓のやうに肥つた、しかし血色の惡い本屋の亭主は、前に置かれたその紙包みを開いて、一冊一冊、吟味して見てから、さて、にやりと笑つて、

『こんなものを持ち出してい〻んですかい？』

と云つた。

『唯、預けておくだけなんだ。おやぢがあとで、金をもつて取りに來るよ。』

幹太郎もにや〳〵笑ひ乍ら云つた。

『金を持つて取りに來て下さるのはいゝが、また先生から大眼玉を喰はなきやなりませんからな。どうも、困りますな。』

『おやぢは今家にゐないんだ。二三日うちに僕がそれだけの金をこしらへて來る。さうすりや、おやぢに判らずに濟むんだから、是非貸して呉れ給へ。』

そんな風の押問答の末、二三十圓の金を懐にした幹太郎は、それから更に二十分ばかりの後カフエ・ニンフの入口に姿を現はした。

幹太郎がはひつて來るのを認めると、

『やあ！　やつて來たね。みんな待ち兼ねてゐたよ。』

と、先づ聲を掛けたのは、電話をかけて來た石川だつた。　ダダ派の詩人と自稱する石川は箒のやうなもぢや〳〵あたまをして、色白の顏を桃色に染めてゐた。ロイド眼鏡の底に細められた近視眼をとろりとさせて、片手を、しなだれかゝるやうにした女給のお光の肩に置いてゐた。

『よう！　待つてたぞ。』

『遲かつたぢや無いか？』

山崎と伏木とが、續いて同時に聲をかけた。アナアキストだといふ山崎は、その懶く肥つた身體

をルパシュカに包んで、バクウニンに似てゐる事が自慢の丸まつちい顏を、頰杖の上にのせ、ふらふらと酒臭い息を吹いてゐた。つい此間まで、ある小さな劇場で端役なぞをしてゐた伏木は、はでな色のボヘミヤンネクタイを、細い顎の下に搖ぶりながら、もう一人の女給のお淸と、何か西洋の小唄見たやうなものを合唱してゐたところだつた。

『さあ、此方へ來給へ。』

石川に促されて、幹太郎は、その向ひ合ひに默つて腰をおろした。幹太郎の憂鬱な顏は此の明々と明るい、賑かな部屋の空氣に一つの暗い影を投げたやうに見えた。その幹太郎の樣子を見ると、先刻の電話での慣々しさに似氣無く、お光は一寸怖氣づいたやうな眼附をした。

『何をぼんやりしてゐるんだい？　早く、ウイスキイを持つて來給へ。』

石川が叱りつけるやうに云つた。

『はい。はい。本當に岡田さん、隨分お待ちしたのよ。』

お光は立つて行きながら、とつてつけたやうな愛想を云つた。

『木島は居ないのかい？』

幹太郎は、きよと〳〵とあたりを見廻すやうにした。

『木島？　便所へでも行つたんだらう？』

石川が答へると同時に、土間の續きの扉の蔭から、

『やあ！』

と、古ぼけた大學の制服をつけた木島が、よろ〳〵とした足どりで出て來た。大學の制服などつけてゐるが、中では木島が一番年嵩だつた。

『どうしたい？　相變らずぼんやりしてるなあ！』

木島は、よろめきかゝるやうに幹太郎の隣の椅子に坐ると、片手で幹太郎の肩を抱き寄せるやうにして、

『思ひつめてるんだなあ！　此の憑きものゝしたやうな樣子は何うだい？　――だが、お前は賴母しいよ。兎に角、それほど一生懸命に一人の女を思ふ事が出來ると云ふなあ、實際、賴母しい心意氣だよ。おれはお前が好きだよ、おれはお前の純情を愛するよ。おい！　女共。』

と、もうすつかり醉つてゐる木島は、女給達の顏を、醉眼で睨み廻すやうにして、

『世の中には斯ういふ男もあるんだ。お前達も戀をするんなら斯ういふ男を選んで戀をしろよ。お清！　その男なんか駄目だぞ。伏木なんぞの云ふ事を信じると馬鹿を見るぞ。伏木なんぞの云ふ事

は、舞臺の臺詞と同じ事だぞ。そんなヘツぽこ役者にくツついてゐないで、おい、こゝへ來てビールを注げ！』

『飛んだとばツちりだ。ひどい事になるもんだな。』

伏木は首をすくめ、お清と眼を見合はせて笑つた。

『本當に、此の人のやうだと賴母しいわよ。どんな人か知らないけど、それほど思はれりゃ本望だわ。私がその人ならばね――』

お光が云ひかけるのを、

『君がその人ならどうするい？』

と中途から口を入れたのはルパシユカの山崎だつた。

『私なら、どんな事をしてだつて一緒になるわよ。一緒になれなきゃ一緒に死んでしまふわよ。』

とお光は苛立たしげな調子で叩きつけるやうに云つた。

『はゝゝゝ、君なんども、蔭ぢや死ぬ程思つてゐる人があるかも知れないぜ。』

ダダの詩人の石川が云つた。

『大丈夫、そんな人が無い事だけは慥かよ。心にもない事を云つて、口先ばかりの、にせものゝ愛

を押賣をする人はあつてもね。』

女學生あがりらしいお光は、つんと拗ねながら云つた。

『にせものの愛か？　君の此の指環の眞珠のやうにね。』

石川は、お光の手を弄びながら云つた。

『この眞珠はこれでも本物よ。』

『本物のつもりでゐれば結構だ。』

と石川は笑つて、

『ところで、菊枝さんとか云つたね。あの人は未だなのかい？』

『もう歸る筈なんだけどね。下谷の方の叔母さん許まで、荷物をとりに行くつて三時頃から出て行つたんだから、もう遲くも歸らなきやならない筈なのよ。』

『岡田君。まあゆつくり呑まうぢやないか？　今夜は是非君に見せ度いものがあるんだ。』

石川は思はせ振りな調子で云つて、それから女給達に命じて又新しく食べるものや飲むものを運ばせた。

幻影

石川が、是非幹太郎に見せ度いといふ女給の菊枝がそこに姿を現はした時は、幹太郎もしたゝか呷つた麥酒やウイスキイの爲めに、眼先がちらつき、身體もふら〳〵と搖れるやうになつてからであつた。他にもあつた二三の客を片隅に押しやつて、定連たる彼等の仲間が、しやべるやら、歌ふやらの、傍若無人の醉態をつくしてゐるところへ、新しく化粧つたエプロン姿をすらりと見せて降り立つて來た菊枝は、

『お賑かね。』

と、にこやかに笑ひ乍ら、少し氣取つた調子で云つた。

『よう！　君を待つてゐたんだよ。』

石川はその新來の女給へ兩手をさし出して、

『こゝへ來たまへ。こゝへ來て、此の男の傍にすわつて呉れ給へ。』

と、自分と幹太郎との間へ引寄せて、

『岡田君。君に見せ度いといふのは此の人だよ。どうだい？　え？　似てゐるだらう？』

幹太郎はちらつく眼で、その菊枝と呼ぶ女給の顏を見た――それは、こんなところのウエトレスには一寸見られ無い美しい女だつた。濃い眉、大きな目、少し長面の輪廓の正しい顏、一たいに印象の強い眼鼻立で、稍〻厚手の唇のあまりに赤過ぎる嫌ひはあつたが、何處かに、令孃とも云ひ度いやうな打ちあがつた氣品さへ添うてゐた。が、その女が幹太郎の瞳を吸ひ寄せたのは、單なる美しさの故では無かつた。幹太郎は、その女を見せる爲めに今夜わざ〳〵自分を呼び出した石川の意圖を了解した。

幹太郎の瞳は、あゐ驚きと喜びとを以て、じつと菊枝の顏に据ゑられた。

『いやねえ。どうしたんですの？　どうして、そんなに私の顏を見るの？』

『ね、似てゐるだらう？　いつか君のうちで見た寫眞にそつくりぢや無いか？』

石川は得意さうに云つた。

『似てゐるつて、何が似てゐるの？　私が、何人かに似てゐるの？』

菊枝は、まぶしさうに眼ばたきをしながら云つた。

『あんたがね、此の人のラブさんにそつくりなんですつて。』

お光が口を添へた。

『まあ、然う？』

と云ひながら、菊枝は、思ひ切つて暗い表情をした、無氣味な幹太郎の顏を、不安さうに眺めたが、

『私が？　まあ、然うなの？　うれしいわねえ。』

とお座なりに云つた。

『此の男はね。』

と、大學生の木島が、舌もつれのする聲で云つた。

『ある女を戀してゐるんだ。此の男はまだ此の通り十八にしかならない子供なんだ。だから無論、女の方が年上なんだがね、その年上の女を、少年の純情といふやつで死ぬほど思ひつめてゐるんだ。』

『まあ、死ぬほど！』

菊枝は、わざとらしく驚きの眼を睜つた。

『ところがね、その相手の女が居無いんだ。何處へか行つちまつて、行方不明なんだ。それで、一生懸命に探してゐるんだ。可愛さうに、此の男はもう氣がちがひかけてゐる。』

『馬鹿！　氣なんぞ違ふもんか！』
幹太郎は、虚勢を張つて見せた。
『まあ！』と菊枝もいくらか心を動かしたらしく、
『それで、私がその女の人に似てゐるつていふの？』
『さうなんだ。そつくりなんだ。』
『さう、そんなに似てゐるの？』
『はゝ！　えらい者に見込まれたぜ。』
ボヘミヤン・ネクタイの伏木が嘲るやうに云つた。――一番酒に弱い伏木は、もうべろ〳〵に酔つて、ふら〳〵と身體を左右に搖りながら、わけのわからない歌のきれツぱしを、先刻から絶えず口にしつゞけてゐた。
『而して、その女の人はどうして行方不知になんかなつたの？』
菊枝は、次第に好奇心を動かし出したらしく、斯う熱心な調子で聞いた。
『そんな事はどうでもいゝさ。君に頼むからね。此の男をすこし慰めてやつて呉れ給へ。出來る事なら、その女の身代りになつて貰ひ度いな。』

石川が云つた。
『身代り――結構だわ！　私でお間に合ふならばね。ほゝゝ！』
菊枝は蓮葉に笑つた。
『君は――君は、何といふ名なんですか？』
幹太郎は、少しどもりながら聞いた。彼の眼は、火花を散らすばかりに燃えて居た。
『菊枝つてんですの。五六日前こゝへ來たばかり――どうぞ宜しく。』
菊枝はビイルの瓶をとりあげて、幹太郎の前のコツプを充たした。幹太郎は、ぐいと一息に呑み乾すと、そのコツプを菊枝の方へつき出した。
『ずゐ分あがるのね。』
菊枝がそれに注がうとすると、
『違ふんだ。君にあげるんだ。』
『さう。頂きますわ。だけど、本當に、そんなにあなた思ひつめてゐるの？　もし、私、本當にその人にそんなによく肖てゐるの？』
『うん。よく似てゐる！』

『さう、うれしいわねえ。』

『畜生！』

と、石川は突然身をひねるやうにして叫んだ。

『もうすつかりつまを合せてゐやあがる！』

『嫉くな！　嫉くな！　自分で紹介しといて嫉く奴があるか？　どうだ。二人の爲めに、改めて祝盃をあげようぢや無いか？　――なあ、岡田！　もう、その行方不明の方は忘れてしまへよ。そして、此奴で間に合せる事にしろよ。』

と、木島が云つた。

『此奴は失禮だわ。でも、此奴でも彼奴でもいゝわ。私は、此の人を引受けたわ。』

『よう！　よう！』

と、お光が頓狂な聲をあげた。と、今まで卓の上に平みついて、時々、鞴のやうな鼾を立てゝゐたルパシュカの山崎も、だしぬけに面をあげて、だが未だ、眠りから覺めきらない聲で、

『よう！　よう！』

と聲を合せた。――それがをかしかつたので皆一度にどつと笑ひ出した。

それからまた酒だつた。幹太郎は、滅茶々々に飲んだ。菊枝は、幹太郎を抱へ込むやうにして、彼女自身も時々ビイルのコツプを唇に持つて行つた。幹太郎の次第におぼろげなものになつてゆく醉中の意識には、唯、菊枝の顏ばかりが映つた。本當によく似てゐた。まるでそつくりだつた。幹太郎は、さうして八千代に寄添はれてゐる自分だと思つた。本當にそれが八千代の外の何人でも無いやうに思はれて來た。醉が樂しい夢を呼び、夢はやがて現を領した。幻影の八千代に抱かれながら、醉つた幹太郎は限りもなく幸福だつた。が、女が聲を立てゝ笑ふ時、大きく開かれた口の爲めに顏の輪廓がすつかり崩れて、八千代の幻影は無慘に引裂かれる。彼はそれを見まいとして、慌てて眼を閉ぢるのであつた。

そのうちに、激しい醉が意識を奪ひ去つた。彼はやがて、その幸福な思ひの中で、卓に額を押しあてゝ眠り入つた。

『はゝゝゝ！　先生とう〳〵眠つてしまつた。』

大學生の木島が云つた。

『うれしさうな顏をして眠つてゐるぜ。』

石川が云つた。

『かはいがつておやんなさいよ。その人、本當に初心なのよ。だから、そんな風に思ひつめたんだらうけど、本當にかはいさうね。』

と、お光が、菊枝に云つた。

『だけど、何だか氣味が悪いやうな氣もするわね。』

と、眼の下をほんのりと染めた菊枝は、健康にもれあがつた胸乳のあたりを膨らまして、いくらか得意さうに、聲を立てゝ笑つた。

幹太郎は、その翌くる日も、日の暮れるのを待ち兼ねたやうにして、カツフエ・ニンフ　出掛けて行つた。

『いらつしやい。』

と菊枝は、あでやかな笑ひで迎へた。が、菊枝の顏を一ノた瞬間、幹太郎は俄かに狼覺めがした。まるで似もつかない顏に見えた。

が、特別に好意を見せて呉れるやうな女のもてなし振が、幹太郎を惹き附けた。幹太郎は、菊枝を相手に、幾杯もの强いウイスキイを乾した。

醉の中には不思議な魔術がある。杯の數が重なつて、頰が熱くなり、眼がちらついて來るにつれ

て、些とも似てゐないと思はれた菊枝の顏が、次第に八千代の面影を映し出して來る。眼が、唇が額附が、刻々、微妙な變化を續けて、やがて、八千代そつくりになつて來る。

『本當によく似てゐる。君は、あの人にそつくりだ！』

幹太郎は瞳を狂喜にをどらして、思はず斯う叫んだ。

『さう、そんなに似てゐて？』

と、菊枝は、まばゆさうに眼を細めて、

『うれしいわねえ。――あんたのやうな人から、そんなに一生懸命に思はれる人は、本當に幸福な人だわ。私も、その人にあやかり度いわ。似てゐるだけでも、本當にうれしいのよ。』

菊枝は、滿更うそでも無ささうな調子で云つた。彼女は、此の身分も悪くなさゝうな、純情な若者に或る興味を有つたらしかつた。その戀人に自分が似てゐる、といふのも嬉しくない事は無かつた。あまり樣子が狂人染みてゐるので、いくらか無氣味にも思つたが、たとへ、形代としてにもしろ、さうした情熱の對象として選ばれたといふ事は、彼女の女性らしい誇を滿足させた。或る興味といふ以上、ある好意を、彼女は此の不思議な少年に有ちはじめた。

『だけど、本當にその人は知らないの？　あんたがそんなに思つてゐるつて事を。』

『知つてゐても、本當にして呉れないんだ。』
『本當にして呉れないの？　ぢや、片戀にしても果敢な過ぎるといふものだわねえ。で、その人どんな人なの？　きれいな人なの？』
『うん。』
『いくつなの。』
『二十――三か四だ。よく知らない。』
『まあ、それほど戀してゐながら、その人の年齢を知らないの？』
『二十三だ。たしか――』
『二十三なら、私より一つ上だわ。でも、その人、私見たいなあばずれぢや無いんでせう。立派な家のお嬢様なんでせう？』
『それは、さうだ！』
『どんな風の人なの？』
『どんな風つて？』
『どんな顔をしてゐるの？』

『君に似てゐるんだ。――美しい人だ。』
『まあ、私は些とも美しくなんか無いわ。』
『君も美しいよ。』
『私なんか駄目よ。――でも、そんな立派なお嬢様に似てゐるとすれば、私、光榮だわ。』
二人がこんな風な會話をしてゐると、隣の客の卓からお光が聲をかけた。
『いやに話がもてるわね。――どう？　菊枝さん、お名代はつとまりさう？』
『さあ――』
菊枝は笑つた。
『すつかりしんみりしちやつてるのね。』
『嫉けて？』
『嫉けるわ。』
お光はわざとらしくつんとした。
『いくらでもお嫉きなさいだ。』
菊枝は、いけぞんざいな調子で云つて、……

とその美しい横顔を眺めながら『似てゐる！　似てゐる！』と心の中で叫んだ。

……知死期の人の懸命な眼つきでじつ

それから、幹太郎は殆ど毎夜のやうに、カッフェ・ニンフを訪れた。そこの片隅の卓に坐つて、ウイスキイの醉がもたらす魔術の裡に、彼の久遠の戀人？　活きた幻影を見る事が、彼にとつての唯一つの慰めであり救ひであつた。而して菊枝も歡んで幹太郎を迎へた。菊枝は、素性は然う惡い女では無かつたが、流れ渡りの幾年かの間には、あの狹い露地を挾んで並んだ不思議な構造の家？細目にあけた窓障子の隙間から眼だけ出して、鼠鳴きをしながら行人を呼びとめたりするやうな、どん底の生活まで閲して來た女だつた。が、此の少年の純情は、未だ彼女のすさみつくした心の何處かにのこつてゐる聖らかな火をかき立てた。彼女の心は、好奇心から、興味から、次第に心からなる愛情へと變つて行つた。

『さう言へば、私の昔の戀人も何處かあなたに似てゐるのよ。えゝ、私だつて、昔は命がけの戀もした事があるのよ。私が十七の時よ。その時分札幌にゐて、女學校に通つてゐたんですけど、毎朝道で會ふ農大の生徒で、丁度、今のあなた位の年格好で、あなたのやうに、眼の大きな人だつたわ、私、その人に會ふと胸がどき〳〵して顔がほてつて――』

菊枝は、それが實際であつたか、唯、その場の出鱈目であつたか、そんな風に語り出す事もあつた。

『ねえ。その人とあなたとは何處か似てゐるわよ。私、あなたと斯うしてゐると、あの時分の娘らしい氣持になれて來るのよ。』

菊枝は、さう云つて、媚びるやうな眼で幹太郎を見上げるのであつた。

かうした二人の交情は、やがてカッフェ・ニンフにやつて來るあらゆる人々の眼につくやうになつた。主人の眼にもあまつて、菊枝は幾度も小言を云はれたりする程だつた。

が、主人の小言に辟易するやうな菊枝では無かつた。彼女は何人憚らず、まるで情人のやうな態度で幹太郎を待つた。

『ようよう！　御兩人！』

などと、他の客がやきもち半分に聲を掛けたりすると、

『いくらでもお嫉きなさい。この人私のスイート・ハアト！』

菊枝は、おど〳〵とする幹太郎を、……

さうして、毎晩カッフェ・ニンフに通ふ日が一月近くも續いた。

……。

それはもう夏も半ばの、じめ〳〵と濕氣を帶びて蒸暑いある夜の事であつた。その夜も例によつてそこへやつて來た幹太郎は菊枝を相手にウイスキイの醉がもたらす魔術の世界にさまようてゐたが、どうした加減か、いつになく、ひどく醉つて、とう〳〵そこに醉ひつぶれてしまつた。

呼びおこされて眼をさました時は、もう夜が更けて、自分の外には一人の客もゐなかつた。他の女給達が歸り仕度をして出てゆくのが、醉の覺めきらない眼にちらりと映つた。

『ねえ、もうお退けなのよ。さあ、お起きなさいつてば！』

菊枝が笑ひながら、肩に手をかけて引張るやうにしたが、幹太郎は起ちあがる力がなかつた。彼はひどく醉つてゐた。而して、むしやうに眠かつた。

『困るわねえ。こゝに斯うして置くわけにも行かないし――』

そんな聲を遠くに聞きながら、幹太郎は再び深い深い眠りの底に溺れて行つた。

――それから、どれほどの時間が經つたか、その間にどんな出來事が起つたか？　幹太郎は全く知らなかつた。彼が二度目に眼を覺ました時、彼は不思議な室の中に自分を見出した。四疊半ばかりの狹い箱のやうな室である。一方の窓の障子がほの白く見え、他の三方は暗い壁である。低い天井にぶらさがつた電燈が、濁つた空氣の中に、黃つぽい光を、淡くぼんやりと放つてゐる――

こゝは何處だらう？　一體どうしてこんなところへ來てゐるのだらう？　――此の疑問がちらと頭を掠めたが、その上追求する氣力もなく、しびれたやうな無感覺と無意識との中に再び引き戻されてしまつた。

が、そのうちに、そのしびれたやうな無感覺と無意識がやゝ明らんで來て、そこに一つの夢が現はれた。――夢の中には八千代がゐた。

『幹太郎さん！』

八千代がにこやかな笑顏を、自分に顏をさしよせて來る。そして、……

……あゝ、八千代さん！　と、うめくやうに叫びながら、あまりに激しいよろこびに息つまらせながら、彼は全身をわなゝかしてゐた――

と、次第に近づいて來た……。

あゝ！　と思はず叫んだ――と、そこで幹太郎は三度目に眼を覺ました。

彼の、今はじめて、はつきりと醉と眠りとから覺めた眼の前に、一つの顏がクロス・アップされた。

『どうしたのよ。そんな顏をして――』

赤い唇が白い齒を出して笑つた。黛によごれた眉、濁つた情慾に燃えくすぶつてゐる眼、白粉のまだらにはげた肌理の荒れた皮膚――今はつきりと覺めた眼で見るその顏は、夢の中の面影とはまるで似附かぬ顏だつた。

『君は――君は――』幹太郎は、恐怖に似た表情で、その顏をじつと打戍りながら唇ををのゝかした。

『どうしたの？』

『君は、何人だい？』

『まあ！　私がわからないの？』

『彼方へ行け！』

幹太郎は、起きあがりざま、兩手でつきはなすやうにした。

『まあ、どうしたのよ？』

『違ふ！　違ふ！　彼方へ行けッたら？』

『をかしな人、何が違ふの？』

菊枝は、みだらがましく笑つた。――その笑顏を見た刹那、彼は、一聯の惡夢を思ひ出した。さ

うだ、惡夢としか思へない昨夜の出來事が、今まで意識の底に封じ込められてゐた記憶が、おぼろに、やがて次第にはつきりと、その心のおもてに浮んで來た。汚女！

彼は、激しい恥と憤りとに全身が一時にくわッと燃えあがる思ひがした。

『まあ、どうしたのよ。そんな顏をしてさ。』

『彼方へ行けッたら！』

『をかしな人ねえ。』

笑ひながら搦みついて來る、菊枝の手をふり拂つたその餘勢で、幹太郎の平手はぴしやりと菊枝の片頰に飛んだ。

『まあ！　何をするの？』菊枝は、涙を溜めた眼で睨んだ。

それから二三分の後、幹太郎は、曉の微光のたゞよひ初めた街上に立つて、頭毛をひきむしりながら悶えてゐた。

『あゝ、おれはとう〳〵！』

彼は、斯う心の中で呻いた。おれは、とう〳〵童貞を失つた。あの聖らかな映像を、みにくゝ汚

してしまつた！

八千代さん、僕はもうあなたに會ふ事が出來ない！

彼は、大地に身體を叩きつけて、思ひ切つて慟哭したかつた。足もとからよろ〳〵と力が無くなつて、とう〳〵そこに倒れてしまつた。

ベアトリチエ

さうした不良の群に交りながらも、菊枝と會ふまでは幹太郎は未だ童貞を失はなかつた。菊枝は幹太郎を滅茶々々にして了つた。幹太郎は、恥ぢながら、悔いながら、菊枝の醜弄に身を委ねるより外無かつた。……

ある夜の二人が警官に脅かされて、其の場から女と一緒に引致され、女は拘留に處せられ、彼は呼び出された家人の手に引き渡されたのは、その夜の終りの頃であつた。父、博士の不名譽は云ふ迄も無かつた。博士は憤りの爲めに前後を忘れて、拳をあげて、その息子の頭を撲つた。が、幹太郎は、青ざめた顏を引歪めて、唯、にや〳〵と笑つてゐるだけであつた。

『ねえ、をぢ樣。』

と、宮子は、無念の涙を頰に傳はらせて、じつと腕組をしてゐる博士に向つて云つた。

『幹太郎さんは、苦んでいらつしやるのよ。あまり酷くお叱りになつてはいけませんわ。』

『いや、おれは今度こそ彼奴を放逐する。』

『いけませんわ。をぢ樣。』

『あんな者は、もうどうならうと構はん。あれは化物だ。』
『をぢ様は、幹太郎さんがどうしてあんなに苦んでゐるか御存じ無いの？』
『一つは仲間が悪いのだ。――だが、どうしてあんなに不良になつたのか、おれにはわけがわからん。』
博士は思ひ惑ふやうにして云つた。
『それには原因があるのですわ。』
『どんな原因なのだ？』
『幹太郎さんは苦んでいらつしやるのだわ。』
『何を苦しんでゐるのだ？』
『をぢ様は、それをお知りにはならないの？』
『わしは知らないのだ。』
知つてゐるなら教へて呉れといふやうに、博士は、賢しげな宮子の眼の中をのぞき込むやうにした。
『幹太郎さんは失戀してゐるのですわ。それで苦んでゐるのですわ。その苦みから、あんな風にお

なりになつたんですわ。』
宮子は、早口にさう云つた。
『失戀？　失戀の苦み？』
博士は忌々しげに、
『失戀したつて、一體何人に失戀したのだ？』
『云ひませうか？　それはね、八千代さんなのよ。』
『八千代？』
博士の顏色は見る見る變つた。
『え、、八千代さんなの。幹太郎さんは八千代さんを慕つていらつしやるんですわ。而して一生懸命に八千代さんを探していらつしやるんですわ。八千代さんが見つからないものだから、それで自棄になつて、あんな風におなりになつたんですわ。』
『宮子。それは本當なのか？』
『え、、本當ですわ。だから、をぢ様、幹太郎さんを救つてあげるには、八千代さんを探し出して來て、八千代さんに會はしてあげるより外無いのよ。――あの人を救つてあげられる人は八千代さ

んの外無いのですもの。』

宮子は斯う云つて嘆息した。宮子は、畢に受け入られぬ自分の心盡しを思うて、自ら憐れむの思ひに堪へないといふやうに濕つた睫毛をしばたゝいた。

『……』

博士は、うむーと心の中に呻いた。宮子に然う云はれゝば、種々と思ひ當る節が無いでは無かつた。幹太郎が八千代を戀してゐる？　あの八千代を幹太郎が？――博士は、いかにして自分が八千代を傷つけたのか、回想するに堪へぬ罪過の記憶に心をひきよせられながら、知らしめさゞるところ無き神の眼が、爛として己の頭上に輝いてゐる事を感じた。復讐は神にあり！　きびしき應報の鞭のうなりを、博士はその耳元に聞かざるを得なかつた。

『ねえ、をぢ様。八千代さんを探して來てお上げなさいな。あの人は、八千代さんに一目會へさへしたら、屹度救はれるのよ。私、あの人の日記を見ました。あの人の日記は八千代さんの事で一ぱいなのよ。あの人は八千代さんを女神のやうに思つてゐるのですわ。さう日記に書いてありましたわ。』

『女神のやうに？　馬鹿な！』

博士は、泣くが如く笑つた。自分によつて汚され、今、自分の子供をその胸に抱いてゐるかも知れないあの女を――と思ふと、博士は云ひやうのない奇怪な苦みで胸を切り裂かれるのであつた。

『をぢ様は、八千代さんの居るところを、本當に御存じないんですの？』

博士の苦痛を知らぬ宮子は、無邪氣に訊くのである。

『知らんよ。』

『八千代さんは、どうしてあんなに無斷で此の家を出て行つておしまひになつたのでせう？』

『……』

『黙つて出て行つておしまひになるなんてあんまりだわ。』

宮子の無心の一語々々が、博士の胸には、篦深く通る鋭い矢であつた。

博士は、ついと宮子の前を立つて、書齋に戻つた。而して、卓の上に兩肘をつき、兩腕の間に頭を抱へこんでじつと考へ込んだ。

警察の留置場で一夜を明かして歸つたその次の日から、父の拳に折檻されたその日の夜から、幹太郎は得體の知れぬ熱を出して、病床に就いた。長い間の不攝生から身體全體がひどく弱つてゐる上、殊に肋膜を痛めてゐる事が醫師の診斷によつてわかつた。

そこで、病院で一月餘りが過された。退院したのはもう秋も半ばを過ぎた頃であつた。

病院から家に歸つた當座の十日ばかりの間は、幹太郎は、部屋に引籠つてじつと考へ込んでゐたその分で落着いて呉れたらと、博士も愁眉を開き、宮子も安心したのであるが、それもしばらくの間で、彼のかなしい放浪は、やがて再びはじめられた。彼は、病後の、それでなくてさへ衰弱した身體で、蹌踉として街にさまよひ出た。つめたい秋風に、蒼白の頰を吹かせながら、彼はあてもなく、その面影を求めては、街から街へとさまよひ歩く人であつた。

カッフエ・ニンフには、もうあの菊枝の姿は見られなかつた。あの夜以來、何處かへ行衛をくらましてしまつたのである。仲間のうちで、役者の伏木は關西に去り、ルパシュカの山崎も、ダダ派の詩人の石川も、ある破廉恥な罪に座してその筋の手に捕はれ、萬年大學生の木島だけが、相變らず赤い顏をして管を卷いてゐた。女給のお光も靜岡の方の鄕里に歸つたとかでもうそこにはゐなかつた。お光は、石川の子を胎にもつて、その處分に困つてゐたとかいふ事であつた。

『いや、落膽する事は無いよ。屹度、見つかるよ。』

と、木島は、べろ〳〵に醉ひながら、幹太郎の肩を抱くやうにして慰めるのであつた。

『地獄、煉獄、やがて天國の門が君の前に開けるさ。僕が君の爲めにヴアジルの役目をしてやるよ

僕がね、屹度、君を、君のベアトリチエに會はしてやるよ。』

『いや、駄目だよ。あの人はもう僕には會つて呉れないだらう。僕はもう、あの人に合はせる顏は無いんだ。』

『は〳〵〳〵、合はせる顏が無いならば、どうしてそんなに探し廻つてゐるんだい?』

『一目でいゝ、たつた一目でいゝから會ひ度いんだ。一目あの人の顏を見れば——それで死んでも僕あ構はないんだ。』

幹太郎は頰杖をして、眼を空間に睜りながら囈言めく調子で云つた。

『だから、おれが會はしてやるさ。(哭くことなかれ、哭くことなかれ、あゝダンテ)か!(眺めよ、われこそは、われこそはベアトリチエなれ)か! は〳〵〳〵!』

木島は、へんな身振をして、しみのついた天井を振り仰ぐやうにしたが、

『(哭くことなかれ!)だよ。まあ、一杯呑め!』

と、幹太郎の杯に波々と麥酒をついでやるのであつた。

ビイルの醉、ウイスキイの醉に醉ひしれて、カフエ・ニンフを出たのは、もう十二時過ぎてゐた宵の熱鬧に引きかへて、人の散つたあとの街上には、此の季節に特有の濃い靄が、まばらな人影を

シルエットに浮べて、ところ〴〵の灯影が、ちらちらと夢幻的にまた〻いてゐる。木島もすつかり酔つてゐた。何か大聲でわめきながら、いぬころのやうに路傍に轉がつてゐる木島をあとにして、幹太郎はふら〳〵と神樂坂の通りを上にのぼつて行つた。

『おい、待て！　待て！　おれを打捨つて行くのは酷いぞ！』

あとから縋りつく木島を再びつきのけて、定まらぬ足もとを踏みしめ踏みしめ二三丁あるいて、電車通りを曲らうとする時、疾驅して曲り角からあらはれた一臺の自動車が危く彼につきあたらうとして、辛うじて横に外れた。

『氣を附けろ！』

と、運轉手が、よろ〳〵と横に外れた自動車の把手にしがみつきながら、聲を絞つて叱咤した。別に怪我はしなかつたが、避ける拍手に、のめりたふれた幹太郎は、つゞいて車上からの女の聲を聞きつけた。

『どうしたの？　怪我はしやしなくつて？』

さういふ聲には覺えがある！　彼は、はつと耳をそばだてながら、衝きあげられたやうに半身を擡げた。

『ちよツ！』

と運轉手が舌鼓を打つて降りて來ようとする時、起きあがつた幹太郎は、眼に見えぬ絲に引き寄せられたやうに、兩手を前に泳がせて自動車の方へ走り寄つた。

『なあんだ！　どうもしやしないのか？』

それを見ると、運轉手は、斯う吐き捨てるやうに云つて、把手に力を入れた。自動車は再び走り出して行つた。

幹太郎は一寸の間ぼんやりとしてその自動車の行衛を打戍つてゐた。窓越に見た車上の人？　くつきりと浮んだ横顔！　それをこちらへ振向けざまに、じつと此方を見たその大きな美しい二つの眸！　おゝ、それこそ、彼が二年に近い間日となく夜となく喘ぎ求めてゐるその顏、その瞳では無かつたか？

飯田橋の方を指して走つて行つた自動車は、もう幾十間の彼方に、深い靄の中に消え去らうとしてゐる。それを見た幹太郎は、はじめて何うしなければならぬかに氣がついたやうに、慌たゞしく四邊を見廻した。

丁度、そこに一臺の空車が走つて來た。

『おい！』

と幹太郎は呼びとめた。而して、停まるが早く車内に躍り込むと、あの自動車のあとを跟けて、あの自動車の行く先をつきとめるまで走つて呉れるやうにと命じた。

『へえ？　あとを跟けるんですか？』

『跟けるんだ。見失はないやうに、全速力でやつて呉れ！』

幹太郎は命じた。幹太郎の顏はいやが上に靑ざめ、その眼はむしろ殺氣を帶びてすわり、その强い命令的な語調には、否應を云はせぬ響きがあつた。加之、その荒い格子縞の鳥打をあみだに冠つた若い運轉手は、斯うした活動寫眞的場面の冒險的氣分にそゝのかされたといふやうにして、

『よし！』

と云ふや否や、運轉手臺に平みつくやうにして、全速力で走り出した。

水道橋の少し手前で、カラデツク型らしいその自動車に、五六間の距離に追ひつく事が出來た。それからは、常にそれだけの間隔を失はないやうに、先の自動車と速度を合はして、氣づかれぬやうに尾行を續けた。

先なる自動車は、水道橋から左へ曲つて、植物園に近いところで、一寸左に切れ、ひつそりした

横町を、二三町走ると、そこのあまり大きくない二階屋の、木の門の前に停められた。

素早く飛び降りた助手が、扉を開けると、はでな裝ひの八千代が、ゆらりと大輪の花が搖れるやうにして中から降り立つた。

『ご苦勞樣。』

鷹揚に運轉手たちをねぎらつてから、門燈の光の中に、もう一度そのくつきりとした姿を繪のやうに浮き立たせたと思ふと門の傍のくゞりをあけて中へはいつて行つた。

空になつた自動車は、一廻りして方向を換へる爲めに、そのまゝに走り出した。

この樣子を見定めた幹太郎は――幹太郎は、その時はもう自動車から飛び降りてゐたのだが、

『ありがたう。これでいゝんだ。』

と、袂から一枚の紙幣を摑み出して運轉手に渡した。

『もう、いゝんですか？』

『いゝんだ。』

『お歸りは？』

『歸りはいゝんだ。』

若い運轉手は、笑みを含んでぴゆうと口笛を鳴らした。そして、先なる自動車のあとについて走つて行つた。

幹太郎の胸はひどく鼓動してゐた。こゝだ。こゝにあの人はゐたんだ。とう〳〵見つけ出した！彼は心の中で叫んだ。かうして見つけ出すまでの長い間の辛苦の樣々が、一度に思ひ出された。幹太郎は、いきなり門柱にすがりついて哭き出し度い衝動に驅りたてられた。

かうして見つけ出した以上どうしても會はなければならない。彼は、くゞりをあけて中へはいらうとしたが、ふと氣がついたやうに、門燈を見あげた。

（志賀）

と、堅い文字が黑く浮んでゐた。

志賀？　それは八千代の姓では無かつた。ぢや、結婚したのか知ら？

八千代さんはもう結婚してゐるかも知れない。この想念は、彼を打摧いた。彼は、急に身體のしんがぢり脫けてしまつたやうな氣がした。

が、彼はすぐに思ひ返した。結婚しようがどうしようが、八千代さんが八千代さんである事に變りはないのだ。八千代さんを思ふ自分の心にかはりはないのだ。一目會ひさへすれば、一語話が出

來れば、それでよいのだ。幹太郎はさう思つて、更に勇氣を振ひ起してくゞりの戸に手をかけた時かたことゝ敷石に下駄が鳴つて何人か出て來た樣子だつた。幹太郎は思はず二三歩あとじさつたが

こと〳〵とくゞりに錠をおろすらしい音をきくと、然うしては居られなかつた。

彼は、いきなり、內から錠をおろしかけたくゞりの戸を、外から引きあけて、躍り込むやうにはいつて行つた。

『あッ！』

と、まだ十六七位の若い小間使は、悲鳴に似た驚きの聲をあげた。そして、逃げ出しかけた姿勢をそのまゝに、おど〳〵とした眼を此方に振向けた。

『だ、だれです？　あなたは——』

小間使は、ふるへる聲で云つた。

『八千代さんに會ひに來たんです。いらッしやるでせう。會はして下さい。』

幹太郎は、一生懸命にすがりつくやうな眼で女中を見ながら云つた。

『あなたはどなたなのでございます。』

『何人でもいゝ。會へばわかるんです。』

小間使は、尙ほ一寸の間幹太郎の樣子に眼を据ゑてゐたが、

『お待ち下さいませ。』

といふなり、玄關に逃げ込んで、磨硝子の戸をぴつたりとしめた。

幹太郎は、しめきられた戸の前に、しばらくの間立つてゐた。

が、いつまで經つても、誰も出て來る樣子がないので、思ひ切つてがらりと戸をひきあけると、土間にはいつた。今、八千代が脫ぎ捨てたらしい、はでな鼻緒の下駄が、紙障子越の仄明りに浮いて見えた。

『御免下さい。』

と、幹太郎は、どんな障碍をでも突き破つて、遮二無二會はねばならぬ氣持に驅り立てられて、殆んど叫ぶやうに云つた。

と、それを待ち構へてゐたやうにして、がらりと障子が引き開けられ、羽織無し、着流しの大きな男が立ちふさがるやうにそこに現はれた。

『何しに來たのだ。うるさいぢや無いか？』

かなり醉を帶びた聲だつた。あたまから押しかられたやうな威壓的な野太いバスだつた。

『八千代さんに會ひ度いのです。』

幹太郎は肩を聳かして云つた。

『八千代に會ひ度い。どうして會ひ度いのだ。』

男の聲には冷笑の響があつた。眉の濃い、眼の大きい、でつぷりと肥つた野性的な感じの男だつた。——幹太郎は、肉體の底からの本能的な反感が、むら〳〵とこみあげて來るのを感じた。

『是非會い度いのです。會はして下さい。』

『唯、會はして呉れぢやわからん。何の用か、用を云へ。』

『會ひ度いのです。會へばそれでいゝのです。』

男は、肩を聳かすやうにした幹太郎をじつと上から見おろしてゐたが、

『貴樣、不良少年だな！』

と、わめくやうに云つた。

『不良少年でも何でもいゝです。會へばわかります。どうぞ、八千代さんに會はして下さい。八千代さんに、一寸こゝまで出て貰へばわかります。』

『生憎だが、會はせられん。第一、そんな人はこゝには居らんのだ。』

『うそです。今、自動車で外から歸つて來たところを、僕は慥かに見たのです。』

『貴樣、あとをつけて來たのか？』

『さうです。』

『愈〻怪しからん。あとをつけて來て、會はせろ！　出せ！——冗談ぢや無いぞ。人を甘く見るにも程度がある。歸れ！　歸らんと警察につき出すぞ。』

『い〻え。歸りません。會はせて呉れなきや歸りません。』

『歸らなきや突き出す迄だ。何ぼう不良少年でも、圖々しいにもきりがある。おい！　歸らんなら本當に突き出すぞ。』

男は、吸ひかけの葉卷を片手に持ちかへると、太い逞しい片手を、幹太郎の鼻先に突き出すやうにした。幹太郎は流石にたじ〳〵となつたが、その時、しいんとしづまつた奥の方から、つやのある朗らかな聲が、何を云つてゐるのか判らないが、斷片的に、そしてかすかに幹太郎の耳にきこえて來た。それが、そこにゐる八千代の姿をまざ〳〵と彼の眼に描かせた。彼の心は拍車を入れられた馬のやうに躍り立つた。前後を忘れた彼はその男をおしのけて家の内に躍り込まうとした。

『此奴！』

男は小脇を潜らうとする幹太郎の胸元にどんと一つ拳をくれて、よろめくところを更に一突き、入口の閾の外に突き出すと下駄を突つかけて降り立つて、足蹴にもしかねまじい勢で、

『さあ、歸れ！』

『會はして下さい。』

硝子戸の前によろめき倒れた幹太郎は、地びたに手をつかぬばかりにして哀願した。

『いかんと云つたらいかん！　氣狂ひ！』

男は幹太郎の襟首を引き掴むと、門のところまで曳き摺つて行つた。

『會はして下さい。會はして下さい。』

幹太郎は猫の子のやうに男の腕につりさげられながら、ばたばたと手足を動かして悶えたが、男の大力には敵はなかつた。男は、幹太郎を門の外に突き出すと、ぴしやりつとくぐりの戸を閉ぢ、中から錠をおろしてしまつた。

偶像

男が、茶の間に引き返すと、八千代が、襖の蔭に立つてゐた。

『何ですの？』

『不良少年だ。お前のあとを跟けて來たのだ。而して、お前に會はせて呉れと云ふんだ。』

『まあ！』

『圖々しい奴だ。どうしても會はなきや歸らんと云ふから、突き出してやつたのだ。』

『まあ、いやねえ。』

と、八千代は眉を顰めたが、何となく異様な胸騒ぎがした。

『不良少年に跟けられるなんて、君が甘いからだよ。』

『だつて、仕方が無いわ。私、知らないんですもの。』

八千代は稍〻甘えるやうに云つた。

『だが、お前今日は何處へ行つたのだ？　待つてゐて呉れる約束だつたぢやあ無いか？』

男は八千代の保護者なる東洋製廠會社の重役山岸參治は、着た外出着のまゝの八千代の立姿を

眺めながら、詰るやうに云つた。

『御免なさい。一寸用事があつたものですから――』

『まあ、そのまゝでいゝ、一つ相手をして貰はうか？』

山岸は、中の間にもう初められてゐる酒の席へ戻つて、食卓の前の厚い座蒲團の上にどかりとあぐらをかいた。

八千代はさしむかひに坐つて銚子をとりあげた。

『どうだね？　君も一つ。』

山岸は、ぐいと乾した盃を八千代につきだした。袖口がまくれた時に近くむきだしになつた逞しい腕には、粗い毛が生えてゐた。

『あなたは隨分毛むくぢやらね。』

盃を受けながら、八千代はふとそれに目を止めて云つた。

『うむ。』

山岸は苦笑しながら、血の垂れさうなビフテキの大切をあぐりと食つた。大きな口、大きな鼻、鼻のわきにある大きな黒子。八千代は蟲唾が走るほど可厭なその顏を眺めながら、何て獸的な男だ

らうと思つた。どうして私、こんな男に假にも身を任せる氣になつたのだらうと思つた。――この一年間の眼まぐるしいまでの幾變轉が今更のやうに思ひかへされた。そこには、惡戯好きの運命が更にその意地惡い惡戯を恣にしたとはいふものゝ、どうして彼女がそれを恨み得たらう？　彼女は、それを避けようとしなかつたばかりか、むしろ自ら進んでその運命の翻弄に身を任せさへしたのでは無かつたか？　實際、益夫に別れてからの彼女はすつかり自棄になつてゐた。どうせ、此世にのぞみのない身、あるに甲斐無き身は、どうでもなれ！　と思つてゐた。……

……かうして、八千代は我れと我が身を濁りの中に淪めて行き、その美しい身を心を……

……投げ出したのであつた。

いくらか亡兄から殘されたものもあつたので、遊んでゐても生活には困らなかつたが、怠屈まぎらしに職業婦人の群に入つてタイプライタアなどを打つてゐるうち、水際立つた美貌は、若い會社員達の野心の的になり、中には熱い唇でふるへる言葉で思ひのたけを打出でる者もあつたが、八千代はそれをうるさいものに思ひながらも、惜みもなく媚をむくいては己れの魅力の效果をたのしむやうな氣持にもなつた。私、こんな媚婦だつたのか知ら？　と、我と驚かれもした。かくて、この

一年間の八千代はかなり暗い道を辿つてゐた。汚女！　彼女は自分で自分を罵らずにはゐられなかつた。而して、自分で自分の身體をむしり捨てゝ了ひ度いやうな激しい自己嫌惡に捕はれずにはゐられなかつた。が、時々、さうして眼を覺ます自省も、轉落する石を支へる一つの草の根ほどの力も無かつた。轉落する石――實際、彼女は千仞の谷底を眼がけて轉落する石であつた。

山岸と知つたのは、三度目に勤めたある會社の重役としてゞあつた。こんな見るさへむしづが走る男とどうしてこんな生活を續けるやうになつたかは、唯その時の氣紛れといふより外に說明しようも無いのである。强ひて云へば、その旺盛な獸性に惹きつけられた爲めとでも云はうか？　或は亦、何ものかに對する或る面當の氣持――自己虐待症的な氣持でもあつたのか八千代には自分で自分がわからないのであつた。

山岸參治はしかし唯一時の慰みものとして八千代に臨んでゐるのでは無かつた。さういふ階級、さういふ種類の中年者に普通なやうに、彼も亦天晴の漁色家ではあつたが、八千代には、他の多くの女達のやうにしては對してゐなかつた。彼は一年ばかり前に妻を失つてゐた。六つと四つとの二人の子供を殘して死んだ妻のあとへ、後妻として八千代を迎へ度いと彼は熱心に希望してゐるのであつた。かうして別宅に住まはせておく謂はゞお圍ひ者の地位から、正妻として邸に直し度いと、

今夜も彼は、口を酸くして八千代を説くのであつた。

『でも、この方が私氣樂でいゝのよ。お邸に行つて、左樣然らばの奥樣なんかになる事は私眞平！』

八千代はさう云つて笑つた。

『何故だらうな。――子供が面倒だといふのかな。子供は乳母が一人に一人づつつけてあるから、些とも君の手を煩はす事はないのだ。』

『子供も――私、大嫌ひだけれど――』と、八千代はその時ふとあの死んだ子の事を胸に痛く思ひ浮べたが、

『そんな事よりも、私、束縛されるのが可厭なの。』

『ぢや、斯うしてゐれば何時でも又好きなところへ飛んで行けるからとでもいふのかい？』

『然ういふわけでもないけど――』

『お前は――』と、山岸は『君』と『お前』とをちやんぽんにつかひながら、

『浮氣者なんだねえ。』

『さうね。浮氣者かも知んないわね。』

『お前はどうもへんな女だよ。おれには、君といふ女がどうもわからん。』

山岸は頭を振つて苛立たしげに云つた。ゐなかでの女學生上りなどには見られないほど十分教養もあり、また、山岸にはよくわからないのだが、或る心の深さをも有つてゐながら、ひどく出鱈目な、楽鉢なところのある八千代といふ女の存在は、感じの鈍い山岸にも不思議なものに思はれたのに違ひない。山岸は、眼もとをほんのりと染めて、愈〻なまめかしい美しさを添へた八千代の顔をまじ〳〵と打眺めた。

『どうして、そんなに私の顔を御覽になるの？』

『どうも君はわけのわからない女だよ。』

『私もさう思ふのよ。わけのわからない女だと――』

『茶化してゐるのか？　おれを――』

『どう致しまして。』

山岸が、聊か怒氣を含んで何か云はうとした時であつた。小さい小間使が慌たゞしげに其處にはいつて來て、

『あの、旦那樣――』と云つた。

『何だい？』

『お庭の木戸のところにへんな人が立つてゐます。』

『へんな人が――？』

『はい。』と、小間使は恐怖の爲めにおど〳〵としながら、

『先刻の男の人らしいんで御座います。』

云ひかけて、耳を傾げるやうにして、

『あれ、足音が致します。』

山岸も、八千代も、ぢつと耳をすました。雨戸を隔てた庭先で、なるほど、何者かの氣配がする。『潜りはおれがしつかりと締めたのに――ぢや、またはひり込みやがつたんだな。何といふしつこい奴だらう。』

と、山岸は忌々しげに、

『だが、八千代さん、彼奴は君の名を知つてゐて、君に會はして呉れといふのだがね。君は不良少年にお知己のがあるかい？』

『いゝえ。そんな覺えはないわ。』

八千代も流石に安からぬ面持になつた。

『何うかして君の名を知つたのかも知れないね。若しかしたらきじるしかも知れない。』

山岸は尙ほも耳をそばだてたが、雨戸の際に忍び寄つたらしく、近々とものゝ氣配が動き近づいたのを聞きつけると、うつちやつては置けぬといふやうに決然として立ちあがつた。そして、縁に出て、自分で雨戸を一まいからりと引き開けた。

明けられた雨戸の隙から、さつと庭前の闇の中に電氣の灯影が流れた。その灯影に照らし出されながら、しかし、逃げようともせずにぢつと立つてゐたのは、先刻の少年だつた。

『貴樣。未だこんなところに愚圖々々してゐたのか？』

と、山岸は緣端に立ちはだかつて大喝した。

幹太郎はそれでも逃げようとはしなかつた。彼は、幽靈のやうな靑ざめた顏をして、眼ばかりはきら〳〵と燃えるやうに、部屋の中をのぞき込んだ。

『一體どこからもぐり込んだのだ？　泥棒のやうな眞似をしやがつて？　警察へ突き出すぞ。』

山岸は重ねて怒鳴りつけたが、幹太郎は怖れも逃げもしなかつた。

『八千代さん、八千代さん！』

彼は、立ちはだかつた山岸の袖の下から、明るい部屋の中をのぞき込んで、そこに八千代の姿を

見つけると、彼は狂喜の叫びをあげた。

そこへ出て來た八千代は、山岸の肩越に、その不思議な闖入者の方へ眼をやつたが、それが幹太郎である事を認めると――一見、前とはすつかり違つてゐるが、よく見ればたしかにそれが幹太郎である事を認めると、はつと聲を立てんばかりに驚いた。

『まあ！　幹太郎さん！』

かう云はうとして、口もとまでつきあげて來た言葉を辛うじて制へた。

『八千代さん！　八千代さん！』

幹太郎は繰返した。八千代を見得たうれしさで、彼はもう一ぱいだつた。そこにゐる男などはもう彼の眼中には無かつた。

『八千代さん。僕は會ひ度かつたのです。あれからずつとあなたを探し續けてゐたのです。八千代さん！　僕は――僕は、あなたに會ひ度かつたのです！』

幹太郎はかう云ひながら、八千代にすがり附かうとでもするやうに、兩手をあげてのめりかゝつた。

『馬鹿！』

山岸は叫びながら、足をあげて幹太郎の額をはたと蹴りつけた。蹴りつけて、蹴り離して置いて雨戸をぴしやりとしめた。

『八千代さん！　八千代さん！』

幹太郎の悲しげな聲が雨戸の外でした。ぱた〳〵と戸を叩く音がした。

八千代は、緣と座敷との間の闇のところに突立つたまゝ、青ざめてふるへてゐた。

幹太郎が自分を愛してゐた事は八千代も知つてゐた。が、別れてから二年に近くなる今日の日まで、絶えず自分を思ひ續けてゐたといふのは本當だらうか？

信じられないやうな氣が八千代はした。が、あの夜から、毎夜のやうに訪ねて來る幹太郎の、狂とも痴とも云ひ度い姿が、その嘘で無い事を證據立てた。幹太郎は毎夜のやうに訪ねて來た。が、八千代は留守だと云つて會はなかつた。八千代は、あの少年の純情の前に、濁りつくした汚れつくした自分を曝すに堪へ無かつた。

『今日もお留守だと申しましたら、ぢや、どうしても會つてくれないんですねつて、ほろ〳〵と泣き出すので御座いますよ。どうも、あの人少し氣がへんらしいのでございます。』

小間使はこんな風に告げた。

『氣味が惡う御座いますよ。昨日は午頃から門の前にぢつと立つてゐたさうで御座います。讃岐屋の御用聞きが申しました。妙な男が立つてゐるつて。旦那樣に申しあげて、警察に引渡した方がよろしいでは無いでせうか。』かう告げた事もあつた。

『こんな手紙がお玄關に落ちて居りました。戸の隙間から入れたらしう御座います。差出人は書いてありませんが、屹度あの人だと思ひます。あの人は昨夜も遲くなつてからお庭に忍び込んだらしう御座いますから。』

或る朝、小間使が然う云ひながら八千代に渡した手紙は、白い角封で、宛名のところには、唯八千代樣としてあつた。

八千代はその手紙の封を切つて讀んだ——

（八千代さん。あなたはどうしても僕に會つて呉れないのですね。僕があなたに別れてからどんなにあなたを探したか？　僕はあれから二年近い歳月の間、一日でもあなたを探さない日は無かつたのです。僕は二年の間、あなたを探す爲めにばかり生きて來たのです。さうして漸くあなたを探し當てたのです。）

手紙はそんな風に書き出されてゐた。

（それなのに、あなたは僕に會つて呉れない、あなたはあまり慘酷です。僕がどんなにあなたを慕つてゐるか？　やうやく物心づいた頃から、戀といふ字の意味をも知らぬ幼い日から、僕はあなたを想ひ續けてゐるのです。戀——否、戀以上です。あなたは僕の女神なのです。僕の偶像なのです。僕はあなたを想ふ事にのみ此の生甲斐の全部をかけてゐるのです。）

あの人は、私がどんな女だかつて事を知らないのだ——八千代は斯う心の中で云つた。魂に血のにじむおもひだつた。

（あなたは結婚なすつたのでせう。それであなたは會つて下さらないのでせう。けれども、僕は、あなたの御主人のお考へになるやうな不良少年ではないのです。否、不良少年かも知れませんが、僕を不良少年にしたのは、あなたに會へない苦しさがしたのです。僕は、あなたに對してだけは不良少年では無い筈です。もう人の妻となられたあなたに、僕が何を求めませう？　僕は唯一度あなたに會つて頂き度いのです。そして、僕がどんなにあなたを戀ひ慕ひ且つ崇拜してゐるか？　僕の氣持を聞いて頂き度いのです。もうずつと前の事、あなたが僕の家にいらつしやる頃、僕はあなたに手紙をあげた事がありました。しかし、あなたは手紙に書いた僕の心持を、眞面目に受取つては

下さいませんでした。僕には何よりもそれが悲しかつたのです。死ぬほど人を戀しながら、その戀を本當にして貰へない位なさけない事があるでせうか？　八千代さん、僕はあなたに、僕の此の熱い心を一度受取つて頂き度いのです。一度受取つて下さりさへすれば、あとは掃溜へ打ちすてるなり、どうなさらうと構ひません。兎に角、一度會つて下すつて、僕がどんなに苦しんでゐるかを見てやつて下さい。そして、出來るなら優しい慰めの言葉を一語でもいゝから掛けてやつて下さい。その上、若し、あなたの足の爪先へなりと一つの接吻をお許し下さるならば――否、そんな我がまま事は申しません。兎に角一度會つて頂けばそれでいゝのです。唯、それだけの事ならば、許して下すつてもいゝではありませんか。あなたが人の妻になつていらッしやるにしろ、唯、それだけの事ならば――ですが、あなたはどうして、あんな男の妻なんかにおなりになつたのでせう。僕は悲しい。僕の女神が、僕の偶像が、あんな男の――と思ふと、僕は腹が立つのです。

併し、こんな事をいふ資格は僕には無いのです。八千代さん何故あなたが僕に會つて下さらないか僕はよく知つてゐます。僕はもう墮落してゐるのです。僕にはもうあなたに會つていただくだけの價値が無いのです。）

手紙はそんな風に書かれてあつた。そして、更に長く長く書き續けられてあつたが、八千代はもう

うそれ以上讀み進める勇氣が無かつた。

此の少年のあまりに純粹な熱情は、八千代にとつては寧ろ堪へがたい苛責だつた。幹太郎さん！女神だなんて、偶像だなんて、――あなたは、私がどんな女になつてしまつたか、些とも知らないんだ。

八千代は血の出るほど唇を嚙んで、身を押しもむやうにして思ひ悶えるのであつた。

嗚咽

『さうですか？　八千代さんは結婚してゐるんですか？』
益夫は、ひどく昂奮した幹太郎の顏を見ながら云つた。
『多分さうだと思ひます。男の人が出て來ましたから。』
『男の人が？　それが八千代さんの旦那樣なんですね。』
『多分さうだらうと思ひます。』
『だらうと思ふ？　ぢや、唯、推察なんですね。』
『えゝ。推察です。しかし、間違ひ無い筈です。』
幹太郎は答へて、一寸間を置いてから、
『迚も可厭な奴だつた！』と、吐き出すやうに云つた。
『可厭な奴？　どんな風の人でした』
さう聞きながら、益夫の心は、複雜に動くのであつた。
『あんな奴が、八千代さんの旦那さんになつてゐるかと思ふと僕は本當に情無かつた！』

『ふうむ。』
益夫は、呻くやうに云つたが、
『だが、たゞ、推察だけぢやわからない。男の人が居たからつて、それが旦那さんとは限らないからね。――で、君は八千代さんに會つたんですか？』
『いゝえ、會はないんです。』
『會はない？』
『えゝ。會つて呉れないんです。』
『會つて呉れない？――左樣ですか？』
益夫は、もの思はしげな眼附をした。
『八千代さんは、どうしても會つて呉れないんです。僕は、毎日毎晩八千代さんの家の周圍を犬のやうにうろついてゐるのです。一日でも會ひたい、一言でも口をきゝたいと思つて、この一週間ばかり、門の前に立つたり、こつそり庭先に忍び込んだり、さんざん苦心をしてゐるんです。手紙も屆けました。けれども、手紙の返事さへあの人は呉れないんです。』
狂人染みて血走つた幹太郎の眼は一ぱい涙をためてゐた。痩せ衰へた彼の身體は、その激情を支

へかねたやうにわな〳〵とわななないた。益夫は、いたましげにそれを眺めながら深い溜息をついた。

『辻さん、お願ひです。一目僕に會つて呉れるやうにあなたから頼んでみて下さい。あなたが頼んで下されば、あの人はきつと僕の願ひをきいて呉れます。』

幹太郎は、一生懸命に縋りつくやうに云ふのであつた。

『さあ、頼むのは何でもないが、そんな風だとあの人は僕にも會つて呉れないかも知れません。いや、多分僕にも會はないだらうと思ふ。』

『そんな事はありません。あなたに會はないなんて、そんな事はありません。』

『會つて呉れるくらゐなら默つて姿をかくしたりなぞはしなかつた筈だ。多分僕にも會つては呉れないだらう。』

と、益夫は後半を獨言のやうな調子で云つた。

『いゝえ、あなたは僕とはちがひます。あなたになら會はないつてことはありません。』

『だが、今、君が云ふやうに、八千代さんがもう結婚してゐるといふのなら、僕だつてうか〳〵と訪ねて行く事などは出來やしない。』

益夫は、かう云つて再び嘆息した。——八千代の消息がわかつたといふ事は、益夫にとつても飛

び立つばかりの喜びであつた。益夫は幹太郎から頼まれる迄もなく、直ぐにも八千代の許に飛んで行きたかつた。しかし、一つの反省が重く彼の心を壓した。結婚といふのが、單なる推察に過ぎないまでも、八千代に新しい生活が創められたといふならば、それを亂してはならないのだ。あの人は、もう自分には會はないつもりで居る。それは賢いあきらめだ。彼女にとつても、又自分にとつても——と彼は思ふのであつた。

眼を閉ぢ手を組んでしばらく沈吟してゐた益夫は、やがて眼を見開くと靜かな調子で幹太郎に云つた。

『幹太郎君、君の苦しい心持は僕にもよくわかつてゐる。愛する事は苦しむ事だ。愛が深ければ深いほど、又苦しみも深い。僕も君と同じ樣に苦しんでゐる——』

『あなたも？』

と、幹太郎はぢつと益夫の顏を見上げるやうにした。

『さうだ。僕も君と同じ苦しみを苦しんでゐるのだ——僕も君と同じ樣に或る一人の女を愛したんだ。そして苦しんだんだ。いや、今も愛してゐるのだ。さうして苦しみつゝあるのだ。』

『或る一人の女を？』

と、幹太郎は對手の心の裡をのぞき込むやうな眼で益夫の顔を見た。その鋭い眼をさけるやうにしながら、

『はゝゝ。』

と、益夫は力なく笑つて、

『或る一人の女だ。君の知らない女だ――そんな事はこもかくとして、ねえ、幹太郎君、君はまだ若いのだ。若さのなかにはもつと自由な世界がある筈だ。何故君はそんなに一人の女ばかり思ひ詰めて居なければならないんだらう？　あの人ばかりが女では無いのだ。僕は君にすゝめるが、君のあまり一本氣過ぎる情熱を他の對象に向け變へる事は出來ないものだらうか。』

『ぢや、あの人の事は忘れろといふのですか。そんなにお手輕に忘れられる位なら、こんなに、苦しみはしません。』

と、幹太郎は苛立たしげな調子になつて、

『あの人ばかりが女ぢやない――そんな月並な云ひぐさをあなたから聞かうとは思はなかつた。本當に人を戀した事の無い人間だけがそんな事が云へるのです。八千代さんはたつた一人の女です。信ずる神は一つより無い。八千代さんは僕にとつてそのたつた一つの神なのです。』

『そんなにまで君は思ひ詰めてゐるのかなあ。』

と、益夫はもう一度嘆息した。この少年の純粹な愛と、激しい情熱とは、強く彼の心を撃つた。人を愛するの道はまことに斯の如くであらねばならぬ。この少年のそれに比べれば、自分の八千代に對する愛は、何といふなまぬるいものであつたらう？　自分に若しこの少年の愛の自覺の半ばだにもあつたならば、あの樣な悲劇の中に八千代を陷し入れるやうな事は無かつた筈なのに――、と益夫は沁々思ふのであつた。

『ねえ、辻さん。お願ひです。あなたから、賴んで見て貰つて、それで駄目なら僕はあきらめます。兎に角、賴んで見て下さい。お願ひです。』

幹太郎は繰返した。

『さうか！　そんなにまで君が云ふんなら、駄目かも知れないが――多分駄目だと思ふが、僕が行つて賴んで見よう。で、一體、何處なんです。八千代さんの家といふのは？』

『小石川です。林町百三十九番地。志賀つてうちなんです。』

『志賀？』

『さうです。それが、八千代さんの旦那さんの名前なんでせう？』